濕疹を生ずるの虞れがありますから、これは醫師の監督の無い限りは用ひてはいけません。それで少し面倒ですが、初めに醋酸鉛の溶液を毛髮に塗つて置いて、其次に硫化ナトリウム或は硫化アンモニウム等の溶液を塗れば、毛の中に硫化物が出來て黑くなります、この樣に二段の染め方をすれば手數ではありますが、これなれば決して頭の皮膚を刺戟することも無く、また色も割合によく出るものであります。

第五編　美容法

美容法の意義

美容法卽ちコスメックは皮膚科學に重要なる位置を占めて居りますが、これまで講述し來つたことは、卽ち皮膚の疾患を治療して美容を保たしむるのでありますから、本講の總ては一面に於て美容法講義と云ふことも出來るのでありますから、本編に於ては美容法の意義に就て說明を加へるに止め、身體各部個々の美容法に就ては他日稿を改めて講述します。

さて男でも女でも非常の美人と云ふものは滅多にありませぬが、それと同時に甚しい醜いものも少く、普通十人並と稱するものは先づ美人と云ふて宜しい、美を好み、醜を惡むは人情であつて、化粧も程よく行はれて容色が美しく見ゆると、何人の眼にも快く感ずるものであります、或程度までは社交上の作法からしても化粧は大切なことになつて居ります、昔し德川三代將軍家光公は、諸侯に接する時は一條の髮の亂れも見せなかつたと云ひますが、これは武將としての威嚴を損せぬ爲めであつたのに相違ありませぬが、これまた矢張一種の化粧と見てよろしいのです、この樣に何人にても容色を正しく美しく淸らかにすると云ふことは必要であります。

美容法と云ひますと、低い鼻には隆鼻術を行ひ、兎唇には成型手術を行ひて人並の口元にしますのも、無論その中に含まれて居りますが、此等は外科的成型手術に屬するのでありますから、これは略します、併し皮膚の光澤や色合などは、其人々銘々の心がけ次第でどうにもなります、尤も健康なる皮膚は必ずしも美しい皮膚と限つて居りませぬが、醜い皮膚の大部分は不

健康者に多いのでありますから、皮膚の衛生を守れば自然美容法に適ふわけになります、人間の皮膚には一種の艶々した光澤がありますもので、大理石の人形がイカに白く奇麗であつても迚も此生きた人間の皮膚の色には及びません、それで我々の美容法と云ひますのは、ツマリ此天然の光澤を發揮して長く衰へしめず、或は或病氣の爲めに光澤の悪くなつたのを直すと云ふことですが、其方法は何でのるかと申すと、つまり皮膚の健康にあります、彼の病氣の爲めに衰弱して居る人は顔色に限らず、一體の皮膚が蒼白く頗る醜く見えますが、無病健全なる人の皮膚は血液の循環よろしきを得て紅色を呈し、適度の皮脂分泌して皮膚をうるほし、其色彩光澤に得も云ひ難い、一種の美しみが現れ居るのが多いものであります、然るに世間の人は、多く此根本的道理を忘れて、或は藥劑の力を借りて容色を美にせんと欲し、或は有毒なる白粉を用ゐて醜を被はんとして居ります、尤も或る場合には藥劑も必要であり化粧も無論必要でありますが、此根本を忘れては何んにもなりません、それでは眞の美容法には如何なることが必要であるかと申しますと、細かなことはいろ〳〵ありますが大體に於ては左の四種の注意が根本義

となつて居ります。

第一　身體を健全にすること、

第二　皮膚を清潔にし、且つ皮膚の抵抗力を強むること、

第三　粗惡の石鹸或は有害物を含んで居る化粧品を使用せぬこと、

第四　適當なる化粧を施すこと。

眞の美容法

講者は美容法に就ていろ〳〵の方面から質問を受けましたが、其趣意は萬人一樣であつて、色を白くするにはどうすれば良いかと云ふのが質問の主意であります、して見ますと多くの人は色の白いのは卽ち美容と心得て居るやうに見える、美人の定義は色の白いことゝ云ふのは一般の人の考へであります、尤も色の白いのは美は美に相違ありませんが、醫者の方から云ひますと、色の白いのは必ずしも美人でないばかりで無く、或場合に於ては色の白いのは却つて不美人と云はなければならぬことがあります、然らば醫學衛生上から見た美とはどんなものであるかと云ひますと、人間天然に受けた美質の一とでありまして、此

美質をます〳〵發揮するのは卽ち美容法であります、此點に於ては流石に歐米人は進歩したもので、日本人のやうに無暗に白粉のみを塗り立てゝ色彩の配合などに一向無頓着で唯塗りさへすれば、それで良いなどゝ云ふことはありません、歐米人と雖も白粉を使はぬわけではない、否日本人よりは確かに化粧に浮身をやつして居りますが、其遣り方は上手で、いかにも自然的であります、顏の赤い人は桃色の白粉を塗けるとか、黃色な人には黃色の白粉と云ふ樣に、其地肌卽ち天然の色に人工を加へて美しくすると云ふのであつて、決して日本人のやうにタドンの樣な顏を白壁の如くに塗り立てはしませぬ。

（健康は美容の根本）　それで美容法卽ち身體天然の美をます〳〵發揮するには如何なる方法が良いかと申しますと、前にも述べました通り、第一は身體の健康にあります、いくら色が白くても年中病床に呻吟して居る人は決して美人と云ふわけにはいきません、それよりは少し位色が黑くても身體の丈夫な無病な人は顏色でも手足の色でも活々としてどの位綺麗だか知れません、前者は何と無く人に憂鬱の觀念を與へるに引き換へて、後者は逢ふ人にも何となく愉快な

觀念を與へるのであります、大凡美の目的は人に快感を與へるにありますから色の蒼白き病者よりは、色の淺黑く健康な人の方が却つて美の目的に成功して居るのでありますから、色を白くすると云ふことよりも、先づ身體を强壯にすると云ふことが美容法の本來の目的であります

さて身體を强壯にするにはいろ〳〵の方法もありますが、飮食物に注意して運動を盛んにするのが唯一の方法であります、食物は何を食べても滋養分の消化吸收と、不用物の排泄さへよければ、それで好いのですが、殊に肉食を多く攝るとか、牛乳を長く用ゐるなどは確かに皮膚を美麗ならしむる效があります、單に健康と云ふ點から見れば菜食も決して惡いことはありません、否反つて良い位でありますが、皮膚を美麗にする點に就ては肉食の方遙に優つて居ります、歐米人が一般に皮膚の色合の良いのは、いろ〳〵の關係もありませうが、第一はこの肉食が影響するのであります、日本人でも常に肉食を多くして居る人は何と無く色澤が綺麗であります。

（皮膚の淸潔）　皮膚の淸潔と云ふことは美容に大なる關係を持つて居ります、汚垢や塵埃の皮膚を荒すは云はずもがなでありますが、其外一旦皮膚病にかゝると、跡はなか〳〵元の樣に

なり惡いばかりで無く、病氣によつては色素斑が出來て、終生取れぬものさへあります、力めて皮膚を清潔にして此等皮膚病に罹らぬやうに注意なし、一面食物に注意して體内より起る皮膚病を豫防しなければなりませぬ、皮膚の抵抗力が弱ければ感冒に罹り易いばかりで無く皮膚病に罹ることも多いのでありますから、冷水浴を行ふて皮膚の抵抗力を強むるは殊に此目的に適つて居ります、入浴も良いには相違ありませぬが、餘り度々入つては反つて皮膚が弱くなります、また餘り熱い湯ですと、皺が早くよるのは缺點でありますが、冷水浴は此等の缺點はなく、單に皮膚の養生になるばかりで無く、他にもいろ〳〵の有益なことがありますから、美人になりたい人は必ず此法を勵行するが宜しい。

（化粧用品の注意）　粗惡の石鹼は皮膚を荒し、また鉛分のある白粉を用ゐるのは皮膚に汚斑を拵へる原因であるから排斥しなければいけません、講者の知合なる某女醫は頗る美容法に苦心された人ですが、此人の實驗談に、小兒が產れた時から五十倍の硼砂水を、新しい清潔なガーゼに浸して、一日一回又は二回位づゝ顏面を拭ひますと、生長の後に顏面の色澤も良く、紋

理も極めて綺麗になります、また成長した人でも朝に顏を洗ふ水の中に硼砂五分か一匁位を溶かして、其れで洗ふと非常に綺麗になるとのことですが、これは左もあるべきことですから、皮膚の荒れて居る人や、色素斑のある人は特に此方法を實行するが宜しいのです。

（化粧の奬勵）　藝人社會によくある、日髮、日風呂で七ッ道具で磨き立てるのは、其當座こそ綺麗に見えますが、後に却つて早く容色を損ずる基となります、また無暗に白粉を塗り立てるのも宜しくありませぬが、適當の化粧は皮膚の美をますゝ〳〵美ならしむるものですから大に奬勵すべきことであります、容色を調ると云ふと、何と無く輕薄者流の如く聞へ、男子は勿論女子迄も蓬頭亂髮得々として街路を横行して居るものもありますが、此等の似非豪傑は衞生上からも排斥しなければなりません、容色を調るは自分にも快く、人にもまた快感を與へ、それにまた衞生上にも宜しいのでありますから、或程度までは俗に云ふ『ハイカラ』を奬むるものであります、現に歐米の文明諸國にありては、このことはなか〳〵八ケましく、衞生上からもまた禮儀上からも大いに『ハイカラ』を奬勵して居ます、また事實に於ても文明人と野蠻人と分るゝ

點は、此化粧法の善惡卽ち衞生に適するや否やによつて定まるのでありますから、眞の美容、眞の『ハイカラ』は大に奬勵すべきことであります、『ハイカラ』と云ひますと、彼のモミ上げを短くしたり、カラーを高くしたりする無意義にして且つキザなる『ハイカラ』と思ふ人もありますが、講者の云ふのは決してかゝる野卑のものでなく、衞生美容上より見て間然する處の無き眞正の『ハイカラ』を云ふのであります。

皮膚科學講義 終

眼科學講義

第十編　屈折機の異常

本講義は普通眼科學の順序によらず重要なるものより講述します

近視眼

(近視眼の症狀)　近視眼と申しますのは其名の如く近くで無ければ物の視えぬ卽ち遠くの物は判然と分らぬのが特徴であつて、これが爲めに尠なからぬ損失を受けますもので之を大にしては天象の奇、山水の美一も之を窺ふことが出來ず、之を小にしては日常百般の事物等擧げて數ふべからざる不便を感ずるものであります、そして此近視ある爲めに國民の義務たる兵役に就くことも出來なければ、これが障碍となつて己れの欲する職業に從事することも出來ないばかりで無く、また視器の官能如何は直接智識の發達に向つて多大の影響を及ぼすものでありますから、幼時よりして高度の近視ある者は往々其性情に缺ける所があります。

近視の未だ高度ならざるものにあつては補正眼鏡によつて其視力を補ふことが出來ますが、かくの如きは堂々六尺の偉軀を以て一小眼鏡の奴隷となるに異ならざるものであつて、若し誤つて之を忘れたる場合には丸で盲者同樣であつて、行住座臥其不便は言に云ふべからざるものがあります、學校に入つては黑板の字を詳にせず、道を行きて友に禮せず、家を訪ふに號を辨せず、物に躓き車馬に觸れ物品を錯り、居室に迷ひ、明月を眺めて朧月となし、敵に逢ふて敵となさゞる等の失態を來すばかりでなく、一朝水火の災厄に遭遇しては他に先んじて徒らに身を害ふの不幸に際會する等實に償ふべからざる危險を負ふものと云はざるを得ないのであります。

要するに近視眼なるものは、一定の距離即ち遠點以內にあるものは、充分に明視することが出來ますが、遠點以外にあるものは朦朧輪を畫し、其の像不明瞭なものであります、醫學上では二D $(\frac{1}{2})$ 以下の近視を輕度とし、二D乃至六Dを中度とし、六D $(\frac{1}{8})$ 以上を强度として區別してあります、それから近視者の他の症候としては、物を重復して見ることや、眼球硝子體に

溷濁がある爲めに、眼前に蚊の飛ぶ如く見え、其蚊はいくら追ふても去らざる、所謂眼前飛蚊を訴へるものでありますが、それよりも困りますのは、筋性眼精疲勞と云ふて、近業をする時に眼が疲れ易くして、長く業務を執ることが出來なくなり、甚しきは外斜視を起すこともあります。

（原因）　さて此不幸不便にして然も危險を伴へる近視眼は何によつて起るのであるかと云ふに、或學者は之を遺傳と唱へ、他は之を非遺傳と爭ふて容易に決せざる樣でありますが、多くの學者の意見を綜合して見まするに、近視眼者の子女の多くは矢張これを有することの多きは事實である處から推察しますと、一方には遺傳的素質があつて、他に之を助長誘致するの誘因があつて遂に近視に陷るものと見なければなりません。

近視を發生する原因の多くは讀書習學にあつて、之を發生する場所の多くは學校であります近視を目して一の文明病と稱するのもつまり此理由に外ならぬのであります、野蠻草昧の住民に近視を發見することは極めて少く、また繁華の都市に多くして、僻陬の村落に稀なるの事實

も、矢張文明病たるの爲めでありませう。

近視は學生殊に高等教育を受けたる學生に多いものであります、有名なるコン氏の調査には小學校時代には百人中十四人、中學校時代には百人中十六人位しかないものが、大學時代になりますと百人中實に六十人と云ふ多數を算するに至るとあります、また獨逸國シュシフト、リンブレル氏の調査報告には左の通りの此例を示して居ります。

一年乃至五年の就學生	中等度の近視	九、五%	高度近視	〇、二%
九年乃至十年	同上	一一、%	同上	二、二%
十一年	同上	二一、%	同上	五、九%

何れも學年の進むに連れて近視の益々多くなるを統計上證明して居ります、然らば何の爲めに學生にかく近視が多いものかと申しますに、彼等學生は其校舍にある時は勿論、家庭にある時であつても讀書に其一日の多くを費し、視線は常に數寸の短距離に輻湊するが爲めに甚しく眼筋を緊張し、壓力を眼球に及ぼし、器械的作用によつて自然に眼球軸を延長せしむるものであります、殊に幼年の際にあつては眼球の鞏膜が未だ強靱とならず、充分なる抵抗力を有せざるが爲めに視線の輻湊愈々強く、其使用愈々久しきに至れば遂に近視に陥るのは實に己むを得ざる處であります、併し小學校時代にあつては書籍の文字の大なると、眼を使ふ時間の少いとの爲めに、近視に罹るものも尠いけれども、中學に入るに及んでは俄然これに惱むもの多く年を逐ふて漸く其數を増し、成年期に至れば漸く停止するに至るけれども、尚ほ續いて高等學府に進み、日夜細密なる書籍の繙讀、或は微細なる業務に從事します時には、近視の度は益々進み、或は種々なる病的變化を起して益々困難の域に陥るものであります。

職業もまた關係がありますもので、民賢市のゼッケル氏の調査に據りますと左の通りであります。

農夫	二、四%
市街に於ける勞働者	四、〇%
手工者	八、四%

市街に於ける筆耕者、手工職人、商賈　四四、一％

一年志願兵　五八、〇％

高等中學以上の學生　六八、〇％

またコン氏の統計によりますると、金銀職が百人中十二人、版木職が百人中四十二人、活字拾は百人中五十一人で、眼を近く使ふ職業程近視眼が多いのは事實であります、また近業に關係なくして起る所の所謂炎症近視なるものもあります、それから眼に何かの故障ある場合にはよく見えませぬから物を視るのに非常に骨が折れますが、其骨の折れるのを無理に我慢して努力して使ふ爲めに起ることもあります、要するに一言にして之を云ひますと、近視眼は眼の使ひ方が惡いから起ると云ふても宜しいのです。

從來我國にては學問と云へば、多くは經書等の大文字のものを用ひて居ましたのと、其他の關係とよりして、近視眼の發生は甚だ尠なかつたのですが、最近二三十年歐洲の文物一時に流入し、書籍は悉く活字本となり、また都鄙至る處蟹行文字の必要に迫られてより以來、近

視の發生は急に多くなつて來ました、それに一方文弱の弊を發揮し來つて、身體の運動充分ならず、爲めに筋神萎縮を來して益々近視發生の度を多くし、殊に學生間に於ては其數著しく十中の二三は凹面鏡を裝ふて得々として居ります、殊に彼等一部の外貌衒者の仲間には、眼鏡を一種の裝飾と心得、其眼は未だ近視眼鏡裝用の必要なき弱度のものなるか、或は甚しきは平常健全なる視力を有するにも拘らず、故意に眼鏡を高からぬ鼻背に擔いて、さも勉强家らしく、學者らしく裝ふて得々然たるに至つては、其愚や遂に及ぶべからずと嘆ずるより外ないのであります。

（豫防法）　さて今度は其近視の豫防法でありますが、これはなか〳〵容易の業ではありません、殊に既に近視に陷つたものにあつては、殆んど全治し無い（尤も二三の手術的療法あるが未だ完全ではありませぬ）から益々豫防法の必要があります、若し完全に之を豫防するか、少くとも其進行を歇止することが出來ましたならば、小は個人の利益を增進し、大は國家人類社會の幸福に向つて確かに其幾分を獲得することは疑を容れざる處であります。

近視の發生は主として學校にありますから學校に於ける授業時間、生徒の體位及び椅子、机等の器具、採光、運動等に就て充分なる注意を拂はねばなりませぬが、今日の學校衛生なるものはほんの申譯丈けであつて、此等の點に注意を拂つて居ないのは遺憾の極みでありますが、今此等の點に就て少しく其注意を擧げて見ませう。

體位　體位を正常に保持しますのは、今より發育する處の青年の骨格、筋肉の發達、其他呼吸器、消化器の作用、並びに血液の循環機能に向つて多大の關係を有するものであると同時にまた眼の衛生に對しても最も大切のことであります、體位を正常に保つは明視の距離を大ならしめ、又明視の距離を正確に維持するに必要なるものであります、明視の距離が大なれば大なる程視軸の輻湊之れに準じて少く、眼筋の爲めに眼球の壓迫を被むることも亦從つて輕易なものでありますから、視距は餘り短かゝらざる方がよいのであります、普通眼と物體との距離の適當なるは一尺乃至一尺三寸位であります、併し圖書或は細密なる業務に從事する時には、此距離を超えて近接することがありますけれども、成るべく此距離に於て正常なる體位を取らし

めねばなりませぬ。

椅子及び机　椅子並に机の構造如何は大なる關係を有するものであります、體位の平均を保たんとするには背筋、頸筋其他の作用を藉らねばならぬのでありますから、椅子、机等の構造が其宜しきを得ません場合には、幼弱なる生徒は久しく正靜に倚坐するに堪えないので、屢々其體勢を變じ、久しきに渉れば筋肉疲勞して、身體の上部は重力の爲め不可制的に前方に彎曲し、支持するものが無ければ正當の體位を保つことが出來なくなります、ですから、學校殊に小中學に於ける椅子、机等の構造に關しては必ず學問的注意を要するものであります。

椅子並に机の高さに就ては文部省の囑托により三島醫學博士の調査せるものがありますから參考の爲めに左に揭げます。

	自六年至八年	自八年至十年	自十年至十二年	自十二年至十四年
机の高さ	一尺一寸	一尺六寸五分	一尺八寸	一尺九寸五分
机の幅	一尺二寸	一尺二寸五分	一尺三寸	一尺三寸五分

机の長	三尺六寸	三尺六寸
椅子の高さ	八寸四分	九寸二分
椅子の幅	八寸	八寸五分
椅子の長	三尺六寸	三尺五寸

右に擧げたるは平均尺でありますから、同じ學年にても身長に長短あると同時に此平均尺に適するものと適しないものとあります、嚴密に云へば各個人の身長に應じて其高かさを取捨斟酌せねばならぬのであります、此點に就てはドクトル久保田詢氏の意見が最も適切でありますから左に其要項を載せます。

適當なる椅子は左の要項を充すを要す。

(一)椅子の高さは下肢の長さに均しきもの、換言すれば足蹠より膝に至るまでとす。

(二)座面は上腿の三分の二即ち少くとも座骨結節より膝腘に至るの廣さを要す。

(三)承背部は稍S字形となり、少しく後方に傾斜するを要す。

適當なる机は左の如き要項を充すを要す。

(一)机面は大約十五度の傾斜を有し、板面の廣さは一尺五寸以下なるべからず。

(二)机面と坐面との距離は鉛直に下垂したる肘關節と坐骨結節との距離に一寸五分を加へたるものとす。

(三)机及び椅子の連結は一定の距離を保ち椅子の前緣は椅面を越ゆること約一尺五寸なるを良とす。

採光　光線の射入が充分でありませぬと、自然に眼目を物體に近接しますが、此際物體が、小なるときには明視を得んとして愈々近接して、爲めに視軸の輻輳を招くの害がありますから學校其他の場處に於ける光線の明度は一尺五寸の距離に於て普通新聞の五號文字を容易に明視し得るを程度とすればよいのであります。

光線には　日光、電燈、石油燈、瓦斯燈等種々ありますが、要するに光度大にして始終間斷無く、明度に變異無く、然も光線の動搖せざるものが最良であります。此點から申しますと、

日光は最良の光線であります、人工光線は何れも一得一失ありますが、光りの動搖せざると、室内空氣を汚染せざる點より申せば電燈は最も適良であります、それから我々の眼は光線の直射に堪えぬものですから、人工光線を用ゐる場合には成るべく反射さして用ゐるやうにするのが宜しく、光線を取る方向は左側または後方よりするのがよい。

體育　體育はまた近視眼豫防に重大なる關係があります、前にも申す通り、學校課業の眼の衞生上有害なるは、これに從事する時間の長きに過ぎると、一は眼と物體との距離常に一定度を超えて近接するの弊害あるとに起因するものでありますから、課業の如きも眼を勞するものと、然らざるものとを交互相隔てゝ授け、細密なる課業は決して連續さしてはなりませぬ、また授業時間の如きも必ず毎時十五分の休息を要しますもので、其休息時間には兒童を庭園に導いて、新鮮なる空氣中に縱まゝに遊戯せしめ、調節筋の疲勞を恢復せしむるのが肝腎の注意であります、また中學程度の學校にあつては、力めて野外の運動を奬勵し、身心の强壯を圖り、悖德の汚行に感染するを誡め、常に勇武の氣象を鼓舞養成することを專らとし、柔道、擊劍其

他の體育的動作に筋神を練磨するのは、近視の豫防に向つて重要なる間接的方法であります。

眼鏡、次に眼鏡の選び方に就ても注意を要するものであります、學生の中には近視眼に眼鏡をかければ、段々進んで度が惡くなると云ふて、無理に耐えて涙を流しながら我慢をして居るものもありますが、これは甚だ危險なことであります、弱い近視の時によく注意して適當の眼鏡を選んでかければ輕くて濟みますのに、眼の衞生法を知らない爲めに、無理に眼の筋を使つて爲めに眼筋疲勞を起して、近視の度が益々進むばかりで無く、斜視に陷ることなどもよくある例でありますから、よく注意して適當の眼鏡を用ゐねばなりません、併し適當の眼鏡と云ひましても、素人が眼鏡屋に行つて我が眼に合ふのを選ぶなど云ふことは危險でありますから、必ず熟練なる眼科醫の選定を要するものであります、何故かと申しますに、素人には完全に近視の度を計ることは出來ませぬから、從つて其れに適應する眼鏡を選むことの出來ぬは申すまでも無いことであります、次にはまた「レンズ」の品質を選むことは出來ません「レンズ」のよいのは沒色「レンズ」であります、水晶の眼鏡の價の高いのは品の良いと云ふことにもより

ますが、一つは此沒色「レンズ」と云ふ關係があります、また其次には瞳孔領の距離に應じた眼鏡を選むことが出來ませぬ、瞳孔領は男子は六十密米、女子は五十七八密米が普通でありますが、若し眼鏡がそれより廣いと視線が一旦廣くなり、次で狹くなりますから、視軸の輻輳作用を主どる內直筋の疲勞を來すによつて、此作用を興奮すればする程調節筋が同時に興奮されて働く、殊に調節の制限されてゐる近視眼にありましては餘計に刺戟になりますので、直ちに害を及ぼすことになりますから、眼鏡の選擇は必ず專門醫に任すべきものであります。

以上の數節によつて近視豫防法の大體を述べ盡しましたが、先年同志社教師ペルリ氏の日本人の近視に就いて論じたる文章は參考に價するものがありますから、左に其一節を摘載致しませう。(東京醫事新誌第七九六號による)

第一　幼年生徒及び青年學生が活潑なる運動を怠るにより、これが爲めに身體組織の發達充分ならざる時は、眼も亦內壓に抵抗する能はずして其原形を失ひ、眼球後部に伸展す、これ近視の直接原因にして日本人は最も多く此原因より近視となるなり。

第二　日本人の住家及び學校の教場にも、日光を室內に入るゝことの不足なること、其方法の誤てること、卽ち低くして突出したる檐或は家に接近したる高き墻塀、低くして黑き天井、紙を張りたる窓、障子の類は皆直接に近視の原因となる。

第三　火鉢、行火、爐等を用ひ、不適當にして不充分なる暖を取ること、又小學校の如きは空氣の流通宜しからざる爲め身體の組織を弱くし、從つて其抵抗力を減少す。

第四　平面なる机は常に不適當なるものなり、殊に日本の低き机は眼の視線と書物と直角をなさずして鋭角をなし、又これに凭りかゝりて頭を垂るゝ故に眼の充血を起し、遂に眼軸延長するに至る。

第五　字畫紛雜なる漢字を用ひ、これを小形に印刷し、加ふるに不充分なる光線を以て讀むが爲めに、自然に眼を書物に接近せしむるに至る。

第二編　結膜の疾患

トラホーム

（恐るべきトラホーム）　近來上下共トラホームに就て非常に注意を拂ふ樣になりまして、內務省に於ても全國に向つて省令を發して大にトラホーム撲滅に就て企圖して居りますのは衞生上實に賀すべきことであります、元來トラホームなる病氣は直ちに生命に危害を及ぼすと云ふ樣な虞れがない所から、他の肺病とか、コレラとかいふ樣な傳染病と違ひまして、一般人士のトラホームに對する注意も周到でありませぬは自然の有樣にて已むを得ませんのですが、併し目下トラホームの彌蔓擴延して、其害毒を流しつゝありますのは實に慘しき狀態で、海外に向つての移民は此病あるが爲めに杜絕せられ、忠勇なる壯丁は、此病の爲めに入營を禁ぜられ、また全國幾多の工場の如きも此病の爲めに其生產力を減ぜられ、學生は爲めに學業の進步を妨げられ、花の如き可憐の令孃も此病の侵襲を蒙りては、眼の美形を損じて、終生鏡に對して泣くと云ふ樣な次第でありまして、其慘毒の及ぼす處は、決して他の傳染病に讓る處はないばかりでなく、一朝病勢の募り來つて失明の厄に陷るやうの悲運に逢遇しましては、實に死に勝るの苦痛を生涯受けねばなりませぬ、況してかゝる失明者が年々我が

日本國に夥多生ずる次第であつて見ますれば、其盲目になられた當人、家族の悲嘆は申すまでもありませぬこと、國家が此爲めに蒙むる損失は實に莫大のものであります、

（トラホームは我國に最も多し）　トラホームは本元の埃及を始め、露國、支那、印度、伊太利、洪牙利等其他の諸國に於ても、蔓延は著しき有樣でありまして、曾に日本に限つたわけではありませぬ、歐洲諸國の如きも嘗つては非常なる慘害を蒙つたものであつて、現時衞生の發達に於て世界に覇を唱ふる獨逸國の如きでさへも、一時は大に困難したのでありましたが、嚴重なる政府の撲滅策の實行と、一般人士の周到なる注意とによりまして、目下では露國に隣れるケーニツヒスベルリ近傍を除くの他殆んど其跡を絕つたと云つても宜しい位でありまして、ミユンヘン市の如きは同大學の眼科部の統計表を見ますするに、一ケ年新來患者約四萬の中トラホーム患者は唯の三名と云ふ次第で殆んど絕無と云ふても宜しい位であります、要するに本病は一の野蠻病でありますから、我日本國に於て最も多くの同病者を見るなどゝ云ふことは他の文明諸國に對して誠に恥入る次第であります。

今や我國も清に捷ち、露を征し、武に文に著しき進歩をなし、國威を中外に揚げ、將さに歐米諸強國と肩を並べて行かんとする際に當りまして、かゝる疾病の國内に蔓延猖獗を逞ふして居りますのは、實に悲しむべき次第でありまして、吾人は一日も早く適當の方法を講じてこれが撲滅策を計らなくてはなりませぬ、さりながら、其撲滅策たるやなか〳〵容易なことではありませぬ、殊に其病毒たるや、肉眼には見えない程小さなものでありまして、知らず識らずの間に傳染して來るのでありますから、各人ともに之れに向つては周密なる注意を拂はねばならぬのであります。

（トラホームの症狀）トラホームは初め埃及に甚しく蔓延流行しましたので、一名を埃及眼病と云ひ、また軍隊眼炎とも名づけられて居ります、其わけは稀世の英傑ナポレオン――が四隣を征服し、歐洲各國の精兵を驅り集めて埃及遠征を企て、凱旋後此軍隊は、各自の鄕里に歸還しましたので、遠征中傳染したトラホームは、忽ちの間に全歐洲に擴布しましたから、自然軍隊眼炎など云ふ名が起つた次第であります。

トラホームは傳染性を有する一種の眼病でありまして、其來たる狀態には急性と慢性とあります、急性に來ますのは、初めより眼結膜充血し、眼淫甚しく疼痛がありまして、烈い時には角膜にも滲潤を生じ、苦痛はなか〳〵一通りではありません、併し此際に充分なる療治をしますれば、全治の望みはありますが、少し怠つて居りますと、假令種々の病狀は漸次輕快しましても、全治に至らずに慢性トラホームの狀態に陷るものであります、此際に眼瞼を反轉して見ますと、裏面に粟粒狀のやうなものがあります、トラホームはこのやうに急性に起り漸次慢性に陷るものでありますが、多くは初めから慢性狀態を以て侵來しますもので、唯僅ばかり眼淫が出るとか、かすむとか云ふ樣な工合に、格別の苦痛も無く、傳染し來つて、何時の間にか結膜に前記の如き粟粒狀物が發生しますが、一旦此物が發生しますと、中々容易には治癒しないばかりで無く、これより種々なる病氣を續發します、卽ち眼瞼を侵しては眼瞼内瀰症とか、外瀰症とかいふやうな病氣を來し、角膜には潰瘍を生じ、甚しきに至りては遂に失明する樣なことになります、幸ひにして失明する程に至りませんでも跡には雲翳を貼して視力を障害される

爲めに、精密なる仕事などは到底出來なくなります。

（傳染の徑路）　トラホームの傳染しますのは、直接にトラホーム患者よりすることもありますが、多くは手巾、手拭、洗面器とか或は開き戸の握り、夜具の襟覆等の媒介によつて、トラホーム病毒の傳搬さるゝ場合が多いものであります、病毒は患者の眼より出づる眼滓の中に存在して居るのでありますから、此病毒が前記の種々の物に附着し、これに觸るゝ手指を汚染しこれにて眼を擦るより不知不識の間に傳染しますもので、一家に一人の病人を生じますと、洗面器とか手拭とかを共同に使用しますことよりして、自然病毒は甲より乙に、乙より丙に傳搬し、遂には一家悉くトラホームの虜となるのであります。

（豫防法）　傳染の徑路は既に前記の通りであつて見ますれば、若し各人が充分なる注意を平素怠らなかつたならばトラホームを豫防することは決して六ヶかしくはありません、今其豫防法の主なる事項を個條書きにして左に述べませう。

一、手巾、手拭等は各自に所持して決して他人のものを使用せぬこと、尙ほ時々熱湯に浸して

澤山の石鹸を以て洗濯すること。

一、洗面器の如きも、常に清潔を保ち、若し一家にトラホーム患者を生ぜし時は、特別の洗面器を與へ、決して他人と共同に使用せしめぬこと。

一、旅店、下宿屋、料理店の如き多人數出入する所に至りて便所に在る手拭を決して使用せぬこと。

附言　便所に手拭を備へ、便所に入りたる者は手指を洗ひ之れにて拭ふの習慣は歐洲にはあらぬことにて、吾邦人の潔癖の然らしむる所にて良き事ならんも、若し其手拭にして不潔ならんには、折角洗つた手指は再び汚染さるゝわけであるから、各家共注意して便所の手拭は清潔のものを用ゐねばならぬ、然らざれば寧ろ全廢するの方優れりである。

一、子供に向つては家庭に於ても學校に於ても、日に二三回石鹸を以て手指を洗滌せしむるの必要がある、昔は病は口より入ると云ふたが、トラホームの如きは手指より入る場合が多い。

一、其他開戸の把手とか、戸障子の手掛等は常に注意して、時々石炭酸水で拭ふ位の注意が欲

しい。

一、斯くの如くに注意し、要心しても、トラホームに罹つた場合には、其初期に於て充分なる適當なる治療を受けて、他に傳播せぬ前全治せしめねばならぬ。

要するに何れの傳染病にしても、各自々衛の方法を講じましたならば、豫防し得らるゝものでありまして、自分の身の大切なることを知るものは、平素自ら注意せねばなりません、また自營の道を自ら行ひ能はぬ幼兒の如きに至つては、これが父母兄弟たる者が此つとめを怠つてはなりません。

（療法）初期のものには百倍乃至五十倍の硝酸銀水を點眼します、後期にあつては、結晶硫酸銅を以て結膜面を一面擦過して後洗ひ落すと宜しい、其他手術療法があります、これにはいろ〳〵の方法がありますが、何れも專門家でなければ出來ませんもの故略しますが、兎に角本病は頗る恐るべきものでありますから片時も早く醫療を受くるは何よりの注意であります、病慢性となつては、手術もなか〳〵面倒になりますものですからよく注意せねばなりません。

急性加答兒性結膜炎

（原因）季節の關係があつて春秋の兩季に多く、傳染性を帶びて居りますが、其原因たる細菌には種々の種類があります。

（症候）輕いものは、唯眼瞼結膜殊に穹窿部が鮮紅色に充血腫脹するのみでありますが、重いのになりますと、眼球結膜も共に發赤して腫脹し老人には浮腫を起します、また眼内に異物ある如く感じて、燒くが如く刺すが如く羞明流淚あり、分泌物も多量にあつて、夜間は乾いて睫毛に膠着し、眼覺むると開くことが出來なくなります。

（療法）トラホームに於ける如く患者用の手拭、手巾、洗面盥等は別にしなければなりません、そして患者は成るべくは安靜に平臥せしめて、眼を休ましめ、便通を快くなし、左の藥劑を用ひます。

▲五十倍硼酸水　四〇〇・〇
右眼罨法料

▲鹽酸コカイン　〇・一　アドレナリン　二滴　蒸餾水　一〇・〇

右一日二三回點眼す

慢性加答兒性結膜炎

（原因）急性症が癒り切らない間に不攝生なことをして慢性症になるのもあれば、また塵埃、不潔の空氣中に生活勞働する爲めに初より慢性に來り、また鼻の病氣の爲めに起ることもあります。

（症候）急性症よりは一般に輕いものですが、矢張眼瞼の膜は腫脹して發赤し、乳頭には赤色の混濁せる小隆起物が發生して居ります、そして眼が疲れ易く或はカスミ、夕方には殊に甚しく眼瞼の重きを覺え、また眼内に何か物のある如く感じ、灼熱、瘙痒の感があります。

（經過）非常に長く、攝生宜しきを得ざれば終生治せざることもあります。

（療法）成るべく眼を安靜になし、便通を利し、飲酒、喫煙を禁じ、塵埃不潔空氣等の生活を避け、力めて衞生的生活法を講じなければなりません、藥物は罨法藥にては前の硼酸水をも用ひますが、尙ほ左の藥品をも應用します。

▲一百倍食鹽水　四〇〇・〇

右眼罨法料

▲三百倍皓礬水　一〇・〇

右點眼料一日三回

▲四百倍乃至一百倍硝酸銀水　一〇・〇

右點眼料（一日二回以内）

總て硝酸銀水を點眼しますれば、其後直ちに食鹽水を以て洗はなければなりません、それから急性症に用ゐる點眼料も同樣用ひますが、これは餘り長く續けて用ゐてはいけません。

膿漏性結膜炎

（原因）これは一名ふうかんとも云ひまして、淋病、消渴の毒卽ち淋菌が眼に入つた爲めに起りますもので、淋病ある人が、局部を處理した手で、眼をいぢつたり、或は洗湯中手拭から傳染つたり、洗濯中汚水が眼に飛んで入つたとか、また胎兒が母體から產れ出る途中、母の淋毒を受けたとかの爲めに起りますもので、日本に於て初生兒時代からの盲人の大多數は此後の場合のものであります。

（症候）　これを三期に分けて置きます。

第一期は浸潤期と云ひまして、淋毒が眼に入つてから數時間乃至一兩日の後に、眼に灼熱及び異物の感覺と、羞明流涙とを以て始まります、此時に眼内結膜は急速に充血膨脹し、角膜の周圍は堤狀に隆起し、結膜の乳頭は天鵞絨樣になり、漿液膿性の分泌物を漏し、眼瞼皮膚もまた發赤腫脹して、劇痛堪へ難きに至り、中には發熱するものもありますが、此症狀が二三日續けば第二期に移り行きます。

第二期は膿漏期でありますが、此時期は最も大切の時期でありまして失明すると否とは全く此時期に於て岐るゝものであります、若し療養其宜しきを得れば第三期に移つて追々に回復しますが、療養不充分なれば、角膜潰瘍より全眼球炎を起して失明するに至ります、此時期には眼瞼皮膚の硬固や疼痛は稍輕くなりますが、膿性の分泌物は盛んに出て、滾々として流れ出るに至りますから、若し不注意に眼球を開けば、膿は飛んで對者の眼に至るものですから大に注意しなければなりません。

第三期は退行期と云ひまして、腫脹疼痛も去り分泌物も次第に減じ、四週乃至六週を經ればて、常態に復するに至ります。

（豫防法）　淋病ある人は、其手より傳染することが多いものですから、石鹸を以て洗ひ常に清潔ならしめ、局部を處理したる手にて、決して眼を擦つてはいけません、また淋膿にて汚れたる布片、褌、肌着等は乾燥せる後日光に二時間以上曝露するか、または洗濯を行ふがよろしいが、洗濯の際には其の汚液の躍滴して眼に入らざる樣注意が肝要であります、亦初生兒は母體淋毒の有無に拘はらず、必ず五十倍の硝酸銀水の點眼をして貰ふが宜しい、これは今日に於ては産婆が大抵行ふことになつて居ります。

（療法）　本症が一眼のみの場合には他の健康眼を保護する爲めに、健康の方の眼を五千倍の昇汞水にてよく洗ひ、其後眼を閉さして其上にガーゼを重ね、絆創膏にて固く封じて仕舞ふがよい、此法は河本博士が非常に推奬してゐますことで、此方法が必ず實行さるゝに至れば眼科上の一大進歩だと云ふて居る位であります。

第一期の加答兒期にありましては、顳顬部に水蛭五六十條を貼し、眼上に氷罨法を施し、十分乃至十五分毎に五千倍の昇汞水にて眼を洗ひます。

第二期の膿漏期にあつては、五十倍乃至二十倍の硝酸銀水を一日一回或は二回點眼して、後百倍の食鹽水にて洗ひます、兎に角本症には硝酸銀水は缺くべからざる良藥であります、また人によりては、これに兼ぬるに百倍乃至五十倍のプロタルゴール水を一日十數回點眼すればより以上の效を奏するとて賞用する向きもあります。

第三期には慢性加答兒性結膜炎の療法を行ひます。

以上療法の一般を述べましたが、前にも申す如く本症は恐るべき眼病、然も一時を爭ふ程の急症でありますから、若し不幸にして本症に罹つたならば速に醫療を受くべきことは勿論のこと、また淋膿の眼に入りたることの明かなるときには、速に洗ひ、水にてもよろしいから充分に洗ひて、後直ちに醫師の治療を求めねばなりません。

水泡性結膜炎

（原因）これは一に腺病性結膜炎とも云ひまして、腺病質の小兒、まあ一般に虚弱なる者に多き眼病であります、それから季候の變り目、不潔なる空氣、慢性結膜炎などは皆誘因となります。

（症候）結膜の一局所に小水泡疹を造りまして、其處の結膜が肥厚して充血し、結節の頂點は破潰して小潰瘍となるものでありますが、これには三種類あります。

第一は孤立性水泡疹と云ひまして、角膜の近傍に多く出來ます、其大きさは帽針頭大のものが最も多い、そして一兩日後には破潰して一週乃至十日間位にて破潰します。

第二は多發性水泡疹と云ひまして、極めて小なる水泡疹が、角膜の周圍に無數に發生します、それで羞明があり、涙も多く出で、結膜は充血腫脹しますもので、前者よりは刺戟症狀が激しい、十日乃至二週間で癒るものであります。

第三は惡性膿疱疹と云ひまして、半は角膜に、半は結膜に跨つて帶黃灰白色、麻實大の混濁せる水泡疹を生じて、往々角膜を穿通せしむる等、最も恐るべきものであります。

（療法）　本症には營養療法を第一とします、小兒にあつては肝油を「コンデンスミルク」に混じて與へます、從來鷄の肝、或は八ッ目鰻は眼病の藥と云ふて用ゐて居りましたのは、かう云ふ病症に適しますので、無論効があります、また其他の滋養物も矢張効がありますから消化し易き物を充分に食べさせると宜しい。

内服藥には沃度鐵含利別を用ひますが、甘汞を眼に撒布する時には用ひてはいけません。

▲沃度鐵含利別　二・〇　　單含利別　一〇・〇　　水　一〇〇・〇

右一日三回毎食後分服（大人量）

▲鐵サヨヂン錠　二個

右朝夕二回一錠づゝ

局處には細末なる蒸製甘汞を撒布し、十分間にして洗ひ落して、五十倍のコカイン水を點眼します、また刺戟症狀甚だしき時には百倍のアトロピン水を點眼します（此際十分間位淚嚢部を手拭にて壓して居らねばなりません）、それから吸入器にて百倍硼酸水の蒸氣撒霧を行ふのも

効があります。

結膜乾燥症

（原因）　これも營養不良から來ますもので、人工營養を取つて居る小兒、重病後の衰弱、慢性腸加答兒等にもまた起ります。

（症候）　初めは角膜の兩側に、三角形の灰白色の斑點を生じ、それが丁度石鹼の泡か、雲母のやうな白い粉を撒布して乾かした樣になります、そしてそれをよく見ますと、小皺襞がよつて居るやうに見え、これが遂には角膜の周圍全部に擴がつて行きます。

夜盲症、即ち俗に云ふトリメは本症に特有なる症狀でありまして、夜間は物を見ることが出來なくなります、また重きものにあつては角膜をも侵して、遂に角膜軟化症を起すに至るもので、恐るべき眼疾の一つであります。

本症は大人にあつては格別の障害を貽さずに癒りますが、小兒殊に初生兒にあつては間々不良の結果を來しますから最も注意を要するものであります。

（療法）　營養療法が第一であります、即ち小兒にありては「コンデンスミルク」に肝油を混

じて與へ、稍長じたるものには鶏肝、牛肝、鶏肉、鰻其他脂肪性滋養食を與へます。

第三編　角膜の疾患

角膜實質炎

（原因）本症の大多數は先天性梅毒であります、即ち三ヶ月型に發育せるハッチンソン氏の齒、中耳硬化症とこの角膜實質炎とは、先天梅毒の三大特徴とするものであります、尚ほまた腺病質のものに發生することもあります。

（症候）本症は角膜に混濁を起して其爲めに視力を障害するものでありますが、此混濁は角膜の中央から始まつて、漸次周邊に擴がるものと、周緣から始まつて中央に及ぶものとあります、そして其何れより始まるにしても、角膜の表面は、灰白色の混濁を生じ、追々に其深層に位する實質をも侵すもので、一見する處、丁度磨硝子の樣であり、甚しきは黄色を帶ぶるに至りますが、決して化膿しないものであります。

それからまた、角膜の周圍より、血管が侵入して來ますが、此血管の肉眼にて認め得るもの

と認め得ざるものとありますが、前者は有血管性角膜實質炎、後者は無血管性角膜實質炎と稱するものであります。

角膜實質炎を有するものは、非常に羞明して、且つ視力の減弱を訴ふるものでありますが、治療によつて追々に恢復に向へば、次第に血管の赤色を失ひ、滲出物も追々に消え失するものであつて、其經過は三ヶ月乃至六ヶ月或は一年の長きに達するものであります。

（療法）腺病性のものには、全身療法として營養療法を取らしめ、先天梅毒に成るものには（所謂三大特徴を有するもの）驅梅療法を行ひます。

局處療法としては、其何れの症にあつても同樣であります、即ち初期には

▲五十倍乃至一百倍アトロピン水　一〇・〇

右點眼料

を點眼せしめ、兼ねて溫罨法、發汗法等を行はしめます、末期に至れば

▲五十倍乃至百倍黄降汞ワセリン　一五・〇

右點眼料

を點眼せしむるか、または「ヂオニン」、甘汞、阿片丁幾等を點眼せしめて、角膜混濁の透明に至るを計らしむるものであります。

水泡性角膜炎

（原因）水泡性結膜炎と同じく、腺病質の小兒に多く發するものであつて、季候の變り目、不潔なる空氣、慢性結膜炎等は皆誘因となります。

（症候）症候も矢張水泡性結膜炎と略々同樣でありますが、本症は角膜上に一個乃至數個の水泡を生ずるものであります、また治癒後に至つて角膜薄翳卽ち「ホシ」を殘して視力を傷ふことが間々ありますから、充分に治療を加へなければなりません。

（療法）主として營養を亢進せしむべく營養療法を加ふるが宜しく、殊に肝油、沃度鐵舍利別を與へます、局處藥としては蒸製甘汞末を撒布せしめ、刺戟症狀去りたる後は五十倍乃至百倍の黃降汞ワセリンの擦入を行ひます、繃帶は穿孔の虞れあるものに限りて用ひ、またどうしても穿孔を免るゝ能はざるものとの診斷確定せば、速に人工的に穿孔法を行ふ方がよろしい。

角膜パンヌス

（原因）本症には外傷性、「トラホーム」性、水泡性の三種あります、眼瞼內飜症、睫毛亂生症、異物等の器械的刺戟によつて、角膜面の摩擦を受くる爲めに生ずるものは、外傷性角膜「パンヌス」と云ひ、角膜に「トラホーム」性浸潤を起して、これに新生血管の分布するものは「トラホーム」性角膜「パンヌス」と稱へ、水泡疹の反覆發生によつて發するものをば水泡性の角膜「パンヌス」と稱するものであります。

（症候）何れの種類にあつても、羞明、流涙、毛樣神經痛、視力障害等の刺戟症狀を具へ、結膜充血して、角膜に溷濁或は點狀の浸潤を發し、新生血管分布しますが、此血管は結膜に連絡しますので、角膜實質炎に於けるものゝ如く、角膜緣に於て斷絕することはありません、浸潤は「トラホーム」顆粒と其構造を同じうし其周圍に溷濁を有し、漸々增加して血管これに分布して完全の「パンヌス」となりますが、これはまた追々に其勢を逞しふして角膜全面を被覆するに至り、或は上皮破潰して小潰瘍をなし、刺戟症の大いに增加することがあります、其血管に富むものは、濃性或は肉性「パンヌス」と云ひ、血管少きものを淡性或は膜樣「パンヌス」と云

ひます。

（經過）多くは極めて緩慢であつて刺戟症狀も少いものですから、視力の障害せらるゝに至つて、初めて覺知するに至ると云ふ樣なものが多くあります。

（豫後）「トラホーム」より來るものは、原病治すれば從つて治するものでありますが、經久せるものにあつては、角膜軟弱となり、內壓に抵抗すること能はずして「パンヌス」性の角膜膨脹症を起し、或は虹彩炎を併發し、瞳孔を閉塞し、また潰瘍の爲めに穿孔して失明することもあります。

（療法）「トラホーム」あるものは其原病を治療し、水泡性のものには、前項述ぶる如く營養療法を加へて水泡性結膜炎の再發を防ぐ等がよろしく、局處には五十倍乃至百倍の「アトロピン水」、五十倍の「コカイン」水等を點眼し、溫罨法を施し、また鹽類下劑を投じて便通を利する等が一般的療法であります。

それから既に刺戟症狀の去りたるものには阿片丁幾、五十倍乃至百倍の黃降汞「ワセリン」、

「ヂヨキリチー」豆浸汁等を點じて吸收を促し、濃厚なるものには、角膜周擁切開術を行ひ、鋭匙を以て掻除し、或は燒灼電氣を用ひて燒灼し、また「パンヌス」が角膜の全部を被ひ、濃厚なるものには硝酸銀を用ひますが、此等は皆熟練なる專門家にあつて始めて爲し與ふべきものであります。

角膜潰瘍

（原因）外傷、火傷、腐蝕等の微傷より細菌の侵入する爲めに起ることがあり、また猩紅熱、痲疹等の後に發し、腺病質、結核、營養不良の者、膿漏眼、「ヂフテリ」性結膜炎、「トラホーム」等の爲めに起ることも間々あります。

（症候）本症は通常これを第一期、第二期、第三期の三期に分けて置きます。

第一期卽ち潰瘍の新鮮なるもの或は進行性を有するものにあつては、其潰瘍の底面は粗糙、不潔に、且つ邊緣は峻削狀であり、其色は灰白乃至黃色となります、此時期には角膜周圍の結膜は充血發赤して、疼痛、羞明、流涙等が堪へ難く、前房には蓄膿がありますが、若し此時期に於て疼痛の無きものは無刺戟性の潰瘍と云ひ、其性質の頗る惡しきものであります。

第二期に至れば、潰瘍の底面は、平滑且つ透明となつて、其邊緣も平坦となり、刺戟症狀も多くは輕減消散します、卽ち退行性の潰瘍と稱するのは此時期であります。

第三期には、潰瘍は瘢痕を形成しますが、其瘢痕の白くして最も濃厚なるものは白斑と云ひ、其度の薄きものは翳と唱へ、最も薄くして殆んど透明に近きものを磨滅と稱するものであります。

以上症狀を三期に分けて述べましたが、此等はまだ〳〵輕い方でありまして、其重きものにあつては、角膜全部を破潰するか、或は穿孔せしめなどして種々の續發症を起し、甚しきは失明の不幸を見るに至らしむるものであります。

（療法）異物あらば先づ第一に之を取り除け、淚囊の疾患あらば早く之を治する等は豫備療法であります、潰瘍には輕く罨法繃帶を施すのが普通でありますが、若し分泌物が澤山あるか、または結膜の疾患に續發せるものには、反つて繃帶せぬ方がよいのです。

本症に主として用ふる藥物は、五十倍乃至百倍の「アトロピン」水でありますが、其他濕布罨

法、蒸氣撒霧、蒸製甘汞末の撒布、沃度仿謨の撒布、食鹽水の結膜下注射、電氣燒灼、烙白金燒灼、角膜穿孔術等施すべき方法はいくらもありますが、其取捨撰擇は一に熟練なる眼科專門家に一任すべきものであります。

角膜損傷

角膜の損傷とは、要するに眼に外傷を受けたのでありますが、これにはいろいろの種類があります。

（角膜の異物）異物とは角膜に或外物の入り込んだもので、多くは炭末、細砂、爪の先、鐵片等が角膜の表層に穿入するものでありますが、これは無理に拔き取ると、虹彩までも出づることがありますから、醫師に治療を求めねばならぬ、醫師は此際「ピンセット」を以て叮嚀に抽出するものであります、また鐵片は磁石を以て眼球に近づければ、よく抽出さるゝものであります。

（上皮剝離）樹枝、異物、爪、または硬き布片等の磨擦によつて、角膜上皮に損傷を來すことがありますが、これは假令僅かの傷であつても、羞明、流淚、疼痛等があります、大抵のも

のは、眼を閉ぢて安靜にして居れば間も無く癒るものでありますが、此際涙嚢炎等の病氣がありますと、其處より黴菌の侵入を受けて、前項に講述せる角膜潰瘍を起すに至るものでありますから、矢張り速に醫療を受けた方が安心であります。

（切創、刺傷、角膜破裂）　これは損傷中最も重きものであります、其創口よりして前房水が侵入して混濁を起すことはありますが、癒つた後は透明に回復するものでありますから格別心配は入りませんが、若し創口が化膿するやうなことがありますと、それよりして頗る危險の病氣を惹起すに至るものであります。

（療法）　以上三症にありては（異物は除去せる後）百倍の殺菌食鹽水にて叮嚀に洗滌して、五十倍乃至百倍の「アトロピン」水を點眼し防腐繃帶を施し、絶對的に安靜ならしむれば、遠からずして治癒に至るものでありますが、中には虹彩の脱出するのもありますから、この場合にはこれを切除し、また交感性眼炎の疑あるときには、斷乎として眼球摘出術を行はなければならぬものであります。

（腐蝕及び火傷）　これには種々の原因があつて、其原因體によつて治療の方法も違ひます、例へば硝酸、硫酸等の酸類によつて腐蝕せられたるものにあつては、百倍の重曹水にて洗ひ、苛性加里等の亞爾加里によつて侵されたるものは、卵白、砂糖水等にて洗ひ、普通の火傷にあつては五十倍の硼酸水或は百倍の食鹽水にて冷罨法を行ひ、其後何れも五十倍の硼酸ワゼリン及び百倍の「アトロピン」水を點眼する等は主なる治療法でありますが、此療法は所謂一の救急療法に屬するものでありますから、其處置は最も迅速敏活を要するものであります。

第四編　眼瞼、涙器の疾患

眼瞼緣炎

（原因）　腺病質のものに多く來るものでありますが、其他結膜炎、涙管、涙嚢の疾患、睫毛亂生、兎眼等にも發するものであります。

（症候）　本症は俗に「ハタクサレ」と云ひて、眼の緣が赤くたゞれ、甚しきは潰瘍を造り、睫毛は脱け落ちるに至ります、また睫毛間の皮膚及び其近隣に、細小なる白色または灰白色の

小鱗屑を生じ、これを拭ひ取れば、其下の眼瞼皮膚は充血し、少許の睫毛脱落を見、また黄色の痂皮の附着して居ることがありますが、これは乾性眼瞼炎と云ふものであります。

（療法）　原因となる處のものを治し、尚ほ百倍乃至五十倍の黄降汞「ワゼリン」、或は白降汞「ワゼリン」赤降汞「ワゼリン」の何れかを塗布せしむるが宜しい。

睫毛亂生症

（原因）「トラホーム」が主要なる原因となります、また眼瞼縁炎や毛根脂腺炎が誘因となるものであります。

（症候）睫毛が普通の場處に生ぜずして亂雜に生えますので、眼球を刺戟して角膜炎及び結膜炎、甚しきは眼球炎を發するに至るものであります。

（療法）　少し位のものは鑷を以て一々拔き取るがよろしく、これを再三反復すれば漸次に微細となつて再び生えぬやうになりますが、多いものにあつては眼科醫に就き手術を受くるがよろしく、これには眼瞼の皮膚を軟骨の上縁に縫ひ着けて睫毛の亂生を矯正するのもあり、また睫毛縁を切り除くもの其他種々の方法がありますが、何れにしても餘り大業なことをせずとも

濟むものであります。

眼瞼内飜症

（原因と症候）　本症は眼球縁が普通の位置にあらずして、眼球に向つて内飜するものであつて、爲めに睫毛が眼球を刺戟して種々の障害を起すに至るものですが、これに二種の別があります、第一は痙攣性内飜症と云ひまして、眼瞼縁に接する輪匠筋の一部が強く收縮するに當つて眼球が萎縮或は陷沒するにより、眼瞼縁はこれを支ふる能はずして本症を發しますもので、これは老人に發すること多きもの故、特に之を老人性内飜症と云ひます、第二は瘢痕性内飜症と云ひまして、「トラホーム」、實扶的里、火傷等結膜の瘢痕より起るものであります。

（療法）　輕きものにありては絆創膏を下眼瞼より頰にかけて貼つて置くか、または「コロヂウム」を以て布片の兩端を固着せしめ置いてもよい、重きものは皮膚に瘢痕を造り、其收縮力を以て下眼瞼を牽く法、其他數種の方法があります。

眼瞼外

（原因）　老年に至りて下眼瞼節及び皮膚の弛緩によりて起り、また慢性眼瞼縁

霰症

炎、結膜炎、輪廻筋の麻痺火傷及び潰瘍等によつて、起るものであります。

（症候）眼瞼が外方に飜轉して眼瞼結膜の曝露するものであつて、俗に云ふあかんべいをして居るやうになります、爲めに涙液は常に眼瞼より溢れ出で、眼球は外氣に刺戟されて炎症を發するに至るものであります。

（療法）輕症にあつては、眼瞼を內方に牽き其位置を整復して壓迫繃帶を施せば自然と癒ります、また硝酸銀を以て眼瞼の結膜を腐蝕せしめて瘢痕を造り、其收縮力によつて眼瞼を內方に牽かしむるの法、眼瞼結膜の一部に皺壁を作つてこれを切り除くの法、其他種々の方法がありますが、何れにしても專門家の治療を受けなければなりません。

眼瞼涙瘤症

（原因）本症には原發性と續發性とあります、原發性のものは、多くは神經質の人、卽ち神經衰弱、「ヒステリー」、「ヒポコンデリー」の人、また老人にも起り、耳內異物、房事過度、蛔蟲の寄生、過勞等によつて起るものでありますが、また全く原因不明のものもあります、そして此等のものにあつては上眼窩、下眼窩、前額、耳後、上肢等の或

一部を壓すると癒る處の壓點があります。

續發性のものは、眼內異物、角膜潰瘍、膿漏眼、小兒の水泡疹等から起ります。

（療法）原因を除くのは第一の療法でありますが、また輕いのにあつては、單に五十倍「コカイン」水の點眼だけで治し得るものであります、また壓點が分るならば、其處へ電氣を通じたり、灸をすへたり、或は沃度丁幾を塗布するだけで癒ることもありますが、重きものにあつては無論醫治を受けなければなりません。

誤謬不備

麥粒腫

（症候）眼瞼軟骨の中に硬固の結節を生じ、徐々に增大して小豆大、豌豆大となり、それが段々に增大し腫起すれば終に破潰して膿樣の物を洩らし、破潰口より肉芽が挺起するに至りますが、多くは漸次に吸收せられて治に至るものであります。

（療法）其小なるものにあつては、五十倍の硼酸水にて罨法を行ふがよろしく、大なるものにあつては手術的治療を受けなければなりません。

誤謬不備

霰粒腫

（症候）眼瞼緣に發生する處の一種のニキビであります、卽ち眼瞼緣の一部分

が發赤腫脹して疼痛を來し、また時としては廣く浮腫が來て驚くこともありますが、兩三日を經過する間に、瞼緣に小なる膿點を生じ、自ら破潰排膿して治に至ることが多いものであります。

全然無痛無感覺、膿ハ出ルコトナシ

（療法）五十倍硼酸水を以て罨法を行へば大抵は間も無く治に至るものでありますが、若し荏苒治せざる樣ならば、醫に就き穿刺して貰ひ一兩日繃帶して置けば治するものであります。

涙嚢炎

（原因）本症は多くは鼻涙管の疾患から起ります、鼻涙管が炎症に罹つて狹窄を起しますと、これが爲めに粘液樣或は膿漿の液體を分泌しても其排泄が妨げられるので涙嚢に逆流して陷り、或は鼻涙管加答兒の爲めに閉塞し、涙液が長く嚢中に滯つて幽に分解し、涙嚢裏面を刺戟しますので、其粘膜が爛れて潰瘍に陷るものであります。

（症候）本症に急性と慢性との區別があります、急性涙嚢炎は、眼瞼に炎症を發して腫脹し殊に涙嚢の部位に於て著しい、そして內眥より見ますと、涙嚢は二つに分れて腫れて居るかの如く見えます、また涙嚢を壓せば、含有物が、鼻涙孔若しくは小涙管より漏れ出ますけれど

も、多くは涙嚢中の膿液が、小涙管より逆流して內眥に注ぐものであります。

慢性涙嚢炎は、大抵急性症より轉ずるものであつて、涙嚢の腫脹がながく容易に治らず、涙嚢粘膜が爛れて膿汁を分泌し、或は稀薄漿液樣のものを分泌するに至ります、また惡性症に轉ずるものにあつては、自然に外部に破れて瘻管を形造り、涙骨は次第に潰瘍に陷るに至るものであります。

（療法）初期に於ては專ら冷罨法を行ひ、或は瀉血等の一般消炎法を施します、けれども若し既に化膿に傾きましたならば溫罨法を行ふて、自然に破潰を促すことが肝要であります、若しまた自然に任せて破潰しませぬときには、小涙管を切開して涙嚢に及ぼし、或はまた外方より直ちに涙嚢を切開して充分に其膿汁を泄さねばなりません。

流涙症

（原因）本症は其名の如く常に涙の流れ出る病氣でありますが、これは涙管狹窄より來もので涙嚢炎より起ものと涙嚢膿瘍より起るものとの二種あります。

（症候）涙管狹窄に因るものは、卽ち慢性「トラホーム」や鼻の疾患の爲めに涙管が狹窄して

涙の溢れ出づる病氣であります、これを見分けるには「フリユヲレスチン」と云ふ色素液を點眼して置きましてから、鼻をかまして檢しまするに、其鼻汁中に其色を見ざるか、或は之を見るも甚だ少きときは本症と確めることが出來ます。

涙嚢炎及び涙嚢膿瘍は前にも申す如く急性と慢性とありますが、其結果として流涙症を來すに至るものであります。

（療法）涙管狹窄の爲めに起るものにあつては、涙管に消息子を挿入し其擴張を計るがよろしく、涙嚢炎及び涙嚢膿瘍にあつては安靜を守り、冷罨法或は溫罨法を施し、化膿せる時は切開手術を受け、或は場合によりては涙嚢摘出術を受けねばなりませぬ。

第五編　水晶體、網膜其他の疾患

白内障

（原因）これは俗にしろそこひ或はうみそこひと申しますもので、其原因は外傷の爲めに水晶體嚢を傷ふために來るのもあり、老齢となりて、不明の原因より來るのもありますが、其他糖尿病や蛋白尿ある人に來り易く、或はまた他の眼疾よりして續發的に來ることもあります。

（症候）水晶體が混濁して灰白色乃至白色になる病氣であつて、多くは患者の眼の瞳孔を見ると通常には黑く見ゆるものが反對に白く見えるもので有ます、尤も深部によるものは特別の診斷法によらなければ分りません、それから患者の自覺症としては、始め飛蚊症と云ふて、黑い物が眼前を飛び過ぎる樣に感じ、之が爲めに甚だしく視力を害せられますが、これが段々重くなりますと遂には全く視力を失ふに至りますが、また中には限局性白内障と云ふて一部分だけのものも有ますが、完全白内障と云ふて全部のものもあり、時に又先天性のものもあります。

（療法）白内障はなか〳〵に重い病氣でありますが、手術によつて割合に樂に治癒することが出來ますから、早く眼科醫の診療を受くるがよろしい。

網膜炎

（原因と種類）本症には澤山の種類がありますが、其主なるものは、(一)特有性網膜炎と云ふて多くは梅毒より來るもの、(二)蛋白尿性網膜炎と云ふて腎臟

病より來るもの、(三)蜜尿病性網膜炎と云ふて糖尿病患者に來るもの、(四)白血病網膜炎と云ふて白血病者に來るもの、(五)惡性貧血症に來る網膜炎等ありますが、其他にまた白澤點狀網膜炎と云ふて網膜に白色の圓形或は線狀の斑點を現すものや、增殖性網膜炎と云ひて網膜上に凸凹不平の隆起を生ずるものもあります。

(症候)　本症は俗に、、、ひと稱せらるゝもの、一種でありまして、眼前に薄霧の現はれたるが如くに感じて、視力漸次に減弱するのが常であります、其他眼火閃發と云ふて眼の中に花火の光るが如く感ずるもの、或は何か物が浮いて居る樣に見ゆるもの、或は物が彩どられて居る樣に見えるのもあり、或は夜盲症になつたり、晝盲症になつたりするのもあります、そして視力は或は減じ或は增したりしますが、結局は盲目になるものでありますから早く適當の治療を受けなければなりません。

(療法)　原因によつて各其療法を異にします、卽ち梅毒性のものは驅梅療法を行ひ蛋白尿性のものは腎臟病の療法を行ひ、蜜尿病性のものにあつては糖尿病の療法等を行ひますが、原

因不明のものにあつては梅毒療法を行ふ方がよろしい。

以上は全身療法でありますが、それと共に局處療法を行ひます、卽ち

▲百倍乃至二百五十倍ヒロカルピン水

を顳顬部の皮下に毎日或は隔日に一筒づゝ注射して發汗せしむるか、または

▲百倍ピロカルピン水　一五・〇——二〇・〇

右內服(一回三〇・〇の水に和して頓服)

を與へます、其他有色眼鏡を用ゐて强光を避けしめ、飲酒、喫煙を禁じ、全身の攝生に注意せしめねばなりません。

綠內障

(症候)　前驅期に於ては頭痛、頭重等がありまして、視力朦朧となり、燈火の周圍に赤と青の虹の如き輪を見ます、そして角膜の周圍は充血し、曝孔は稍散大して反應が鈍くなります、此症候は或は現はれ或は消失すること一二週間乃至一ヶ月の後に至れば發生期となりて、突然劇しき頭痛、齒痛、耳痛等が起り、食氣不振、睡眠不安、間々嘔

吐發熱を來すに至る故、此時期に於ては往々腦膜炎或は胃病と間違ふことがあります、けれども患者の眼をよく注意して見れば、充血、腫脹、浮腫等を來たし、角膜は一樣に混濁し、表面は粗糙となり、知覺は鈍麻し、虹彩は變色して、瞳孔は散大し其色綠色となり、試みに眼球を壓するに其硬きこと石の如きものであります。

また慢性症は前驅期と發生期との境界が不明瞭で、症狀も輕いものですが、電擊性綠內障に至つては、發病後一二時間にして旣に失明して恢復しないものであります。

（療法）本症には古加乙水や「アトロピン」水等を點眼することは禁物であります、若しこれを點眼すれば益々內壓の亢進を來して、遂に失明を招くに至るもの故、注意しなければなりません。

藥物にては五百倍乃至百倍の「エゼリン」を點眼しますが、元より一時の偸安姑息的に止まりますから、一時も早く專門醫に就て、虹彩切除手術を受くるが宜しい、早ければ早い程有効なものであります。

第五編　鞏膜、虹彩其他の疾患

白膜炎

（原因）本症は一にまた鞏膜炎とも云ひます、原因は「リウマチス」が最も多く、腺病、梅毒等も亦原因となります。

（症候）角膜の附近に小豆大の低き帶赤色の隆起根を生じて壓痛があり、三ヶ月餘りを經過すれば石盤色の灰白斑を殘して消失しますが、また他の部分に再發して遂には角膜炎を一週することがあります。

（療法）「リウマチス」性のものにはサリチル酸を與へ、腺病性のものには肝油、鐵劑等を長期間與へ、梅毒性のものには驅梅療法を行ふの外、アトロピン水の點眼、局部の燒灼法等を行ひます。

虹彩炎

（原因）本症の主なる原因は梅毒にして先天性及び後天性の梅毒に於てよく本症を發するものであります、其他「リウマチス」痲痺、寒冒、外傷等によつて起

ることもあります。

（症候）羞明、流涙ありて、角膜の周圍に充血を來たし、疼痛もあり、視力障害を來すものであります。

（療法）騙梅療法を行ふの外、「アトロピン」水の點眼、古加乙水の點眼等に兼ねて水蛭を貼り、また便通を利する等は其主なる療法であります。

交感性眼炎

（原因）本症は一眼に外傷を受け、其爲めに毛様炎或は脈絡膜炎が起り、それが原因となつて、次で他の健眼にも誘發するものであつて、これに交感性神經症と交感性炎症との二種類あります。

（症候）交感性神經症、羞明流涙ありて、眼瞼は痙攣を起し、或は角膜の周圍は充血し、調節痙攣麻痺、毛様神經痛等が劇しいものでありますが、一眼を除去せば他眼の症狀は自から消失して了ふものであります。

交感性炎症は、漿液性虹彩毛様體炎となりて現はれ、角膜の周圍は少しく充血し、前房水が

僅かに溷濁して居ります、また自覺症としては羞明流涙及び視力の減弱等があります、また重症に至つては劇痛ありて其他の症狀も重篤なるものであります。

（療法）眼科專門醫に就き速かに斷然たる手術を受くるに限ります。

硝子體混濁

（原因）梅毒から來るものが最も多くあります。

（症候）飛蚊症と云ふて、患者自身の眼前に蠅や鳥が飛ぶ樣に見えて、これが爲めに甚しく視力を害するに至ります、そして醫者が檢査しますと、硝子體に溷濁あるのが見えます。

（療法）騙梅療法を行ふと共に、ピロカルピン水の皮下注射、五千倍昇汞水または五十倍食鹽水の結膜下注射等を行ひます。

遠視眼

これは矢張屈折機の異常の爲めに起るものであります。

（症候）本症は健康眼の人よりは、物を遠く離さなければ確實に見ることの能はざるものでありますから、本症を患ふる人には近業は最も困難を感ずるものであります、け

れども眼の調節力が充分なる間は、調節によつて物を適當の距離に見ますから格別困難を感じませんが、調節力が衰へれば近業を久しく爲すことは出來なくなり、強てこれに從事すれば視力朦朧となり、眼邊に疼痛を覺え、甚しきは腦病と誤ることもあります、尤も本症は暫く眼を閉ぢて居れば再び恢復するに至りますが、何れにしても近業は不可能である、老人は人も知る如く、近くに於ては物を見ることは出來ませんで、遠くに離して見ますが、これは遠視眼ではなくして老視眼であります。

老視眼は、唯近點に於ける眼の調節力が減弱したるに止まるもので、遠く離して見る時は、普通の人と異なることはありませんが、遠視眼にありては、遠くの物は其調節力以内に見えるので能く正確に見ることが出來ますが、其見得る遠點卽ち平行光線が眼内に入り來つて、其集合を結ぶ處の燒點に大なる相違を有するものであつて、其の多くは内斜視を伴ふものであります。

(療法) 適當の眼鏡によつて矯正することが出來ます。

不同視眼

(症候) これも矢張屈折機の異常に因るものですが、其特徵は、兩眼の遠近に對する視力の不同であります、卽ち一眼は正視で一眼は近視或は遠視のものもあれば、また一眼は近視で一眼は遠視のものもあり、或はまた兩眼共に遠視或は近視にて、唯其度が不同なるか、或は亂視のものもあります。

(療法) 左右の視力を計り、其れに適應する眼鏡を選んで用ゐるより外に方法はありません。

亂視眼

(症候) これも屈折機の異常に因るものですが、これに正亂視、不正亂視、雜性亂視の別があります。

亂視とは、物體の形狀を正當に見ること能はざる病氣であります、卽ち正方形は長方形或は不正方形に見え、圓形は楕圓形に見えます、殊に雜性亂視に至つては圓滿なる朦輪を畫し、文字の如きも其何れの線も朦朧として不明なるを以て、勢ひ物に接近して見る樣になり、從つて疲勞を來し易いものであります。

(療法) これも適當の眼鏡によつて矯正することが出來ます。

眼性疲勞症

(原因と種類) 結膜炎性眼性疲勞、調節性眼性疲勞、筋性眼性疲勞、神經性眼性疲勞、網膜性眼性疲勞等の數種ありて、原因も其名の如く各々異つて居ります。

（症候）本症は其名の如く眼の疲れ易き病氣であつて、少し讀書するか、少しく仕事をすれば、直ぐに眼の周圍に不快の感じが起り、視界朦朧として事物が錯雜して不明となるものであり、時として眼に疼痛がありて羞明流涙を伴ふことがあるもので、要するに眼の早く疲れ易い病氣であります。

斜視

（療法）各々其原因となる處の病氣を治療するがよろしい。

（種類）斜視には內斜視と外斜視との二種あります、そして內斜視は多く遠視を伴ひ、外斜視の三分の二は近視を伴ふものであります。

（症候）俗に云ふやぶにらみにして、內斜視は視軸內方に輻輳するもの、外斜視は視軸外方に輻輳するものであります。

（療法）何れも手術によつて矯正することが出來ます、併し小兒は斜視するも、長ずれば消散することがありますから、五歲以下のものには行つてはいけません、また輕度の內斜視三密迷のものは、手術後外斜視となることがありますから、これも手術を行つてはならぬのであります。

眼科學講義 終

耳鼻科學講義

第一編　耳の衛生と耳の疾病

耳の衛生法

耳は外耳、中耳、內耳の三つに分れて居りますが、其中でも中耳の疾患が一番に多く、生命に危險ある頭蓋腔內合併症を續發するものも多くは中耳の疾患であります、外耳の疾患も亦隨分多い、中かには爲めに中耳をも侵すものもありますから注意せねばなりません、それからまた內耳の疾病は重き聽力の障害を起し遂に聾となることがありますからこれも又恐れなければなりません。

耳殼は平素淸潔を保たなければなりませぬ、これには石鹼にて洗ふのが一番であります、此處は一體黴菌の最も附着し易い處でありますから、急性中耳炎などの場合に若しも外聽道より黴菌が侵入すれば慢性症に變じますから淸潔が肝要であります、尤も耳殼を洗ふには水の外聽道に入らぬやうによく〳〵注意せねば反つて害になりますから細心の注意を要するものでありま

す。

外聽道の內部には健康者では特別の手當は入りませぬ、素人自身に手を着けるのは反つて危險ですから、先づ自分では餘りいぢらぬ方が安全です、耵聹の分泌は生理的には少量であつて自然の妙理によつて外部に排除せられ、外聽道の入口部に出で來るものでありますから、これは指頭に濡れた手拭を捲いて拭き取れば良いけれども、能く素人の用ひます耳搔などを用ひては反つて深部に追ひやるの虞れがありますから注意せねばなりませぬ、また病的には多量に耵聹が溜まつて耵聹栓を作ることがあります、斯樣の場合には耳鳴りまたは重聽などを起しますが、此時は其治療を醫師に依賴するが安全の途であります、若しもこれを爲さずして、無理に耳搔などで搔き出さんとしますと、外聽道を傷け、或は皷膜を破つたりなどして重症を惹き起すことがあります、また不幸なる場合には丹毒を起して一命を失ふやうなことさへもありますからこれも注意せねばなりませぬ。

耳の中の痒き時、または痛みを感じます時などに、素人が手療治に「スポイト」で洗つたり

或は何か油などを注入することもありますが、此等は反つて外聽道炎を起したり、或は油に黴が生えて一種の病氣を起したりすることがあります、殊に皷膜に穿孔ある場合には其危險の度は一層重大になるから決して手療治などをやつてはいけませぬ、また外聽道に種々の異物が入ることがあります、此場合に手療治をやつて皷膜を痛めたり、或は異物に附着せる黴菌の爲めに重症を起し、甚しきは一命にかゝる例はよく見聞きする處でありますから、若し誤つて異物を入れた時には少しもイヂらずに其儘醫師の下に行くのが安全の方法であります。

外聽道を小揚子、耳搔き、鉛筆などで搔く際に誤つて皷膜を破ることがあります、殊に日本人には耳搔きで耳を搔く癖がありますから此危險も從つて多い、また耳を平手で強く打つ時に間接に皷膜を破ることがありますが、此場合に黴菌が侵入して重症を惹き起すことがあります、それから水泳の際に高い處から水中に飛び入り或は大砲を發射する際にも同じく皷膜破裂を起すことがありますけれども、黴菌の侵入に對する危險は前者程劇しくはありませぬ、併し何れも脫脂綿にて耳內に栓を爲し、鼻を強くカマぬ樣に注意し、直ちに醫療を受くるがよろし

い。

外聽道炎

（原因）瘙痒の爲めに耳内を搔くとかまたは剃刀を以て耳内を剃れる小創より葡萄狀菌の侵入によつて起るものであります。

（症候）限局性と汎發性と二種ありますが、限局性のものは癤或は疔と同樣でありて、外聽道に發赤、疼痛を來たし、殊に夜間に甚しく、口を充分開くことも出來なくなりますが、切開するか或は自然に破開すれば大に樂になりますけれども再發することは間々あります、汎發性のものは外聽道全體の皮膚が發赤腫張して疼痛あり、耳下淋巴腺も亦同時に腫張します、そして多くは化膿して膿を洩すに至ります。

（療法）限局性のものは、五十倍の醋酸礬土水を以て濕布罨法を行ひ、或は氷嚢、氷蛭を貼し、化膿せるものは切開を行いますか、或は五十倍石炭酸阿列布油を脱脂綿に浸して耳殼内を塡充して置きます、汎發性のものも同樣の療法で宜しいけれども、切開しては效がありませぬから、硝酸銀幹を以て肉芽を腐蝕し、十倍過酸化水素液を以て外聽道内を清潔になし、五十倍「メ

ントール、オレフ」油を脱脂綿に附けて耳殼に點しますが、何れの症にあつても酒、煙草、香辛類等の刺戟物は禁物であつて、身體の安靜を守らなければなりません。

耵聹栓塞

（症狀）これは一名耳垢堆積とも申しまして、其名の如く耳垢の多量に溜つたものゝことですが、大抵は格別の症狀を呈しませぬけれども、其量餘りに多いとかまたは水等が入つた爲めに膨張しますと、耳内閉塞、異物の感、耳鳴等を起します、稀には眩暈、神經病等を招き、癲癇發作、喘息發作等を起すこともあります。

（療法）濃厚なる過酸化水素液、或は重曹「グリスリン」「オレフ」油等に點耳し置き、耳垢を軟化せしめて、一兩日を經過したる後洗ひ出します、よく素人のやるが如く耳搔きを以て搔き出すのは危險ですから禁じなければなりません。

外聽道の異物

（症狀）外聽道に入る異物の最も多きは豆類にしてこれは子供がいたずらに入れるからであります、其他木片、鐵片、硝子球或は蚤、羽虫等　昆虫類の侵入することもあります。

異物の小さなものは格別邪魔にはなりませぬが、小虫の類ですと騒ぎ廻るので甚だ煩るさいものであります、豆の如き軟性異物にあつて濕潤の爲めに膨大して耳鳴、眩暈、難聽等を來すことあり、其他咳嗽、嘔吐、癇癲發作等をも稀れに起すことがあります。

（療法）昆虫類は煙草の煙りを吹き入るゝと自然に出ることがあります、また「コロヽホルム」を點入して殺し置き、豆の如きは「アルコホル」を點入して縮少せしめて洗ひ出します、鐵片は磁石にて吸ひ出すことが出來、其他の異物も洗滌すれば豫想外によく除去さるゝものでありますから「ピンセット」などを以て抽み出してはなりません、これは勞して効が無い許りで無く往々創を拵えるの虞れがあります。

皺膜裂創

（原因）耳搔き、揚子、鉛筆等を以て直接に皺膜を破ることがありますが、また指を耳の中に入れて急速に取り去るとか、手の掌で外耳を打つとか、擊劍中竹刀にて打たるゝとか、高所より水中に飛び込む際に破裂を來すものであります。

（症候）損傷せる時には痛みがありますけれども間も無く痛みは去つてしまひます、出血も

極僅かでありますが、若し外にまで流れ出る位の出血でしたならば、皺膜ばかりで無く他の場所にも損傷が起つたものであります、聽力は始めは障害せられますが、大抵數日にして回復します、若しそれが何時迄經つても回復せぬやうなことがありましたならば、それは内耳の迷路震盪症を合併したものと見做さなければなりません。

（療法）鼓膜裂傷には刺戟を與へるのは大禁物でありますから、脱脂綿にて栓塞を行ひ、安靜を主として、總て刺戟性の飲食物を避け、また便通の正整を計り、若し便秘あらば下劑を投じて通利を良くします、かくして居れば大抵は自然に治癒するものでありますが、若し何時までも癒らぬ樣でしたならば、專門家の治療を受けなければなりません。

歐氏管狹窄症

（原因）鼻咽頭加答兒や、腺樣增殖症等ある爲めに、歐氏管の粘膜も共に加答兒性肥厚を呈して狹窄するものもあり、また其附近に於ける骨性增殖や、肉芽形成、腫瘍等の爲めに器械的に障害せられて狹窄するのもあります。

（症候）聽力が減し、耳鳴りがして閉塞の感があり、また頭重、壓重、不快等の感がありま

す。

（療法）加答兒性のものは、鹽酸古加因液の鼻咽腔内撒霧法を行ひ、兼ねて歐氏管通氣法を施します、また器質的のものにあつては「ブージ」擴張法を施します。

急性中耳炎

（原因）感冒は最も多い原因になつて居ります、其他鼻、咽頭、喉頭、氣管支等近傍臟器の加答兒症に併發することもあり、或は鼻を洗ふ時、水泳の時に起ることがあり、また強く鼻をカム時、不注意なる歐氏管通氣法を行ふた爲めに起ることもあります、また稀れには「インフルエンザ」、麻疹、實扶垤里、猩紅熱、肺炎等の急性傳染病に併發することもあります。

（症候）耳の深部に刺すが如き、衝くが如き疼痛が起つて來ます、此痛みは多くは間歇性に休み〳〵起つて來ますが、其時間は短きは數分間、長きは數時間に至ることがありますそして咳嗽、噴嚏、身體動搖、感情の激動等には增劇し、また殊に夜間に劇しくなり、劇しき時きは齒や頭また手にまでも其痛みが放散して來ます。

熱は三十八九度甚しきは四十度にも昇ることがあつて、小兒には嘔吐、痙攣等を伴ふこともあり、其他頭痛、耳鳴等も起り、眩暈を感ずることもあります。

（療法）先づ原因となつて居る處のものを避けなければなりませぬ、そして酒、煙草其他刺戟性の飲食物を禁じ、外耳に氷囊または水蛭を貼し、安靜に平臥せしめ、便通なきものには左の下劑（鹽類下劑）を與へます。

▲稀鹽酸　一、〇　硫酸麻倔涅臭謨　一五、〇　水　一〇〇、〇

右一日分、一日三回分服

重症のものは時として鼓膜切開術を行はねばならぬこともあります、輕症のものは耳に冷罨法を施すの外、左の藥液を脱脂綿に浸して外聽道の栓塞を行ひます。

▲鹽酸古加因　〇、三　醋酸蔡土　〇、三　「グリセリン」三、〇　蒸餾水　七、〇

右混和、外用

慢性中耳炎

（原因）急性中耳炎より移行するのもあれば、また鼻咽頭の慢性疾患に續發することもあります、其他感冒、濕潤なる土地の居住、不衛生的の職業、過度の喫煙或は飲酒に起ることもあり、或はまた腺病、結核、梅毒、貧血、慢性「リウマチス」、慢性腎臓炎等の經過中、即ち身體の虚弱なるものに起ることもあります。

（症候）耳鳴は常にある處の症狀であつて天候の不良なる時、飲酒せる時、身心過勞せる時、感冒に罹りたる時等には強く之を感じます、其他頭部壓重の感、眩暈等あつて甚だ不快に聽力も亦障害せらるゝものであります。

（療法）鼻咽頭の疾患殊に腺樣增殖症にあつては手術によつて之を除去すれば、本症もまた大に輕快するものであります、其他歐氏管通氣法（歐氏管「カテーテル」或はポリツチエル氏護謨球を以て）を行ひます、また耳鳴に對しては、左の藥劑を歐氏管「カテーテル」によつて歐氏管に一日一回づゝ注入します。

▲抱水「クロラール」　一、〇　　蒸溜水　三〇、〇

右外用、一回二乃至三滴宛塗布

また鼻咽頭へは左の藥劑を一日一回づゝ塗布します。

▲沃度加溜謨　一・〇　　沃度　〇・七五　　「グリセリン」　一〇・〇

右混和外用塗布料

猶ほ其他皷膜按摩法を一日一回行ひ、また癒着あるものには「フイブロデリン」溶液の皮下注射を行ふ等は主なる治療法であります。

急性化膿性中耳炎

（原因）前項に述べたる急性中耳炎の原因と略ぼ同樣でありますが、殊に急性傳染病及び鼻咽頭の疾患或は外傷後不適當なる治療の爲めに起ることが多くまた化膿するだけが前者よりも異つた點であります。

（症候）痛みは急性中耳炎よりも一層劇しく刺さるゝが如く、裂かるゝが如く、或は抉らるるが如き疼痛を感じ、劇しき時には顱頂、後頭、肩胛部、齒牙等にまで放散することがあります、また此疼痛は總て持續性或は間歇性に來て、夕刻或は夜間に於て劇增し、朝は緩解して居

るのが普通であります、そして咳嗽、噴嚏、運動、刺戟性の飲食物は、疼痛を增し、また病勢をも劇增するものであります。

全身症狀としては、發熱があり、小兒または虛弱者にありては四十度以上に達し、或はまた惡寒、戰慄、嘔吐等を來し、甚だしきは眩暈を發し或は人事不省に陷ることがあります。

聽力は甚だしく減退して殆んど聾同樣となるが、中耳炎が回復すれば聽力もまた回復するものであります。

（經過と續發症）　本症の經過は、其原因、個人の體質、病症の輕重、幷に治療の巧拙等によつて差異がありますが、大抵は三四週間を以て治するに至るものでありますけれども、不幸にして惡性の急性傳染病或は全身の營養障害を起す處の病氣を有する時には慢性の耳疾に續行するか或は腦膜炎、外硬腦膜膿瘍、腦膿瘍、橫竇血栓、耳性敗血膿毒症等の重き合併症を起して死に至ることもあります、また乳嘴突起炎、耳眞珠腫、中耳骨瘍、骨疽等の續發症を起すことがありますから、本症の治療には愼重の注意を要するものであります。

（療法）　初期に於ては、前記の急性中耳炎と同樣の處置を取り、鼓膜の膨隆著しく殊に膿點を認むるやうにならは鼓膜穿孔術を行はねばならぬ、若し一回にて不充分なる時は反覆して行ふがよろしく、外部には溫罨法若しくは冷罨法を試み、良性にあつては、初期に乾燥療法を取り鼓膜面は十倍過酸化水素液を卷綿子に附けて淸潔に拭ひ去りたる後、二倍のアルコールを以て綿栓を行ふがよい、尙ほまた實扶的里性、猩紅熱性のものにあつては、五十倍の微溫硼酸水を以て洗滌を行ひ、ガーゼにて栓塞を行ふ等は療法の主なるものであります。

若しまた穿孔後の分泌液餘りに多量なる場合には、輕くホリツケエル氏の通氣法を注意して行ひ、十倍の過酸化水素液を以て能く淸拭し、其の後へは硼酸細末の吹粉を行ひます、それからまた穿孔後中耳粘膜に肉芽を形成しましたものには、十倍の古加因水を塗附し置き、硝酸銀幹かまたは一半格魯兒鐵液を以て腐蝕を行ひます、また鼻咽腔も耳と同時に手當を行ひまして、略治癒せる時には歐氏管カテーテル通氣法を行ひて、聽力の回復を計らなければなりません。

慢性化膿性中耳炎

（原因）本症は俗に耳ダレと唱へます處のもので頗る多く、殊に小兒に多き最も危險なる病症の一つであります。

本症は、結核、梅毒等の疾患が直接中耳を侵せるもの、外は、悉く急性化膿性症の時に不適當なる治療を受けたるか、或は患者の不攝生等の爲めに、慢性症に轉じたるものでありますが、總て虚弱なるもの、または猩紅熱、ヂフテリア、流行性感冒、腸窒扶斯等に發せる耳疾は本症に陷り易きものであります。

（症候）本症の主徴候は、聽力の障害と、膿汁の排泄卽ち耳ダレとの二つでありますが、普通の人は耳ダレは小兒には殆んど付き物の如く考へて、格別の注意を拂ひませんが、一體耳は、頭蓋の下側僅かに骨一枚で腦髓と接して居りますから、若し耳内に膿が溜まる樣のことがありますと、それが腦腔に傳つて恐るべき腦膜炎や其他の腦疾患を起して、甚しきは死に至ることがありますから、中耳炎は單純なる聽力の問題では無く、生命に關する問題と考へて大に注意せねばなりませんのです。

（豫防法）一體中耳炎に限らず、總て耳の疾患の原因を擧げて見ますと種々ありますが、其中三分の一は遺傳であります、それから外傷や生活の狀態、假へば砲兵や鐵道の運轉手の如く常に强音を耳にする者、有鉛白粉や煙草、酒等の中毒、または傳染病から起ることもありますが、其最も多いのは寒冒から起るものでありますから、耳疾の豫防を爲すには風邪を惹かぬやうにするのが第一の注意であります。

寒冒の耳に及ぼす影響は、直接と間接と二つあります、直接の影響と云ひますのは、假へば非常に暖かい室に汗を出し乍ら仕事をして居つたものが、突然寒い戸外に飛出して冷い風に觸れたり、または呼吸を迫はしくしながら高い山に登つて絶頂の冷風に當つたりする等は、鼓膜炎や中耳炎の原因となると同時に、餘り寒いと耳翼が凍傷にかゝつて剝げる等もよくあります、次に間接の影響と云ひますのは、寒冒の爲めに鼻加答兒や氣管枝加答兒等を起して、其加答兒が咽喉から中耳に通じて居る歐氏管と云ふ細管に傳はつて耳に入る爲めに中耳炎を起すこともあります。

鼻汁の拭ひ方の惡いのもまた耳病の原因となります、殊に日本一流の拭ひ方は最も危險であります、卽ち紙を兩鼻腔の前に充てゝ一氣に呼氣を營ましむる方法であります、此際鼻に紙の充て樣が餘りに强過るか、または鼻腔が狹窄或は閉鎖されたる場合には、呼氣は鼻腔に出ることが出來ませんので、反つて歐氏管を通じて中耳内に入ることになります、此際に若し歐氏管の入口に病原菌がありまするとと、其病原菌は直ちに中耳内に入つて中耳炎を起すものであります、通常日本人が鼻をカミますと、耳がピーとかチューとか云ひますが、これは前に述べた歐氏管を開いて中耳内に入る音を感ずるのであります、此危險な出來事は小兒に於ては、歐氏管が大人のよりも丸くして短いから殊に容易に起り易い、ですから鼻をかみます時には兩方を一所にかんではいけません、必ず一側づゝかむのであります、丁度西洋人等のやります如く、右の鼻をかむ時には其側の方に紙なり手巾なりを充てゝ左の方を輕く押へて、徐々に强い力を用ゐずにやりますのです、また左の方をかみます時は其反對にやりますと大抵は此危險を豫防することが出來ます、若しまた大變に鼻汁が出て、兩方の鼻腔が塞がつて困ると云ふ場合には穢

いやうですが、鼻汁を啜り込んで口から出すやうにしますと耳の方は安心であります。

それから今一つ日本の子供に中耳炎の多い原因は哺乳法の關係であります、日本の小兒は多くは寢乳の習慣によつて養はれて居ります、卽ち小兒が母體の側臥せる傍に相向つて側臥して乳房を噬へつゝ鼻呼吸を爲して哺乳して居りますから、若し其際に鼻の通氣に僅かの障害でも突然生じましたとか、または乳汁の出方が多過ぎて咽るとかしますと、其際に前に述べましたやうに、鼻腔内の病原菌が容易に中耳内に入つて中耳炎を起すものであります、ですから此等も當然廢止しなければならぬ惡習慣の一つであります、此等の事柄が原因を爲したので、歐洲より二倍程多い、中耳炎患者を我國に有して居りますから注意せねばなりません、次にまた咳嗽をします時に、口の中にある黴菌が耳に入つて耳病を起すこともありますから、肺病患者は此點に注意が肝要であります。

（療法）　本症は既に病症の成立に長時日を要して居りますから、其治癒にもまた長日月を要するものである故、醫師も患者も其積りで治療にかゝらねばなりません、併し全身の營養佳良

にして鼓膜の穿孔も中間部或は前下部にあり、中耳壁に著しき病變無く、流出する膿汁も惡臭を帶びざるものは、所謂良性に屬するものでありますから、完全に、或は完全に近く治療することが出來ますが、其他のものにあつては治療も困難に、多くは根治的手術を施さなければならぬものであります。

前に述べし如き良性のものにありましては、單に卷綿子を以て清潔に拭去するか、または膿汁多量なるときは〇・七%殺菌食鹽水或は一百倍食鹽水にて、外聽道或は歐氏管より清洗したる後左の藥劑を鼓膜面に向けて稀薄に吹き入れて撒布します。

▲硼酸末　五・〇　　サリチル酸　〇・五　　デルマトール　〇・五

右撒布料

撒布しました後は、消毒せる乾燥ガーゼを挿入して、綿栓をして置きます。

或はまた十倍の過酸化水素液を點入して耳浴を行ひ、後清拭して前記の散末を吹入し、ガーゼ或は脱脂綿にて栓塞をして置いても宜しいのです。

若しまた多少骨に異常を呈せるもの、または眞珠症のものにあつては、專門家の根治的手術を受けねばなりません。

耳硬化症

（原因）遺傳の關係は確かにあります、其他誘因としては梅毒、月經、姙娠等が關係しますが、眞の原因に至つては學者間の意見が區々であつて、未だ一定した原因說はありません。

（症候）十五歲乃至三十歲の者に多く、男子よりも婦人を多く侵す病氣でありまして、其初期には耳鳴を以て始まり、次第に增劇して聽力の障害が起り、また眩暈、聽覺過敏等を訴ふることもあります、そして最初一側を侵し、後には兩側共に侵され、鼓膜は著しき變化を來しませんが、時としては混濁萎縮等を認むることがあります。

（療法）內服藥として左の藥劑を與へます。

▲ヨードカリウム　一・〇　　ブロームカリウム　三・〇　　苦味丁幾　二・〇

水　一〇〇・〇

右一日三回毎食後分服

また左の藥劑を一日一回一筒づゝ注射を爲し、兼ねて通氣法、按摩法、或はルーッエー氏の壓迫探子を使用しますのです。

▲フイブロリジン　一・〇　グリセリン　一・〇　蒸餾水　一〇・〇

右注射料一日一回一筒づゝ

近時生理的食鹽水の注射を施して奏効せりとの報告もありますから試みると良いでせう。

メニール氏病

（原因）眞の原因は不明でありますが、兎に角、內耳の中に急に出血または滲出物ある爲めに起りますものです。

（症候）本症は一名類卒中病と云ひまして、其起るや、突然顏面蒼白となり冷汗を流し、知覺脫失を來し、同時に兩側の聽力障害を來し、甚だしきは全く聾となるものもあります。また眩暈、嘔吐、步行蹣跚等を來して患側に倒れんとする等の症狀を發しますが、此症狀の發作は數分或は數日間持續せる一回の發作に止まるものもありますが、時にはまた數日數月を經て再

び反復することもあります、鼓膜には格別異常がありませぬが、時としては外聽道內や眼球網膜に出血を見ることがあります。

（療法）本症が起りましたならば絕對的安靜が必要でありますから、室內に頭部を高くして安臥せしめ、先づ左の內服を八日間與へますのです。

▲鹽酸キニーネ　〇・〇一　乳糖　〇・五

右爲三包一日三回分服（八日間）

右の散劑を與へましたならば、今後は續いて左の水藥をまた八日間服用せしめます。

▲ヨードカリウム　〇・五　苦味丁幾　一・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回毎食後分服（八日間）

此の藥を與へたる後には、左の藥劑を朝食前に皮下注射として始めは隔日に、後は毎月少くも十二日間以上一箇注射を行ふのであります。

▲鹽酸ピロカルピン　〇・一　蒸餾水　一〇・〇

右皮下注射料、一回一筒づゝ

梅毒性内耳炎

（原因）梅毒の第三期に來り、殊に遺傳梅毒を有する小兒には、必發の症候として現はれますものです。

（症候）本症は鼓膜其他に變化を認むることなくして強き耳鳴、眩暈、高度の聽力障害を起すに至るものでありますが、稀には乳嘴突起部にゴム腫を見ることがあります。

（療法）一般驅梅療法を行ひますると共にピロカルピンの皮下注射を行ひます。

迷路震盪症

（原因）直接或は間接に耳を打擊せられたる時、或は大砲の如き強音を突然耳の近くで聞きたる時等に起ります。

（症候）其原因の強弱によつて、其症狀に種々の程度がありますが、主として聽力障害、耳鳴、眩暈等を起すものであります。

（療法）總ての音響の聞えぬ樣密室にて安靜を守り、時としては氷罨法を施し、或は電氣療法等を試みますが、內服藥としては左の處方を與へます。

▲沃度加留謨　一・〇　臭素加留謨　三・〇　苦味丁幾　二・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回毎食後分服

第二編　鼻の衛生と鼻の疾病

鼻の衛生法

（鼻の官能）鼻は外から見た所では小さい簡單なもので、顏の飾りに附着して居る位にしか思はれませんのですから、素人は大概は鼻に就て、深く注意されることはありませぬが、其實は見かけと違ひ、餘程複雜な器械で、大切な役目を有ち、身體の各方面に關係を持つて居るのですから、鼻に就て一通りの事を心得て置くのは大切のことであります。

第一は鼻と呼吸との關係ですが、鼻は呼吸する道の關門でありますから、若し鼻に病氣が出來ますと、直ぐに呼吸に影響を及ぼすものであります、鼻の第一の作用は空氣の濾過であります、空氣の中には、目の見えない種々の塵埃や細菌の澤山を含んで居ります、處が鼻の腔は、

其入口から咽喉までの距離こそ短いけれども、其途中は隆窪に廻轉錯雜して居ますので面積から申せば餘程廣くなつて居ります、其上此道には一種特別の作用があつて、空氣が此處を通過する間に、其中に含んで居る塵埃と細菌とは大概は濾過されて、其爲めに空氣は清潔なものとなります。

次は空氣に濕ひを與へます、天氣が幾日も打續きますときは、空氣はカラ〳〵に乾燥き、少しも濕氣を含んでは居りませぬから、それを其儘に吸ひ込むと、喉頭や氣管の粘膜を侵され、よくあるやうに、喉頭加答兒とか、氣管支加答兒と云ふ病氣を起す原因と爲るのであります。それで空氣が鼻を通過つて行く間に鼻の濕つて居る粘膜に觸接て程よく濕ひを與へられます、これが口から呼吸をしてはよくない、是非鼻からしなければならぬ理由の一つとなるのであります。

次は空氣に溫まりを與へます、夏は兎に角、朔風凜冽、肌を劈くやうな寒い日の冷きつた空氣を、其儘に吸ひ込んでは、矢張り喉頭や氣管支を損める心配がありますから、鼻の腔を通る

間に、鼻の溫まりに觸れて空氣が溫められるのであります、所で若し鼻に病氣が出來て、鼻から呼吸をすることが出來ませんで、餘儀なく口から呼吸をすることになりますと、實に其苦しさは何とも云へない、其事ばかり氣になつて一時も忘れる暇はない、夜も安眠の出來ない位に感ずることがあります。

（口呼吸の害）　また口から呼吸をして居りますと單に苦痛ばかりでなく、前に述べた(一)塵埃細菌の濾過(二)空氣の濕潤(三)空氣の溫まること、此三つの作用を經て居ない空氣を吸ひ込まねばならぬことになります、それで濾過れない不潔い、冷たい、乾いた儘の空氣が遠慮なく喉頭に觸れ、氣管へと入ります、そこで舌や喉頭は、其乾いた空氣の爲めに水分を奪ひ取られて、舌はカラ〳〵に乾く、喉頭も多少の影響を受けます、濾されない空氣の中には塵埃に交つて結核菌の乾いて粉末になつたのが入つて居るかも知れない、または實扶垤里亞、「ペスト」のやうな危險い病原菌が含まれて居て、其れが爲めに思はぬ病氣を受ける原因となるかも知れない、影響はまだ〳〵それだけではありません、口腔の中の水分を奪はれ、唾液の分量が減つて、自

然に消化の作用にも影響を及ぼし、胃を惡くするやうなこともあります、また喉頭の惡くなつた爲めに耳も惡くなつた場合も尠くはありませぬ。

（鼻と腦との關係）　次は鼻と腦との關係、鼻のある場所は腦に接近して居ります爲め、二つの間には、極々近い神經の作用がありますから、鼻に病氣があると、直ぐにそれが腦に響き、身體の種々の部分に神經性の病氣を惹き起すやうな場合が出來ます。

手近い例を申しますと、我々は寒冒を惹いて鼻腔を侵される、此寒冒と云ふ病氣は固と單純な病氣でありますが、けれども其爲めに鼻がツマル、思ふやうに鼻から呼吸が出來ない、氣分が惡くなる、直ぐに腦に響いて頭痛がする、仕事をするにも、勉强するのも厭になると云ふことになります、若しこれが一時性の寒冒であれば、別に心配はありませぬが若しか鼻の病氣が慢性になつて、永く持續くやうになりますと、それが腦に及ぼす影響と云ふものは恐るべきもので、實に人生の大事であると申さねばならぬ程のことになります。

私共は度々此樣な事實の實驗をする場合があります、近頃或一人の小學校の生徒が、慢性

の鼻の病氣の爲めに腦が惡くなつて、記憶力が減退し、何事も直ぐに忘れ易く、學校に出ても先生の御話は少しも頭に入らず、家庭に居ても矢張其通りで、書物の置場所さへも忘れると云ふ工合で、また或時は他に物を置忘れ、それが紛失なつたと云ふので家中を探し、甚しく家人にも迷惑をかけたと云ふやうなことがあります、若し父母が不注意に、これは腦の加減でも惡いのであらう、陽氣のせいだらうなどゝ云つて放つて置いた日には、大切な子供を一生馬鹿にして仕まふことが無いとも限りませぬ、此やうな例は、度々大人にもありますので、鼻の惡い爲めに、氣分は何時も良くない、頭に物を冠せたやうな心持がする、働く勇氣が無い、書物を讀みかけても永く續かぬ、何事にも倦き易いと云ふやうな症候を顯はす場合が澤山あります。

（鼻と精神との關係）　一歩進んでは、鼻の病氣から精神にも變調を來すやうなことがあります、極實直で溫厚な人が急に亂暴くなり、怒り易くなり、時々常識にあるまじき行動をする、平生は友にも交り、社交の趣味も有つて居たのが、俄に憂鬱の人となり、人に面會するのを嫌ひ、顏色は蒼白く、身體は痩せる、殆んど憂鬱狂のやうな有樣となり、種々の精神上の變態を

來し、恰も精神病者のやうに見えることがあります、けれどもこれは精神病者ではありません、深い原因も無いのに、急に此樣な症候が顯れて來たときには、或は其病原は鼻にあるのではないかと云ふ考へを以て、早く鼻の詮議に取かゝらねばいけません、果してこれが鼻から來たものとしますれば、其病原さへ取除けば病氣を癒すことが出來ますものです。

（其他の關係）　其他鼻の病氣は各方面に關係を及ぼし、鼻から遠く離れた所にも影響を及ぼすことがあります、手足の筋肉にも運動の障害を起し、痙攣を起し、麻痺の來ることもありますが、是は運動神經障害と云ふのであります、心臟にも關係して、心悸亢進を起し、甚しく苦しがることがあります、喘息は多く一種の神經性の病氣でありますが、其發作の原因は、鼻の病氣に基くことが多いやうに思はれますが、これは鼻の療治をして治癒つた實例があります。

眼がかすむ、視力が不充分であると云ふ場合にも鼻が原因なことがあります、鼻の病氣が原因で顯れて來ます病氣には、種々の種類と種々の形態とあります、不注意にして置きますと、一生の健康を鼻の爲めに損じてしまうやうなことがあります、大人でも同じことでありますが

特別に子供の鼻に就ては父母は氣を注けねばなりません、鼻の病氣は餘程重く考へなければなりません、それは直ぐに呼吸器と腦とに關係を及ぼすものであると云ふことを記憶えて居らるるやうに望みます、さうして鼻の病氣の最も主なる原因は寒冒でありますから、私共は寒冒を惹かぬやうに最も注意が肝腎であります。

（健康法）　それで鼻の健康を計るにはどうすれば宜しいかと申しますと、冷たい空氣を吸はぬこと、餘り匂ひの強い物や刺戟の強い香氣は避けるやうになし、鼻毛は剃らず、不潔な空氣を成るべく吸入せぬやう、無暗に鼻の中をいぢらぬこと、就中寒冒を惹かぬやうにすることは大切な健康保全法であります。

（鼻の手術を受くるの可否）　序に少しく鼻の手術を受くるの可否に就て述べます、一時專門家が鼻と諸病との關係を八ケまし〻く唱へて『鼻の病氣は獨り呼吸器に障害を及ぼすばかりでなく、鼻から反射性に發作して神經衰弱、癲癇、弱視症、喘息、「ヒステリー」、四肢筋肉の痙攣や麻痺を起す處の運動神經障害、バセドウ氏病、月經障害、神經性の消化不良症を起すものであり

ますから、是等種々の病氣は鼻の治療をすれば奇妙に癒る、、、、、、こともある』と云ひましたので、何分にも奇を好む日本人の癖としまして、専門家がかう云ひ出したからには、それに相違はあるまいと、新聞記者や小説家までが尻馬に乘つて盛んに鼻と諸病との關係を受賣りし出しましたが、彼の市に三虎を出すと云つた諺の如く「癒ることもある」と始め専門家の云つたのは「萬病は鼻を治療せば癒る」とかう云ふ風に誤り傳へられて、何でも慢性病、不治の病は鼻を治療するに限ると云ふので、難治の病氣は總て鼻科專門醫の處へ持つて行くと云ふ奇觀を呈したのでありました、併しながら總ての癲癇や、『ヒステリー』、またはバセドウ氏病や婦人病迄が、鼻を治療すれば、悉く必ず癒ると云ふものではありません、否反つて癒る場合は稀であると云つた方が良いのです、併し稀とは云ひ條癒つた例は確かにありますので、醫者の方では、これを鼻性反射性神經症狀と名付けて居りますもので、今尙ほ研究問題に屬して居ります。

さて前に述べます如く總ての患者が鼻科專門家の門を叩いて、癒るつもりで手術を受けましたが、中には無論癒らぬのもあります、しますと無學の者は、鼻の醫者は皆山師だと云ふて無暗

に怒る、また生噛りにも醫學とか、生理學とかを少し許りウロ覺えに覺えた連中は「鼻茸や副鼻腔蓄膿症の手術は兎も角も、下甲介は生理的必要のものであるから、之れを切ると云ふのは抑も大間違である、だから決して癒りつこは無い」などゝ知つた振りを云ひますが、それは申す迄も無く、生理的の下甲介を切るのは間違に相違がありません、併しながら鼻の詰るのは決して生理的ではなくて病的であります、人は生理的に鼻より空氣を呼吸しますのであつて、鼻腔内にて塵芥、「バクテリア」を濾過し、また空氣に適度の溫度と濕氣とを與へますのは前にも申します通りで、鼻の大切なる理由もこゝに存すれば、醫者が鼻毛を剃つてはいかんと八釜しく云ふのも此理由であります、然るに此作用が不完全であれば卽ち病的であることは明白なる事實であります、それで下甲介が鼻の閉塞る原因をなし、卽ち病的である場合には、適當の程度まで之を小さくせねばなりません、それには電氣で灼くこともあれば、或はまた切ることもありますので、下甲介を切ると云ふことが、必ずしも間違ではありませぬ、併し手術は簡單の樣ではありますが、適度と云ふことはなか〳〵難いものでありますから、手術は必ず多年專門

的に修養を積んだ眞の專門家に受けねばならぬのであります、「モルヒネ」は恐るべき毒藥ではありますが、良醫が之を用ゐますと、よく瀕死の病者を救ふこともあると同じことであつて、鼻の手術も手術其もの、惡いのではなくして、手術者の善惡に因ると云ふことを忘れてはならぬと共に、鼻さへ治療すれば何病氣でも癒るなど云ふ間違つた考へは捨てねばならぬのであります。

若し長らく鼻がツマつて病が重いとか云ふことでありましたなら、速かに治療を受ければよろしい、此場合によし癲癇やパセドー氏病の如きが癒らぬにしても、鼻の呼吸が樂になり、頭が輕くて快活になるだけでも、充分幸福を感謝する丈けの價値のあることゝ思はれます。

鼻病自診法

少しでも病氣に罹つたと思ふときには醫者に診て貰へば申分がありませぬが、素人自身が鼻が惡くなればどうなるか、卽ち鼻の惡いと氣の附く自覺症を覺えて置くの必要があらうと思ひます、卽ち鼻が閉塞ること、鼻汁の分泌過度なること、惡臭ある膿樣の鼻汁の出ること、嗅覺の障害と云つて、物の香氣のよく判らぬこと、衄血等あらば、鼻

の惡いことゝ心得て、一度診察を受くるのが安全であつて、俗に鼻汁の出る兒は丈夫など云ふのは大間違であると心得ねばなりませぬ、併し所謂鼻性反射性神經症狀の中には、鼻の方には何等の自覺症狀がなくして、俗に鼻の障子と云ふ鼻中隔に、骨或は軟骨の隆起せる部分があつて、これを手術して奇効を奏することもありますから、前項に擧げた諸病殊に喘息の如きは、同じ治療を長く繰り返して効顯の無い場合には、鼻の自覺症の有無に拘はらず、一度鼻の診察を受けた方がよい、喘息は確かに鼻から來ることが多いものであります。

鼻加答兒

（症候）　本症は俗に云ふ「ハナカゼ」でありますが、其眞の原因は未だ分りませんが、初め多くは數回の强き噴嚏を以て始まり、鼻汁の分泌多く、全身違和、惡寒、頭重、頭痛、倦怠、鼻閉塞等あります、本症は大人には左程の病氣ではありませぬが初生兒にありては、呼吸不充分の爲め危險に陷ることがありますから注意を要します。

（療法）　俗間療法として賞用さるゝ鷄卵酒、梅干湯の如き熱き飲料を取るのがよろしい、稍々重いのは、吸入器にて蒸氣を鼻腔から吸ひ、また兼ねて安知必林〇・五を頓服して床中に安臥

すれば、一兩日の中には大抵は癒るものであります、尙ほ其後の鼻腔のグッ〳〵は淡き微溫の食鹽水を吸入するがよろしく、專門家は局處に左の藥劑を塗ります。

▲鹽酸コカイン　〇・二　ブロタルゴール　〇・二　蒸餾水　一〇・〇

右混和一日一二回塗布

鼻血

（原因）鼻中隔其他の外傷、炎症等に來るものが最も多く、其他貧血病、萎黃病、壞血病、血友病、紫斑病、急性熱性傳染病、頭部の充血、鬱血、動脈の硬變、腎臟病、心臟病、肺病、また代償性衂血として處女の月經閉塞等よりも起ります。

（症候）衂血の症狀は誰も知つて居る通り鼻腔よりの出血であつて、其多くは毫も異常なくして突然出血するが、また中には輕度の頭痛、顏面潮紅、鼻內搔痒の感あるものもあり、劇しきものは、兩側より滾々として流れ出で、なか〳〵止血しないものもあります。

（療法）根治法としては原因病を治し、便通を調へ、刺戟性の飲食物を禁ずるがよろしい、應急療法としては、輕いのなら唯前鼻孔に綿か何かで栓をするか、または食鹽水、十倍單寧酸

水の注入、または「アドレナリン」に浸したる綿紗にて栓塞すれば止血しますが、重いのになりますと、前鼻孔に栓をしたゞけでは血液がどん〳〵流れ來る勢の爲めに取れて何の役にも立ちませんから、斯樣のものは「タンポン」を前後の鼻腔に栓塞します、これを後方より栓塞しますには「ベロック」小管と云ふもので栓塞します、また此場合に專門家は左の藥劑を鼻粘膜に注射して奏効を得て居ります。

▲鹽酸コカイン　〇・〇五　アドレナリン　三滴　蒸溜水　一〇・〇

右混和注射料

肥厚性鼻炎

（原因）體質不良の者、塵埃中に於て執務するもの、不良の氣候、不衞生的の住居、不攝生等は皆原因となります。

（症候）本症は一にまた增殖性鼻炎とも云ひます、卽ち鼻內の粘膜組織が其容積を肥厚增大し、其肥厚せる粘膜が更に增殖するので、これ等の爲めに、鼻腔閉塞して、鼻呼吸を營む能はざるのが第一の苦痛であります、從つて音聲は變じて鼻聲となり、且つ頭重、頭痛、眩暈、倦

怠、記憶力減弱、神經衰弱、不眠、又は喘息或は癲癇等を起すことになり、また寒冒に罹り易く、咽喉加答兒を來す等頗る厄介なる病氣であります。

（療法）本症は原因の條で申します如く、一般不衛生的の生活が主たる原因となりますから第一に此等を避けて、衛生的の生活を守り、若し不良の體質ならば力めて之を改善しなければならぬ（體質の改善法、體格の强壯法等は後日稿を改めて詳述せん）それから輕症のものは、左の藥劑を鼻腔内に塗附するがよろしく、重いものは、專門家に就き根治的手術を受くるがよろしい。

▲鹽酸コカイン　〇・三　千倍アドレナリン　〇・三　ブロタルゴール　〇・三
蒸溜水　一〇・〇
右混和、一日一、二回塗布

單純性萎縮性鼻炎

（原因）不明なり。

（症候）本症は前症とは反對に鼻粘膜の萎縮する病氣ですが、其爲めに鼻内

は異常に擴大し、分泌物は、白色、黄色或は帶綠黄色の皮革樣の凝着をなし、また頭重、頭痛、鼻内乾燥、嗅覺障碍等を來すものであります。

（療法）五十倍の重曹水を以て鼻内を洗滌し、其後に五十倍の「メントール、オレーフ」油を塗布するのであります。

有臭性萎縮性鼻炎

（原因）妙齡の婦女を侵すことが多いものですが、原因は不明であります。

（症候）本症は單純性のものよりも一層劇しく鼻粘膜は萎縮して、骨質までも侵さるゝ爲めに、鼻腔は甚だしく擴大し、分泌物は悉く凝結して拇指大の結痂となり、其色は汚穢灰白色、綠黄色、黑色、褐色等を呈しますが、惡臭甚しく、鼻を衝くので、一名臭鼻とも云ひます、此結痂と粘膜との間にも惡臭を發する膿を分泌し、其他、鼻閉塞、呼吸困難、嗅覺脱失、頭重、頭痛、記憶力減退、咽頭乾燥、消化不良等を來すものであります。

（療法）頑固にして容易に癒らざるものであります、通常鼻内を五十倍重曹水または百倍食鹽水、或は二十倍過酸化水素液にて充分洗滌したる後、左の藥劑の何れかを、卷綿子にて鼻粘

膜に摩擦的の塗布を行ひます。

△五十倍メントル、オレーフ油　二〇・〇

右鼻粘膜塗附料

△五十倍デシンフェクトール水　二〇・〇

右鼻粘膜塗附料

鼻黴毒

（原因）他臓器の黴毒の如く「スピロヘーテ、パルリダ」の侵襲に因るものでありますが、これには他人の黴毒病竈に觸れたる手、手巾、器械等の媒介、或は直接の接觸によつて發するのもありますが、其多くは全身黴毒に於ける症狀の一つ、即ち第二期及び第三期に於て發するものであります。

（症候）直接傳染に因るものは症狀輕く、鼻入孔部に淺き潰瘍を造り、邊緣が腫起硬結して底面平坦となるか、或は凸隆して居るのもあり、或は痂皮を以て被はれて居るのもあります。

全身黴毒に現はるゝものには、第二期症と第三期症とによつて異なるものであります。

第二期症に於ては、鼻腔粘膜に紅斑が出來ます、これが出來ますと、始めは鼻の中が痒くて熱く乾いたやうな感じがあつて、外から見ると中が紅くなつて居ります、そして紅斑がだん〳〵に奥の方まで擴がつて行きますと、薄い鼻汁が澤山に出て嗅覺が鈍くなります、それからまた赤丘疹の生ずることもあります、これは鼻の孔と鼻の中の下の方に出來ますもので鼻汁が澤山に出る、疹が擴がれば鼻粘膜が腫れて、空氣の通りが惡くなつて嗅覺に異常を來すやうになります、そして此疹は大抵數週乃至數ケ月續いて居ますが、若し潰れて潰瘍になれば鼻液は膿のやうになつて來ますものです。

第三期には護謨腫が出來ますが、これは非常に恐ろしいものであります、護謨腫の出來ますのは、甚だ緩徐なるものであつて、最初の中は病人も氣が附かない、追々粘膜が腫れるに從つて呼吸苦しくなるので、始めて鼻に故障があるのが判る位のものであります、さうして居る間に段々鼻汁が增して來る、遂には護謨腫が破れて膿が出て來ます、これで御仕舞になると大したこともありませんが、同時に骨を侵して壞疽を起して其骨が腐れて、鼻をカム時に骨が出て

來ます、それも少し位なれば大して鼻の形は變らぬけれども、大抵は鞍鼻と云ふて丁度馬の鞍の形のやうに鼻梁が凹む、甚しきは鼻の形が全く無くなつて唯二つの孔だけ圓く殘つて、甚しい醜形になるばかりでなく、呼吸にも困難を來すやうになります、或は此鼻骨の壞疽が口蓋骨に傳はつて口蓋骨を破壞したり、時としては其炎症が腦にまでも波及して恐ろしき腦膜炎を起すこともあり、或は鼻の粘膜が後に萎縮して鼻腔が廣くなり、惡臭ある液を長く洩らすこともあります、尤も此鼻黴毒に來る臭鼻と、前に述べた有臭削瘦鼻炎とは異なるものであります。

（療法）局處には五十倍の「コカイン」水、或は三十倍の「プロタルゴール」水、または五十倍の「メントール、オレーフ」油等を塗布します、また全身黴毒に來るものは驅黴療法（花柳病學參照）を行ひ、第三期に來る骨疽は外科的手術によつて之を除去する等は主なる療法であります。

垤實扶性里鼻炎

（原因）リヨフレル氏の實扶垤里亞稈菌の爲めに起ります。

（症狀）鼻粘膜は、汚穢灰白色の義膜と膿樣物を以て閉塞せられ、少しの刺戟にても直ちに出血し易き傾向を有するに至ります、またそれと同時に惡寒、發熱、頭重、頭痛等を來すものであります。

本症は單獨に特發することもありますが、また喉頭の實扶垤里即ち素人の實扶垤里として知らるゝものに續發することもあります。

（療法）實扶垤里血清の注射は何よりの療法でありますから、片時も早く此注射を受くれば宜しく、他には殆んど何等の療法を要せざるも、鼻内へ三十倍の「プロタルゴール」液の塗布を爲すのは元より差支がありません。

鼻結核

（原因）他臟器の結核と同じく、コッポ氏の結核菌が原因であります。

（症候）本症には、腫瘍狀を呈するものと、潰瘍を呈するものとの二種類あります。

腫瘍狀のものは、多く鼻中隔前端の軟骨部に、顆粒狀または乳嘴狀の結節となつて現はれ、少しの刺戟にても直ちに出血し易く、結節は膿または結痂を以て被れて居ります。

潰瘍は、中隔軟骨部または下甲介の前端或は鼻底に發することが多く、潰瘍底は貧血性の肉芽を有し、周圍には浸潤があり、また粘液膿性の分泌物を有し、それが追々に進行すれば遂に軟骨に穿孔することがあります。

それから患者の自覺症狀としては、初めは單に寒冒に罹つた時の樣な心持でありますが、追々腫瘍の增大するに連れて鼻閉塞を來して諸般の障害を起すに至り、また潰瘍を生ずれば、膿樣、混血樣の分泌物を漏らすに至るものであります。

（療法）　他臟器の結核症に於ける如く全身營養療法を行ひ、局部は早期に充分切除するか、または搔爬を行ひ、濃厚の乳酸を塗附するか、或は電氣燒灼を行ふ等は主なる療法であります。

鼻茸

（原因）　本症は俗にはなたけと申しまして、副鼻腔膿症が原因となることもあれば、また單に慢性鼻炎の爲めに生ずることもありますが、また遺傳の關係も確かにあります。

（症候）　鼻茸は、多くは帶白色灰白色の表面滑澤にして少しく透明なる浮腫樣のもので、丁

度魚の腐腸の如くに見ゆる柔軟なる腫瘍であります、また其大きさは、小は帽針頭大より、大は手拳大に至り、其數は一個或は數個若くは數十個の多きに達することがあります、そして其數多きか或は其形大なるときは鼻入口に漏出することがあります、色は血液含有の多少に從つて濃淡色になります。

鼻茸に起る症候は鼻閉塞であつて、これは大きい程其障害は大なるものであります、そして頭痛、鼻性癲癇、鼻性喘息、記憶力減退、眩暈、中耳加答兒、咽頭加答兒、眼疾患等を惹起すに至り、鼻呼吸不能となり、また漿液性、粘液性、膿性等の分泌物の爲めに鼻腔を閉塞することもあります。

（療法）　姑息的療法は一も効がありませんから、速に專門醫に就いて剔出して貰ふに限ります。

鼻の惡性腫瘍

（種類）　鼻腔に生ずる惡性の腫瘍中に最も多いものは、肉腫に癌腫であります。肉腫は主として青年男女を侵すものであつて、忽ち增大するに至る處の頗る

惡性のものであります、增大すれば鼻閉塞の爲めに腫々の障害を來すばかりで無く、顏面は膨隆し、眼球は突出して醜形を呈するに至り、また患者は惡液質に陷る等他の臟器の肉腫に於ける狀態と同樣の症を呈するに至るものであります。

癌腫は多く四十歲以上のものに發すること他の場合と同樣であります、本症は肉腫よりも一層發育は迅速にして、直ちに破潰糜花して膿性分泌物を出し、漸次周圍組織を荒蕪頽敗せしむるものであります。

療法　何れも早期に充分剔出して貰ふがよろしく、增大せるものは手術も其効無く遂には一命を失ふに至るものであります。

鼻中隔彎曲症

（原因）種々の說明を附する人がありますが、眞の原因は不明であります、

（症候）鼻鏡によつて鼻內を檢するに、俗に云ふ障子卽ち鼻中隔が右か或は左の方に曲つて居るものです、甚だしきは其爲めに鼻梁まで曲つて居るのもあります、併し輕度のものにあつては格別の障害を起しませんが、彎曲甚だしきものにあつては、突出せる側の鼻

腔閉塞を來す爲めに頭痛、頭重、記憶力減退、眩暈、視力障害等を起すことがあります。

（療法）專門家に就き、粘膜下窓狀切除術と稱する手術を受くるが良い。

上顎竇蓄膿症

（原因）流行性感冒の後に來るものが最も多く、其他齲齒、急性慢性の傳染病後に來ることもあります。

（症候）輕症にありては單に平素鼻加答兒の症候があつて、一日數回或は數十回鼻をかまねばならぬものですが、其鼻汁は漿液性乃至粘液性にて、時としては膿性の黃綠色の濃厚なものを出すこともあります、重きものにあつては、時として鼻汁に惡臭あるものもあり、または著しく惡臭あるものもあります、患者は鼻口閉塞の爲めに頭重、頭痛、眩暈、倦怠、記憶力減退、其他種々の神經症狀を發するに至り、また睡眠中鼻汁を嚥下する爲めに胃加答兒を起し、甚だしきは鼻根眼窩部の鈍痛、時としては發作性の鑽痛を發し、また往々下眼窩神經痛を發することもあり、時にはまた眼球の突出症を來すこともあります。

（療法）輕きものにありては鼻腔內より中鼻道洗滌法を每日根氣よく行つて居れば、其中自

然に治癒に至りますが、重きものにあつては、元より手術を受けなければなりません。

前額竇蓄膿症

（原因）　前者と同樣の原因によつて起ります。

（症候）　前頭骨の眉の上内方に當る部分に左右各一個宛の腔洞があります、即ち前額竇ですが、此腔洞は細い管狀の路によつて鼻腔内に通じて居るものでありますが、本症は此竇内に膿の溜る病氣であります、併し溜まつても鼻孔と交通して居る間は格別の症狀を呈しませんが、若し此交孔路が膿汁の爲めに甚だしく狹めらるゝか、或は閉塞するに至れば劇しき上眼窩神經痛を發して頭首の前屈、咳嗽、飲酒等の爲に增惡するに至ります、其他頭重頭痛は勿論種々の神經症狀を呈するに至り、嗅覺は消失し、眼には結膜炎、角膜炎等を發し、甚しきは竇の内壁が破潰して腦膜炎を起すこともあれば、或はまた眼窩壁を穿破して顏貌醜形を呈することもあります。

（療法）　輕きものは前額竇洗滌管を以て洗滌を行ふても宜しいが、重いものにありては元より手術を受けねばなりません。

其他蝴蝶骨竇蓄膿症、篩骨蜂窩蓄膿症等もありますが、何れも大同小異であつて、何れも專門家の手術を受けねばならぬものですから略します。

腺樣增殖症

本症は「アデノイドウイゲタチオン」と云ひ、學齡兒童に最も多く、低腦兒とは最も密接の關係がありますから、他に異常なくして、智力の發達不充分なる兒童にあつては、一應本症の有無を專門家に就て調べて貰ふの必要があります。

（原因）　不明ですが、遺傳の關係、土地氣候の關係は多少ある樣に思はれます。

（症候）　鼻腔閉塞は主なる症候であつて、鼻呼吸不能の爲めに口呼吸となり、顏面筋は弛緩し、鼻唇溝が消失し、常に半ば口を開き、顏面の表情的動作は頗る遲鈍となり、外鼻の發育不完全にして、所謂「アデノイド」顏貌と稱する一種特別の痴呆狀容貌となります、そして眠れば鼾聲高く、幼少の者は爲めに睡眠不安に陷ることがあり、言語は著しく鼻聲となるものであります。

精神作用は痴鈍となり、頭重、頭痛、作業不能、記憶力減退等の重症神經衰弱症狀を呈する

に至ります。

（療法）成るべく早く手術的に增殖せる腺を剔出するがよろしい。

耳鼻科學講義 終

診斷學講義

昔しは病人を診察しますには、望、聞、問、切とかう四通りの方法がありました、望とは患者の樣子を望み見ることで、聞とは容態を述べるのを聞きますこと、問とは此方より種々の問を發すること、切とは患者に就て親しく診察することでありますが、此診察法は脈搏を檢するにしましても今日の如く時計などを用ひません、唯指頭の觸感によつて診察したものであつて、其胸部や腹部等も皆觸診でありました、今日ではそれが非常に進歩しまして脈を診るにしても檢脈器など云ふ器械まで出來て非常に細かなことまで分るやうになりましたのです。

今日の診斷學上にては理學的診斷法、化學的診斷法、鏡檢法等あります、理學的診斷法は、檢脈や、聽診、打診のことを云ひ、化學的檢査法は或る藥品を用ひて化學的の變化を見る法、即ち檢尿法などは之に屬します、それから鏡檢法は顯微鏡を用ひてする方法でありますが、これ等は一定の器械と相當の專門的智識と、それから熟練とを要するものでありますから、本講に

ては一般素人に應用の出來ます處の、所謂素人診斷法なるものに就て講述する積りであります。

檢溫法

人類並びに溫血動物は、其生活機能によつて、身體中に溫熱を生じますが、これは體溫と申しまして、身體の健康なる間は、周圍の氣候の寒暖の爲めに少しも變易することなく、常に攝氏檢溫器の三十六度五分より三十七度五分位の間にありまして一晝夜間に少し計りの增減はありますが、其差は攝氏の一度を越ゆることはありませんから、若し其差が攝氏の一度以上に達するか、または三十六度五分以下、或は三十七度五分以上に昇れば必ず何等かの異常があるに決つて居ます、體溫の增減は夕に進み朝に退きますもので、減退の極度は午前二時頃、增進の極度は午後四時より六時の間であります、尤も食事の後や神經を興奮させた後は熱が昇りますし、小兒は大人より高く、老人は稍低いのが常であります、詳しく云へば

十歲以下の小兒　平均三十七度五分

二十歲より三十歲迄　三十七度一分

三十歲以上六十五歲迄　三十六度九分

七十歲以上の老人　三十六度五分

であります、勿論之は平均數であります、人によつては同年配でも多少の差があるものですから、平素健康時の體溫を常に測定して置いて、病氣の時と比較すると一層明瞭になります、

重病者殊に熱病者にあつては體溫常度を超えて昇りますが、これは發熱と申しまして、甚だしきは攝氏四十度若しくは四十一度五分位に至ることがあります、また病症によりては常度よりも降つて三十五度に降ることもあります、總て體溫よりも昇り或は降るのは何か異常のある證據であります。

體溫を計るには通常攝氏の檢溫器を用ひますが、此器は氷點を零度として、沸騰點は百度であります、そしてこれを測るには通例腋窩に於て、先づ患者の手臂を擧げしめて體溫器を深く腋窩に送り（腋窩が濕つて居らば乾いた手拭でよく拭ひます）次で臂を垂れ、肘を屈曲して胸の方へ押し附け、十分間其儘になし置き他手にて體溫器を拭き取り、直ちに度目を點檢して之

を體溫表に記入するのであります、體溫を測る時間は通常朝夕二回ですが、病症によつては三回も四回も測定を要することがあります、また病症に由つては腋窩の外更に肛門或は陰膣中にて測定することもありますが、此場合には其溫度は腋窩で測るよりは少し高いものであります。

檢脈法

脈搏は心動の反應でありまして、通常體溫の昇降に連れ增減するもので、其割合は體溫一度の昇騰によつて脈搏四至を增すことになつて居ります、健康大人にありましては、一分間に六十五搏乃至七十五搏が平脈でありますが、小兒はそれよりも多く、また同じ年齡にあつても身長の高き人よりは、低き人の方が多くなつて居りますが、これも矢張り平素健康の時に檢査して、一分間幾つ搏つかを覺えて置きますと、若しか病氣に罹つた時には大に參考になります。

年齡による脈搏數は一分間左の通りであります

初生兒	一三五至一二五
二歲	一〇〇
三歲	九二
五歲	九〇
十歲	七八
十五歲	六五—七五
二十歲より五十歲	七五
六十歲	七七
七十歲	八〇
八十歲	

また熱病者になると八十から百五十搏位になることもありますが、脈搏は總て力强く搏つのは宜しく、弱くして絲の如く細く感じますのは身體の衰弱せる徵、また體溫に比して脈搏の多いのは、心臟の衰へたる徵候でありますから斯樣の場合には注意を要します。

脈搏を測るには、腕關節の上部拇指に偏する一側の內面（撓骨動脈）に示指と中指との指腹

を當てゝ、他手に時計を取り、一分時間に搏動する脈搏を數へて、之れを脈度表に記入するのでありますが、此外に脈の强弱卽ち强いか弱いかと云ふことも同時に檢査して備考欄に掲げて置くのであります、通例體溫は青色の鉛筆を用ゐ、脈搏は赤色の鉛筆を以て記入するのであります。

呼吸測定法

呼吸は胸廓の縮張及び肺臟の弛張によつて起るものですから、丁度皮排の作用と同樣であります、一分間の呼吸數は大人にあつては十四回乃至十八回が普通で、丁度脈搏四つと呼吸數一つとの割合になつて居ます、呼とは呼く息、吸とは吸ふ息のことで、此一呼吸を以て一つと計算するのですが、大人になつて十八回以上を呼吸促迫と名づけるもので、甚しきは一分間に七十回以上にも至ることがあります、呼吸促迫を來す病氣は、熱病、心臟病、肺、胸膜の諸病であります。

呼吸を測るには一手掌を（冬ならばよく溫めて）胸の上か、腹の上に當てゝ他の手に時計を採り、一分間に起る呼吸を數へて黑色の鉛筆にて記入して置くのであります。

容態の聞き方

醫者は患者に如何なることを尋ねるものか、また患者は如何樣に答ふべきものかと云ふことは、何人も凡そ心得て置くの必要があります、第一醫者は患者の迅速な又精密な答によつて速に且つ正確に其患者の症狀及び發病の原因を見出して適當な診斷を定め、直ちに夫々の治療に着手することが出來ます、また第二には患者として平素心得が無いと醫者に問はれても返答が出來なかつたり、また大切な事を醫者に云ひ落したりする樣な不利益が無いとも限りませぬから、假りに醫者と患者の問答として講述します、これが素人には診斷學、嚴密なる意味の診斷學よりも必要なことであり、また此問答は手紙で容態を云つてやる樣な時にも參考にならうと思ひます。

問　姓名は

答　賴山陽

問　年齡は

答　滿三十五歲七ケ月

問　職業は

答　現今は專ら文學の著述に從事して居ります

問　原籍及び現今の住所は

答　原籍は安藝國安藝郡何山村であります、東京へ出ましたのは今から十四年前で、現今は本郷區西片町十番地に住居して居ります

問　今日迄旅行したことがありますか

答　度々あります、十四年前東京大學へ入ります前は岡山高等學校に居りましたが、此折迄は何處へも餘り出ませんでした、大學へ入ってからは、春夏の休暇には、必ず各地へ旅行して景色を眺めるのを樂みに致して居りました、大學卒業後は洋行しまして、三年間維納に居りました、伯林、巴里、倫敦等少しづゝ滯在しました、歸朝してからは大學教授になりまして、一昨々年支那朝鮮へ歷史上の取調べに參りましたが、揚子江の近傍で惡い「マラリヤ」熱に罹りました、それからヒドク健康を害しまして今では職を辭して目下自宅に計り居ります。

問　御兩親は御壯健ですか

答　父は七年前六十歳で沒しました、病氣は卒中と云ふことでありました、母は本年五十九歳で機嫌良く致して居ります

問　令閨及び御子樣は

答　妻は至つて壯健です、女の子一人男の子一人ありますが皆丈夫です。

問　御兄弟或は近親の中に病人がありますか

答　父の妹卽ち叔母に子宮癌が一人あります、母方の叔父は半身不隨であります、其他は格別のことはありません、概して私の一族は長命です、沒した伯父叔母は病名は確かに知りませんが、皆七十歳前後迄生きました。

問　貴方は高等學校時代迄は餘り旅行も爲さらなかつたと云ふことですが、幼少の時は虛弱でありましたか

答　幼少の折は虛弱でありました、尤も格別の病も有ませんでしたが、外の子供の樣に、山

野を駈け廻ることは餘り好みませんでした、其習慣で高等學校も過しましたが一度肋膜炎を煩ひました。

問　肋膜炎は何時でしたか又其經過の模樣は

答　十九歳の冬でありました、重症では無いと云はれました、一ケ月許りで治りました

問　其後折々咳嗽や熱が出るやうなことはありませんでしたが、又胸が痛むやうなことはありませんでしたか

答　肋膜炎後を海濱で半年許り養生しましたが、其後は反つて丈夫になりました、咳嗽や熱などは餘り記憶しません。

問　大學時代には御壯健であつた樣ですな

答　旅行をしたり又其他運動をした爲めですか誠に丈夫でした

問　洋行中に病氣はありませんでしたか

答　有りました、維納ではヒドイ肺炎に罹りました、非常な高熱で一時人事不省に成つたことがある位です、併し幸ひ治りましたが、それから程無く歸朝しました。

問　歸朝後は如何

答　支那で『マラリア』に罹るまでは先づ丈夫でありましたが、暫く內地へ歸つてからも『マラリア』が起りました、併し兎に角治りましたが、其後ひどく身體を疲らせました。

問　近頃の御容體は

答　近來暫らく工合が宜しかつたので別に藥も服まなかつたのですが、十日ばかり前から、大して風邪も惹かないつもりですが、氣分が勝れませんで困ります。

問　咳嗽が出ますか

答　咳嗽は『マラリア』後少しづゝは折々出ましたが、近頃少し多いかと思ひます。

問　熱は如何

答　近頃何やら身體が疲勞しますが、殊に午後に成ると甚しく感じますから、一昨日と昨日と體溫を檢べましたら午後五時頃に一昨日が三十七度八分、昨日が三十七度五分ありました。

問　喀痰は出ますか

答　喀痰は別に出ないやうです、早朝に少し出ます限りです。

問　食慾及び便通は

答　食慾は一向進みません、便通は異常無く毎日一回あります。

問　夜分は寢られますか、盜汗はありませんか

答　夜分餘り良く寢られません、それに折々盜汗が出るので困ります。

問　喉頭は痛みませんか

答　別に感じません。

問　頭痛、眩暈は致しませんか

答　致しません。

問　嘔氣や腹痛はありませんか

答　ありません。

問　胸の痛むことはありませんか、それから動悸がしますか

答　胸は痛みませんが肩が凝つて困ります、少し痛いやうなこともあります、動悸はしません

問　以前は之よりも肥えて居りましたか

答　元來餘り肥えては居りませんでしたが近來著しく痩せました。

先づ問答は大抵これにて終りますが、醫師はこれにて肺結核ならんとの疑を措きます、また此問答の中に患者の脈を檢べ、また外貌や容子を望診し、また眼、舌、喉を診て、衣服を脫がせる、それから胸及び背部の打診聽診、また腹部の按診、尙ほ手足其他全身を精密に檢査し愈々肺結核なるを確かめ、其養生や消毒其他の注意をなして歸すのでありますが、尙ほ場合によりてはビルケーの診斷法、喀痰の顯微鏡檢査或はレントゲン線の診査を爲すこともあります。

そこで賴山陽は醫者から攝生法を詳しく聽き處方をもらつて歸ります、今度は婦人の患者が來た、妊婦のやうであつた。

問　姓名は

答　木下藤吉郎の妻エン子と申します。

問　年齢は

答　明治十四年一月一日生れで御座います。

問　職業は

答　妾は別に何も御座いませんが、夫は軍人で御座います。

問　原籍、住所は

答　故郷は京都の桃山で御座いますが數年來東京青山に居ります。

問　此處で兩親兄弟近親の健否、また已に死亡せるものは其死因、又一家内の凡ての健康狀態を尋ぬること前の如く

答　（右の答略す）

問　貴女の幼時ば丈夫でしたか

答　至つて壯健で御座いました。

問　月經は何歳からありました

答　十四歳の春から。

問　月經があつてから以來何か病氣をしましたか

答　何も煩ひません。

問　平素月經は何日間位ありましたか、血量は如何、また不順なことはありませんか

答　大抵五六日間づゝあります、二日目と三日目と二日間位は隨分澤山あります、大抵毎日順當に參ります。

問　月經の前後に痛みはありませんか

答　月經の前に下腹が張つて痛みますことはあります、併し多分の事はありません。

問　平素帶下はありませんか

答　少し白い物が出て居ることはありますが、度々は御座いません。

問　結婚は何時でしたか

答　七年前。

問　これまで御産は

答　二度致しました、それから一度三ケ月で流産しました。

問　二度の御産は何時でしたか

答　廿二歳の時と二十五歳の時とで御座います、二度とも惡阻も輕く御産も樂に濟みました。

問　流産は

答　昨年の春で御座います、別に病氣と云ふ程のことも無かつたのですが、婦人會のことで大變忙しかつた爲め、夜分なぞも遲くなりまして、自然不養生を致した爲めと存ぜられました、それで此度も何うも妊娠の樣で御座いまして、それに二三日少し氣分が勝れませんから、今度は又失敗の無い樣に御診察を願ひに參りました。

問　最終月經の始めの日は

答　今日から丁度八十日前であります。

問　平素の通りでしたか

答　日限は五日間强さも常時と別に變りませんでした。

問　貴下は平素何樣云ふ臥方を爲さいますか

答　左樣ですな、定つても居りませんが左側を下にして休む方が多いかも知れません。

問　近頃御氣分に變りがありますか

答　頭痛がしていけません、それに二三日下り物が少しあります、矢張り胸が惡いので食事が進みません。

問　どんな物が下りますか

答　多分ではありません、黄色い樣な液が時折り出ます、それに少し腰が痛みます。

問　便通及び排尿は

答　尿は異常無いと思ひますが、便通は兎角結して困ります。

これより尿を器に取らせて、醫者はこれを檢査す、異常無し。

問　動悸は仕ませんか、足はだるいことはありませんか

答　動悸は時々致します、二階へ上ります位でもぢき動悸が仕て困ります、尤も暫くすればぢき止みますが、それから足ばかりで無く手や腰の邊がだるい樣な變な氣持が致します。

問　夜分は安眠しますか

答　寢付が惡いので誠に困ります、昨晩なども二時頃までも目が冴て仕舞つてどうしても眠られませんでした。

問　何か物事が氣になりますか

答　つまらないことが氣になつて困ります

問　昨今熱が出る樣なことがありませんか

答　毎日自分で體溫を檢べて居りますが熱は出ません。

問答はこれで終つた、これは妊娠に因する一種の神經症狀であります、妊娠が尙ほ進んだ場合ですと、胎兒の運動(胎動)を何月何日から氣が付いたかと云ふことを必ず問はなければなりませんし、また產婦なれば下り物があるか、最早無いかを取り敬ず尋ねなければならん、それから陣痛の初め等を尋ね、次で妊娠中の經過を問ふべき順序でありますが、婦人の病氣には如何なる場合にても生殖器を中心とせる症狀、卽ち月經、下り物、妊產等に就て必ず詳しく尋ねなければなりません、實に婦人の疾患の多くはこれ等の異常に基くことが多いものであります。

望診法

望診とは患者の全體を望み見るのでありまして、これは最も大切な診斷法であります、尤も是には一定の規矩準繩はありますが、最も熟練を要するものでありまして、漢方にてはこれがなか〳〵發達したものであります、講者が幼時父より屢〳〵聞いたことですが、先づ病室に入るときに患者の臥姿をちつと眺める、其時に床に臥せつて居つた患者が何となくふつくりと豐かに見えるのは假令其患者は如何に痩せて居つても、衰弱して居ても癒る、つまり何と無く生氣がある、またこれに反して患者がいかにも姿が薄い豐かで無い、とかう云ふのはいくら其患者が肥つて居つても元氣があつても大抵は死ぬ、つまりこれは生氣が無いと、謎の樣なことを度々聞かせられましたが、元よりこれには標準が無い、標準が無い

けれどもまあさう直感する、それで講者も自分で病人を扱ふ樣になつてから、これを注意して見ると、大抵これが適中する、これなどは望診法中の最も貴重なるもの、一つであらう、併し唯かう云ふ漠然たることのみにては勿論初心者に分る筈も無く、法として諸種の診法を行つて初めて診斷所謂斷●のつくのであるから、望診法の一般に就て講じませう。

（體格の診方）　望診は第一に體格を診ます、體格の良否は病の經過並に其豫後卽ち癒るか癒らぬかに大關係を有するものであります、醫道では人間の體格を强壯、中等、虛弱の三種に分けまして、彼横綱力士も、三尺の侏儒も皆この中に當嵌めます、强壯の體格とは骨組が强く大きく而かも逞しく、胸廓が濶く、筋肉の發達宜しく堅く締つて居るものゝことであり、虛弱なる體格とは此反對であります、醫者が『どうもなか〳〵病氣が重いが、體格が立派ですから無論御心配には及びません』と云ひますのも、また『病氣は大したことはありませんが、何分體格はお弱い方ですから餘程大切にしませんといけないのです』と云ふのも、ツマリ此體格の良否によるのであつて、體格の良い人は餘り病氣にもかゝらなければ、また罹つてもさうは弱ら

ず、恢復期に入れば早く恢復すると云ふ得點がありますから、何でも幼少の時代より體育に注意して强壯なる體格を養成するの必要があります。

（體質の診方）　患者の身體一般の構造を眺めて見まするに、各人それ〴〵特有の狀態卽ち體質を有するものでありますが、診斷學上では通常これを腺病質、神經質、卒中質等に區別して居ります、腺病質は全身の構造薄弱にして痩せ、頸が長く胸が狹く、色が蒼白く眼球は大きくして一種の色澤を帶びて居りますが斯樣の人は肺結核等に罹り易きものであります。

神經質の人は一般に痩せて居ますが、これは寧ろ其行爲に特性を表はすものでありまして容貌は一見怜悧さうに見え、物を見るに敏捷でありますが、此等の人は神經衰弱、ヒステリー等腦の機能障害に關する病氣に罹り易きものであります。

卒中質は全身の發達よろしく、殊に脂肪に富み、頸は短く總て神經質の反對でありますが、此體質の人はよく腦溢血にかゝり易きものであります、總てかくの通り各人に固有の體質を有するもので、これがまた診斷上大なる助けを爲すものであります。

眼の診方

眼の診方は大に熟練を要するものでありますが、一般に云へば瞳孔の散大せるは內臟に寄生蟲の生じて居ります時、瞳孔の縮小は脊髓痨の疑ひがあり、左右瞳孔の不同は腦膜炎、眼大きくして光澤あるは肺結核、眼光射るが如きは精神病、視勢定まらざるは精神に異常あるもの、水樣光澤を帶びるは大酒家、眼球突出せるはバセドー氏病、眼球光澤なく視勢朦朧たるは衰弱甚しき者に見るものであつて、各其々特長を有して居ります。

鼻の診方

鼻は、人相學の方から云ひますと須要の地位を占めて居ますが、診斷學上には格別重要ではありません、一般に酒渣鼻は酒客、慢性腸胃病者、月經不調等の人に多く、鞍鼻及び鼻中隔の潰瘍は梅毒、癩病患者の特長にして、小鼻のピク〳〵動くのは呼吸困難の徵であります。

口元の診方

口を常に開いて居るのは愚人の相と云ひますが、これは腺增殖症より來ますので、矢張り低腦兒などに多いのですから、これは人相學に一致して居ります、其他口角の昂上り、口を大きく開けて居るのは病氣危篤の徵候にして、口を堅く食ひ縛つて居

るのは苦痛の表徵、口が左右に牽かれて居るのは破傷風の疑ひあり、口の片方に曲れるは顏面神經麻痺の徵にて、口を緊しく閉ぢ、口より泡を出し、人事不省に陷れるは癲癇發作中に見る處でありますから、健康者は常に口元の整然と締つて居るのが好いのであります。

顏容の診方

健康者の顏容は平和でありますが、病者にはそれ〴〵異常を來すものにて、顏面一般に腫脹して睫毛、眉毛等が脫け、獅子の顏に似て居るのは癩病者、顏貌甚しく憔悴して皮膚に冷汗或は粘汗を出すは「コレラ」病によく見、面貌の呵呆然たるは一種の精神病者、額に縱皺のあるのは苦痛不安の狀にて、其他種々の特長がありますが、到底筆を以て云ひ現はすことの出來ませぬもの故、實地に就て練習しなければなりません。

皮膚の色の診方

皮膚の色は人種、職業、其他によつて、健康者に於ても千種萬態でありますが、今病的に多く見るものを擧げて見ますと、蒼白色は貧血、十二指腸蟲病、結核、鉛中毒、慢性胃腸病者によく現はれ、紅色は腦充血、高熱、魚類中毒、月經不調等に來り、黃色は黃疸、十二指腸加答兒、肝臟病或は「サントニネ」中毒、柑皮病等の特徵、青銅色はアヂソン

氏病、砒石中毒に來り、銀色は硝酸銀中毒に起る特徴であります。

音聲の聞き方

音聲は高くして爽かに、然も腹の底より出るやうなのが最も宜しいのですが、低聲なるは虚弱者にして、語尾の消えるは呼吸困難の徴、喘嗄て居るのは氣管枝加答兒または肺結核病者の音聲にて、ハア〳〵と呼吸音のみ聞えて音聲の殆んど聞えぬは喉頭結核、著しく鼻音を帶るは梅毒末期の患者の音聲であります。

反射機の檢査法

反射機の檢査法は種々ありますが、此處には素人にも出來て然も最も必要なる腱反射の診法のみを述べます、卽ち椅子に倚り、兩足をダラリと下げさせ、膝の下部を手を以て輕く打つに、健康者は直ちにピンと足が上方に擧るものでありますが、これが脚氣等に於ては其機能の全く消失することもあり、また病氣によりては其機能の甚しく亢進するものもあつて、何れも其度の過ぎたるは病的の徴候であります。

歩行の診方

歩行するに當つて姿勢直立せぬのや、酒醉者の如く蹌踉として千鳥足に歩くのは腦または脊髓に疾患あるものにして、また鷄の走るに似て歩行の調子を失

ふは脊髓癆者、また小足にチョコ〳〵歩き、段々それが急になつて、遂に倒るゝに至るは重き腦病者に見る處であつて、總て歩行に力無く、また不規則の歩き方をするのは病者と見て差支がありません。

舌の診方

舌は少し赤色を帶びて居るのがよろしいが、白い苔で被はれて居るのは胃病の徴候、處々に白い小點があつて、それが口角にまで殖えるのは鵞口瘡にして、舌の緣、背、舌の繫帶等に圓く或は不整形の灰色の斑點を生ずるのは亞布答性口内炎、咽頭の奥まで紅くなつて汚い白い斑點が生じて呼吸し難いのは實扶垤里の疑があつて、此等は主に子供に多いものであります、其他舌乾きて裂けるのは窒扶斯等の熱病に見る處であります。

泣聲の診斷法

（泣くは子供の言葉）子供と云ふものは能く泣きますもので、諺にも『泣く子と地頭には勝てぬ』とか、『子供は泣いて勝つ』とか昔から云つて居ります、子供の泣くのには、實際なか〳〵勝てませぬ、泣きを止めると云ふことは六づかしいことであります、併し乍ら此泣くことに深く注意して居つて、これに應ずるやうに工夫をしたならば隨分

泣きを止めることも出來ます、一體子供の泣くと云ふのは子供の言葉で、暑さ、寒さ、痒さ、痛さも凡て泣くと云ふ言葉で發表されるものであります、ですから今までスヤ〳〵と熟睡して居つた子供が急に眼を覺まして身體をもがき、口を動かし、蕾のやうな唇から玉の樣な聲を出して泣き出したからとて、一概に病氣とは云へないのであります。

（泣きの原因）　それでは子供はどう云ふ時に泣くかと申しますと、これは一々數へ上げるわけには參りませんが、先づ第一產れ落ちた時分に勢よく泣いて愉快な產聲をあげます、これはこれまで溫かい母體の中に生活して居つたものが、突然外界の母體よりも溫度の低い處に出て來て、さうして光線の刺戟に當る爲めに泣くのでありますが、此泣きの爲めに空氣が肺の中に入り、肺は急に膨脹して來まして血行が迅速になつて來ます、これは抑も泣き方の始まりであります、それからまた子供に何か不快のことがあつても泣きます、例へば襁褓に大便や小便等が付いて居るのを其儘にして置くと泣きます、或は衣服の着せ方が惡くても、襁褓の卷き方が粗雜であつたり、衣服の紐を强くしめ過ぎたりなどの爲めに、窮屈を感じた時にも泣き、また何處か痛みのある時にも泣き、不快な時にも泣くと云ふ風に、泣くのには種々の原因があります、一概に乳汁が哺みたい、病氣があるとばかり限らぬのですから、其泣く原因を究めないで、泣けば必ず哺ませると云ふのは、徒に小兒の健康を害ふのみであります、勿論泣く兒に乳の諺の通り、如何なる理由で泣くにもせよ、乳房を含ませた當座は必ず一應は泣き止むもので、母に添寢の夢を見たゞけでも、泣き止むと云ふことが古き歌にも歌はれて居ります、併し乍ら、腹が空いて泣くので無いのに、乳汁を哺まして泣き止ませたからとて、それはほんの一時的で、直ぐに再び强く泣き出すものであります、何故かと申しますと、胃の中にある乳の未だ充分に消化されないのに、またも乳を與ふれば、お腹の乳は混合して胃の作用を害し、或は腹痛を來たし、或は下腹を膨滿らせるものであります。

（病氣の時の泣き方）　さて小兒が病氣に罹りますと、普通の泣き方よりは變つた泣き方をしますもので、オギヤ〳〵キーと云ふ樣に聲を引張り、下肢を腹部に向けて引く樣の狀態をなすのは腹痛にして、それがギヤ〳〵呼吸の絕えるやうに泣くのは劇しい腹痛であります、またヒ

ー〜泣くのは多くは發熱の爲めでありますから、能く生理的の泣き聲と、病的の泣き聲との區別を知つて置かねばなりませぬ。

胸部の診方

健康の胸廓にありては、左右其形を同ふし、鎖骨上窩は平らかに、前壁は乳嘴の部に於て少し隆く、胸の眞中なる胸骨は眞直にして其部は稍凹み、胸廓の上三分の二は肋骨を見ること無きものですが、これで一枚々々肋骨を數へることが出來、後の肩胛骨が離れて鳥の翼の如くなつて居るものや、鎖骨上窩の著しく凹んで居るものや、胸骨の漏斗狀に凹んで居るのは肺結核の疑があります、また太鼓の胴の如く膨れて居るのは肺氣腫左右不同形のものは肋膜炎または片側の氣腫に見る所のものであります。

脊柱の診方

脊柱は眞直なるがよろしいのですが、後屈したり、または左右何れかに曲つて居ますのは無論病的にて龜脊と同じく重き病症の一つでありますが、俗に申す處の猫脊は日本人の姿勢正しからざる結果として來り、殊に老人に多く見る處のものですが、これは病的ではありませぬけれども、不歪の體形であります故、小兒の時より姿勢を正しくする習慣をつけねばなりませぬ。

腹部の診方

腹部を診るには仰臥せしめて、兩足を膝にて立てさせますと、腹壁が弛緩して能く內臟の模樣が分ります、また寒い時であつたならば腹部を按ずる手掌は適當に溫めなければ爲りません、健康體にあつては、腹壁は手壓に對して彈力性の抵抗を有するものでありますが、硬く膨れて居るのは胃腸病、または便秘の徵候であります、そして其張り方が甚しく太鼓にでも觸るゝ樣に感ずるのは腹水、鼓腸、腹膜炎等の徵候にて、殊に腹膜炎にありては壓に對して疼痛を感ずるものであります、また腹部を振蕩するにガブ〜振水音を聞くのは胃擴張の徵候にして、右下腹に塊があつて、痛みのあるのは盲腸炎に見る徵候であります。

喀痰の檢査法

喀痰は多くは顯微鏡檢査を要するものでありますが、肉眼的の檢査にては透明或は膠樣の痰は氣管枝加答兒に來り、臭氣ありて靜置すれば三層に分るゝは腐敗性氣管枝加答兒、肺壞疽等に見ますもので、膿のあるのは肺膿瘍、痰に血點或は血線を混ずるのは肺結核の疑があります。

吐血と喀血の鑑別

吐血は嘔吐によつて排出せられ、多くは帶黃色或は黑赤色の凝塊を爲し、また食物の殘片及び嚥下物を混じ、また既往症に胃病の徵候を有しますもので、胃潰瘍、中毒、傳染病等に多く發するものであります。

喀血は咳嗽に由つて喀出せられ、其色は鮮紅にして氣泡を含み、また他覺的に呼吸器の疾患を證明しますもので、多く肺結核、肺「ヂストマ」等に於て現はるゝものであります。

尿の檢査法

（蛋白の檢査法）　蛋白尿は、多く腎臟病に於て現はれ、其含量の多寡は以て本病の輕重を卜するに足るものであります、其檢査法は、尿を試驗管に入れ、これを酒精火燈にて煮、これに硝酸の少量を加ふるに白色或は褐色の凝結が出來て、試驗管の底に沈澱を生ずるは蛋白を含有する徵證であります。

（糖分の檢査法）　糖尿病に罹れば尿中に糖分を混出するに至りますが、此檢査法は尿の少量を試驗管に入れ、硝蒼を少く加へて熱するときに、若し糖分なれば黑色を呈するものであります。

診斷學講義 終

婦人科學講義

第一編　月經の生理と異常

月經の來潮

月經は女性が一定の年齢に達して一人前の發育を遂げたる時期に至れば、貴きも賤しきも、富めるも貧しきも必ず遭遇する子宮からの出血であつて、大抵每四週間に一回づゝ定期性に反復して來潮するものですが、此現象は自然に起る生理的機轉のものであつて、決して病氣ではありませぬ。初めて月經を見る年齢に就ては、氣候、風俗、人情階級、體質等によつて異なるものであつて、洋の東西を問はず寒地の人よりは暖地の人は早く印度邊では八歲にして既に月經あり、十二三歲にして早くも母となる例などは少しも珍しくない位であります。一般に云へば深窓の令孃よりは町家の娘殊に花柳の巷に生活して居るものは早く、また都會の地に居住するものは田舍に生活するものより早いのは例であり、金滿家のお

孃樣は裏長家の阿魔ッ子よりは早く、それから其性質の素朴なるものは才氣喚發と云ふ方よりは遲い、また彼の下等の料理店の奉公人或は半玉藝者、不規律なる工場に勤むる者等は身體は薄弱なるにも係らず、コマチャクれて早く月經が來ますが、つまり此等は早熟に屬するものですから從つて早く老衰するものであります。月經の來潮はかく種々の關係がありますが、醫科大學其他の調査によりますと、我が日本人に於ては月經の初潮は十三四歲乃至十六七歲の間に多く、平均十四年八九ケ月の處と見て宜しいのです。そして婦人が此時期に至りますれば春心發動して漸く羞恥の念を生じ、大に男子を眷戀するの情を起し、また身體的徵候としては乳房肥大し、生殖器充分に發育し、陰毛を生じ、骨盤膨大し、皮下脂肪組織加はりて全身豐滿可憐の情を備へ、所謂鬼も十七番茶も出花と云はるゝのが此時期であつて、此時期にはまた身體ばかりて無く、精神上にも甚しき變化を來すものであります。

一と度月經が來潮すれば其後は病氣か、または妊娠、哺乳時等を除けば每四週間に一回づゝ來潮するもので、一年には約十三回の經血を見るわけであります、ですから月經と云ひまして

も每月一回づゝある譯ではなく、產科婦人科で云ふ一ケ月即ち四週間に一回づゝあるのですから每月多少早くなつて行くのは普通であります、假令へば先々月は十日にあつたものが、先月は八日にあり、また今月は六日にあると云ふ風に整然と少しづゝ早くなつて行くのは決して病氣ではないからして心配には及びませぬ、また其月經の持續日數は一日乃至二日或は三日乃至五日、時としては一週間に及ぶこともあります。そして其分量は每日同じ程づゝあると云ふわけではなく、一日は多くあつて後は僅かとなり、また一日止まつて其後二三日見ると云ふやうなことがあつても矢張生理的で病氣ではありませぬ。多くの人に就て調べて見まするに、初めて月經を見たる年は甚だ不規則で、初經後は一月置き又は二た月置に一二度見て其れ切り一ケ年位休み、其からチャン〳〵と每月なる樣に正潮となる人は甚だ多い樣であります。それですから初潮のありし時より凡そ一ケ年位の不正潮は差支ないとして心配する必要はありませんが初潮より二三年經つても不規則なのは注意を要するものであります。それから經血の分量、これは三十「グラム」乃至百「グラム」位あるのは通常であります、尤もこれは單純の血液ばかり

ては無く、局部充血の爲め子宮内膜腺の分泌機能は亢進して居ますから、其等の分泌液もまた混ずるのは無論のことであります。

以上述べました通り月經の來潮時、持續日數、其分量等に多少の相違はありますが、月經がある爲めに身體に異和のあるものではありません、然るに若しも異和があつたとしたならば、それは既に生理的の範圍を脱して病的の範圍に入つたものであります、異和と申すのは假へば月經時に下腹部或は腰部に痛みがあつたり、或は下肢に牽引れる樣な痛みがあつたり、または頭痛、惡心、皮膚の發疹、皮下の溢血等あることを云ふのでありまして、此等の異和がありましたならば自分は左程と思はぬも、必ず生殖器に病變があるものと覺らねばなりませぬ。次にまた經血は普通の切疵などから出る血液に比すれば、其色は餘程暗赤色になつて居り、また濃厚に見ゆるのは普通でありますが、其洩れ出づる血液中に凝血或は膜樣のものは決して混じて居るものではありません、從つて若しも此等のものがありましたならば病氣なのですから注意を要するものであります。

次に其持續日數は生理的には一週間以上に出づることは迷多にありません、ですから若しも一週間以上も持續するやうでありましたならば、其分量は少くとも、また假令身體に異和を覺えざるも速に醫師に相談しなければなりません、それに從來は極めて稀れであつたと信ぜられて居つた子宮外妊娠は、或は劇しき症狀を呈することがありますが、時としては唯僅かの子宮出血が持續する丈けの症狀を呈するのみに止まることもあります、子宮外妊娠は專門家でなければ手術が出來ないばかりて無く、早期に醫療を受けないと兎もすると一命にかゝるやうな場合がありますから總て經血の持續が延びた場合には注意を要するものであります。

月經時の攝生

月經が來潮します時には總て局部に充血を來たし、殊に出血の當事者である處の子宮は、其粘膜上皮下の血管は充血し、遂には破裂して上皮下に溢血し、其溢血は上皮下を持ち上げ終には外部に流れ出づるものであります、即ち月經時には身體の一部に新しい痕が出來ることになりましたから、月經は生理的の機轉とは申し乍ら相當の注意を拂はなければならぬものであります。

それて其第一の注意としては、經血時には東京の下等社會のするやうな、紙或は綿を詰めることや、または西洋人の如く海綿を局部に挿入する等と云ふやうなことは禁ぜねばなりません これは一つは外に流出せんとする經血を沮止するの害があるのと、二つには此等のものは消毒して居らぬから、附着して居る處の諸種の黴菌は、其發育には最も都合のよい血液に觸れて盛んに發育し、或はまた其血液に沿ふて深部に達し、遂には恐るべき病原となることがありますから注意が肝要てあります、紙の中でも殊に淺草紙は最も危險てありますから決して用ゐてはなりませぬ。

第二の注意としては安靜が必要てあります、前にも述べました通り經血時には内膜上皮に新しき痕が出來るのてありますから、これを元の如く附着するやうに保護する爲めに身體を安靜にしなければなりませぬ、若し此際に勞働したり、或は長途の旅行または劇しく身體を動かすやうなことがありますと、先きにもち上げられた上皮は剝脱する、即ち上皮の一部が缺損すれば從つて癒るのも遲くなると云ふことになりますからして安靜を要するわけてあります。

第三の注意としては入浴を禁ずることてあります、一體生殖器は其外部は常に閉鎖されて居ますから兩脚を合して置けば、入浴しても外部から湯其他のものは浸入せぬ筈てはありますが浴湯は不潔てもあり、殊に兩脚併合の注意は實際に於ては行はれませんから、從つて不潔物の浸入する虞れがあります、殊に世間によく例のある家事を終へてから後に共同浴場に入浴するなどは甚だ危險てあります、また藥湯なども數日取り換へぬのが多いものてすからこれは殊に注意を要します。それから入浴の今一つの害は局部の充血の度を增すからして多くの出血を來たすと云ふことてあります、腰湯も亦以上の理由よりして害のあるのは無論のことてあります

飲食物は平素食し馴れたものは差支へはありませんが、非常に辛味を帶びたもの、假へばわさび、からし等の如きは食べてはいけません、また酒類の如きは絶對に禁ずる必要があります併し獨逸婦人の麥酒、佛國婦人の葡萄酒の如く平素酒類を用ひる習慣のある人には分量を過さなければ害にはなりませぬが、習慣なき人には忌むのてあります。身體の安靜は勿論のことてありますが、精神もまた大いに平靜を保つが良いのてす、極めて劇しき精神の衝動は月經異常

を來たすことがある位ですから、劇しき喜怒哀樂は嚴に避けねばなりません、精神は肉體の上に感作しますが殊に精神と生殖器とは生理、病理的の狀態に種々の影響を及ぼすことが多いもので、妊娠中の婦人は其性質の變化を來たすものであります、妊娠、分娩、產褥中は婦人精神病の大原因となると同樣に、月經もまた極めて僅かではありますが、婦人の精神に影響するものでありますから精神は極めて安靜平和に保つが良いのであります。外陰部は清潔なる微溫湯を以て洗ひ、或は清潔なるガーゼ、脫脂綿の類を以て拭ひ、經血の附着せぬやうにするが宜しい、殊に肥滿せる婦人または夏季にあつては尙ほ更大切の注意であります、夏は左も無くも汗皮脂等が分解して臭氣を發し、時としては病氣の基となることがあります。其他の注意としては月經帶を用ひるか或は簡單なる丁字帶を以て、「ガーゼ」、脫脂綿等を固定し置き度々取代へる方法等も宜しいのであります。

經閉期の攝生

我が日本の婦人の月經閉止期は何歲であるかと申しますに、諸家の調査によりますと四五十歲の間にあつて、平均數は四十五年三ヶ月となつて居ます、そして來潮の時が早くても必ずしも早く閉止すると云ふわけては無く、來潮が早いのに反つて遲く閉止し、來潮遲きものにして早く閉止するものもありますから、持續年數の長短は甚だ異同があつても、長きものは四十年以上に達するも、短きものは二十年以內のものもあります。併し普通に於ては大抵四十七八歲まで月經があるものですから、初經時より以來約三十年の間は生殖生活に屬するものであつて、所謂婦人が婦人としての本分を盡す時期であります。

醫學博士緒方正淸氏は、男女生殖時期の開始と終熄とは略次の如くにして知ることが出來ると云ふて居ます、即ち男子は八、女子は七に二を乘じた年齡に生殖時期が始まり、其數を自乘したる年齡に生殖時期が終るものであるから之を圖解すれば左の通りになります。

男子 (8×2＝16　生殖時期開始
　　(8×8＝64　生殖時期終熄

女子 (7×2＝14　月經開始
　　(7×7＝49　月經閉止

さて月經閉止期に近つきますと月經は漸次其量が減つて來、追々には全く無くなつて了つて毎月あつたものが無くて濟むやうになるのが普通であります、併しこれまで一週間づゝあつたものが急に二日になつたとか或は急に無くなるとか云ふ風に急激に變化の來るのは喜ばしい現象ではありません。總て諸機關の退降すると申しますものは漸々に來るものでありますから、それが急激に變化すると云ふことでありましたならば何か異狀のあるものと思はねばなりません、月經閉止期になつても健康な人であると何の異常も無く、何時かは知らずに閉止すると云ふこともあります。そして閉止後はこれまで瘦せて居つた人が肥つて來て益々健康になるのが常であります。けれども大抵の人は此閉止期に入つてから苦しむか、或る特別な症狀を呈することなどもあります、何故かと申しますに此年頃になる迄は大抵の人は二三回乃至四五回の姙娠分娩等を經、また幾多浮世の荒波とも戰つて來て居ますからして非常に身體が疲れて居る、抵抗力が減じて居る、それで少しのことでも身體に障る、以前ならば何とも無かつたことが障つて病氣となるのであります、頭腦を使へば頭の方が惡くなる、足を使へば足の方に病氣が來

ると云ふ風に諸處に故障が起りますが、其中特に起り易いのは神經症狀であります、神經症狀が起つて氣分が惡くて不快な日を送ることが多い、ついこれまでは知らなかつた頭痛がする、或は肩が凝る、動悸がする、リウマチスに罹り易いとか、神經痛に惱むとか、或は身體が腫れるとか云ふ樣に種々の症狀を發することがあります。

月經閉止期には種々なる子宮の疾患を誘起するものであります、其中殊に恐るべきは癌腫であります、これはどういふ風に起つて來るかと云ふに、第一には子宮の出血を伴ふものであります、子宮癌はひどくなると迚も助かるものではありませんが、早期に診斷して手術を受ければ治癒に至るものでありますから、月經閉止後にまた月經を見たならば速に專門家の診察を受くるが宜しい。月經閉止後に來る月經は決して月經では無くして出血即ち子宮出血であります、假令癌腫で無くとも矢張一つの病氣に相違がありませんから注意を要するものであります、それから經閉期になつても月經の量は減らないで、反つて殖えて來るなども宜しくない徵候であります。次にまた月經が殖えると同時に段々お腹が大きくなつて來るのは、子宮筋腫

の疑ひがあり、また唯急にお腹が大きくなつて來たのは卵巣囊腫の疑ひがあります、此等のものは皆專門家の手術を要するものであつて早ければ早い程療治がし易いものでありますから、經閉期に近づきかしたならば、月經の盛んにある時、つまり壯年の時よりも攝生に注意なし、若し右樣の異常を認めたならば速に醫師の診療を求むると云ふことは何よりの注意であります。

無月經

年頃になつても月經の無いもの丶最も主なる原因は營養不良であります、まあ身體が痩せて發育が不充分である、それが月經の來る時分に重い病氣に罹つて未だ充分に身體が恢復しないと云ふ場合には月經はなか〳〵來ません、それからまた局部の病氣で卵巣が萎縮するとか、或は子宮の發育が不充分とかの爲めに月經の後れるのもあります、殊に身體が外見上强壯であるのにも係らず、月經の無いと云ふ樣なものには此子宮發育不全が多いやうであります、現に二十歳の婦人で身體の發育が良く唯月經のみ無い婦人がありましたが、其人の子宮を見ると僅か十二三歳の少女の子宮大しか無かつたのですが、結婚して二ケ

月經つて立派に月經も來潮し、其後妊娠して健全なる子供を產んだ例があります。

子宮や卵巣の發育不全の爲めに起る月經遲延は營養療法(後に述ぶる)によつて治療することが出來ますが、子宮の缺損によるものはどうしても療治の仕方がありません。

(一時性無月經の原因)　今まであつた月經の無くなるものは一時性無月經と云ふて、これには病氣でないもの即ち生理的のものもあつて、これは妊娠時及び哺乳時に起るものであります(クリーゲル氏に從へば哺乳期に月經閉止を來すもの四十五「プロセント」ありと云ふ)それから病氣の爲に月經の止まるもの、即ち病理的には子宮及び卵巣の病氣殊に慢性子宮實質炎の一症候として顯るゝことがあります、それから貧血、結核、白血病、バセドー氏病等によつて營養の衰へる場合または急性傳染病の經過中または脂肪過多症なども原因となります、それから殊に面白いのは妊娠恐怖症と云ひまして、妊娠したくない、妊娠するのはイヤだと頻に苦慮して居る人に月經が止まつて丁度妊娠したやうになることもあれば、それからまた擬妊娠と云ひまして結婚して長く子供が無いので子供を欲しい〳〵と思つて居ると、月經が止まつて丁度妊

娠した時のやうに漸次お腹が膨れて來るのもありますが、此二つのものは元より本當の妊娠ではありませんから遲くも三四ヶ月の後には月經が再び來潮して腹部も平常の通りになります。

また何か非常に驚愕するとか恐怖するとかしますと矢張一時性の月經閉止を來たすものであります、此三つのものは何れも精神作用が影響したものであります、つまり非常に妊娠を恐れる心と、非常に希望する心と、また驚愕による等、強烈なる精神作用し、月經が止まつたのであります、ですから此等の例によつて見ても月經と精神作用とは非常に密接な關係があり、從つて月經時には精神を安靜にせねばならぬと云ふ理由も分るのであります。近頃はまた鼻と子宮とは密接の關係があつて、肥厚性鼻炎に罹るとよく無月經になるのは、反射的ノイローゼであると說いて居る人もあります。

（其症狀）　一時性の無月經は急に起ることは稀れであつて通常は經血が次第に少量となり月經と月經との間が長くなり、月經の時日が短かくなつて遂に閉止しますが、療養其宜しきを得れば追々に恢復して遂にまた整然月經を見るやうに至るものであります。それから無月經の

經過中にあつても例月々經を見る時に至れば種々な症狀を起して來ます、即ち眩暈がする頭痛がする、腰が痛む、便秘があつたり、膓胃に故障が起つたりします。或はまた毎月一回時を定めて熱の出ることもあれば、頸部の前方に位して居る甲狀腺が肥大するかまたは代償性月經と云ふて此時に齒齦に出血するとか、鼻血が出るとか、吐血するとか、膓出血を來すとかして何時も月經の終る頃になれば平素の通りになる人もあります。

（治療法）　治療法は其原因に注意して原因を去るのが何よりの良方法であります。本症の原因中營養の衰へたるものは一番に多いものでありますから、斯樣の人は食物に注意して滋養分を多く取るやうにします。即ち魚鳥獸肉鷄卵等を成るべく多く用ひ、また新鮮なる蔬菜殊に鶯菜、ホーレン草、チサ、または百合、山の芋等を多く食し、良好の葡萄酒、若しくは麥酒の少量を飲用するも宜しく、それに力めて運動を行ひ、日光の透射よき所にて散步、テニス等を行ひ、若し出來得るならば夏は海水浴に、秋冬の候は溫泉場に行くことが出來れば一段と妙であります。

一時性無月經の何れの症を問はずに血液を子宮部に集中せしむるのは緊要なる療法でありますが、此目的として食鹽又は芥子を入れたる溫湯にて腰湯を使はしむるか、または攝氏五十度の溫湯を腟部に灌注したり、電氣を通じたり、或は水蛭を貼したり、子宮按摩を行ひ、子宮消息子を插入したりなどしますが、此内最も簡單にて割合に奏効するものは腰湯であります、全身浴も溫まること丶は溫まりますが、腰湯は單簡である許りでなく、生殖器を溫めるには此方が効があります。腰湯の仕方にも種々あつて、鹽湯で腰湯をする人もあれば、芥子を入れてやる人もあり、或はまた大根の葉の干したのを入れてする人もあり、艾草を煎じて腰湯する人もありますが、其中て最も行ひ易いのは鹽湯であります。鹽湯の仕方は先づ普通の盥一杯に湯を入れ、それに鹽を三合位入れて腰湯をします、鹽は初めに入れてそれからお湯を入れる、湯の溫度は適宜で宜しい、そして此腰湯を毎晩やるのであります。尤も此腰湯は獨り無月經のみに限らず婦人方は常に行ふ方が宜しいのであります、俗にも女は冷え症であると云ふ位であるから寒中などは湯に入らぬときには腰湯をすると宜しい。これは俗に云ふ婦人の養生として最上の

ものであります。

營養不良に兼ねて貧血を呈する人には鐵劑を與へます。即ち

▲局法乳酸鐵錠　六個

右一日分毎食後二個づゝ用ゆ

▲林檎鐵丁幾　四、〇　赤酒　一〇、〇　單舍利別　五、〇　水　一〇〇、〇

右一日量一日三回毎食後分服

の何れかを與へますが、總て鐵劑を服用する時には茶其他タンニン酸を含んで居るものは用ゐてはなりませぬ。若し鐵劑と共に茶を用ゐるとそれが鐵と化合して藥が利かなくなります。また鐵劑服用中には糞便が黑色を呈しますが、これは普通のことであつて別に怪しむには當りません。

鐵劑を與へる時には同時に稀鹽酸、ペプシンの合劑を與へると宜しい。其處方は

▲稀鹽酸　〇、六　含糖ペプシン　三、〇　單舍利別　一〇、〇　水　九〇、〇

右一日量一日三回毎食後一時間服用

それから營養不良であつて、生殖器の血行不足するものには左の通經劑を與へます。

▲局方蘆薈蒼鐵丸　三個

右一日三回毎食後一個づゝ服用

月經過多

（定義）　月經過多と云ひますのは、つまり經血が多量にあつて、然も其時日も長く、爲めに其人の健康を害するものを云ふのですが、これは時期並に其原因に關係の無い子宮出血とは全く別物であります。尤も經血の量は人によつて甚しく相違がありますから、經血の量幾何以上は月經過多であると云ふ風に、量を以て定むるわけには參りませんが、先づ初めより急に澤山の出血があつて、月經中に屢其強さが變り、正むかと思へばまた急に劇しくなると云ふ風であつて、それが爲めに身體にさまゞの障りが起り、高度の貧血を呈するものをば月經過多と唱へて居るのであります。

（月經過多の原因）　は慢性の便秘、營養の不良なるもの、脂肪過多なるもの、劇しい精神

感動、血友病、ウエルホー氏の紫斑病、肺結核、心臟、肝臟或は胃の病氣に伴ふ虚性充血等でありますが、其外に子宮の轉位、慢性の炎症、子宮附屬器の疾病、短日月の間に於ける頻回の分娩また女は流産、房事過度、不自然なる遂情、長く哺乳して居る婦人等にも起ることがあります。

（月經過多の症候）　月經過多は通常痛みが無くして起るものでありますが、神經は頗る過敏となつて明るい處を嫌ひ、少しの物音にも驚き、頭痛がしたり、皮膚知覺や嗅覺に異常を來すやうになります。そして本症が長く續けばヒステリーになつたり、リウマチス樣の疼痛を發するやうになります。

ノーブル氏は月經過多の原因と療法とを年齢によつて左の如く區別して居ります。

（一）少女に來る月經過度は神經系統の障害に基くものであつて、全身療法によつて治療するものであります。

（二）中年の婦人に來るものは分娩及び産褥に基くものであつて、局處療法を要するものであ

ります。

(三)四十年及び其以上の婦人に來るものは子宮の腫瘍殊に其惡性なるものに來るものであります。

(治療法)　月經過多を來せる時には仰臥せしめて腹部に氷嚢を貼します、けれども甚しく貧血を呈せる患婦にあつては寒冷に堪え難いものですから、斯樣の塲合には溫奄法を行ふかまたは腸より溫湯の灌注を行ひます、それから明礬水、單寧酸水、晧礬水等の收斂劑を膣内に灌注するかまたは沃度ホルムガーゼの膣タムポンを插置する等は局處療法として行ふべき重要なる方法であります。

内服藥としては先づ第一に收斂藥を與へます、其處方は

▲ハマメリス流動エキス　一五—二〇滴　單舍利別　三、〇　水　三〇、〇

右一回量、一日三回服用。

▲麥角丁幾　二、〇　ハルレル酸(硫酸一分酒精三分)　四、〇　桂皮丁幾　一〇、〇

右混和三十滴を水に和し毎二時間服用

月經過多は屢々貧血なる婦人に來るものでありますから、斯樣の婦人にあつては左の鐵劑を與へます。

▲乳酸鐵　二、〇　サビナ末　二、〇　酒製製ホミカエキス　〇、五

右三十丸となし一日三回一丸宛服用

月經困難

大抵の婦人は月經の前或は月經のある時に子宮部に痛みがあるとか、下腹部に攣痛があるとか、または腰が痛むとか致しますが、此位の苦痛は普通のことであつて別に困難と云ふ程のこともありませんが、若しそれが重くなつて全身症狀が起り、日常の働きが出來なくなつて、食も進まなければ、床に就かなければならぬと云ふ樣なものになりますとそれは最早月經困難と云ふ一つの病氣になつたのであります。此月經困難は生殖器の病氣殊に閉塞症、子宮の炎症、轉位及び變形等の爲めに起るものであつて、これに官能的月經困難、器械的月經困難に分けますが、何れも月經のある數日前からして何となく精神が鬱して

食も進まなければ、嚶氣ばかり出て腹が張り、月經の下りる時には腰や下腹に痛みが起り、尿意頻數となるが、月經の下りる時の外は劇しい痛みがありませんで、唯精神が沈鬱になつて居ます。

（治療法）　月經困難を根治するには手術によつて生殖器の異常を癒さなければなりませんが、一時的の豫防法としては月經の初めには成るべく疼痛を誘發するやうな事項を避けねばなりませぬ。即ち床中に安臥して身體並に精神の安靜を守り、下腹部及び手足は成るべく暖かになし、食物は總て消化し易く滋養分の多きものを滿腹せざる程度に於て用ひ、便通は快くめるやうに注意し、若し便秘あるときには下劑（ヒマス油一五、〇頓服）を用ひて通利を計ります

それから愈々疼痛を發せる場合には下腹の痛む場所に芥子泥を八分乃至十五分間貼ると宜しい

芥子泥の拵へ方は芥子粉を水にてドロ〳〵に攪き混ぜ、厚味の日本紙を二つに折り、其半分に芥子泥を五厘位の厚さに平坦に敷き延べ其上に半面の方を折り重ねて腹部に貼するのであります。

月經困難に用ゐる藥物は多くは麻醉藥でありますが、近時「アピオル」（一回の量〇、〇〇二乃至〇、〇〇二五）を賞用する人があります、通常多く用ひらるゝのは

▲流動ヒドラチスエキス　七、〇　苦味丁幾　四、〇　水　二〇〇、〇

右二日分一日三回分服

でありますが、官能的月經困難には醋酸安母尼亞水（五、〇乃至一〇、〇一日三回）を賞用する人があります、また神經性のものにあつては發作の際鼻腔下甲介骨の前端並に之れに對する處に二%の古加因溶液を塗附するか、または此部分を電氣燒灼器にて破潰して効を收めたと云ふ人もあります、それから膣部粘膜の亂刺或は水蛭四五條を貼するか、または子宮頸管の切開、月經來潮前に子宮粘膜の爬除、亂刺或は腐蝕等によつて奏効したこともあります、それから月經困難が姙娠、分娩によつて全治した例もありますが、或は其反對に分娩後に從來無かつた月經困難を覺えて來た人もあります。

第二編　外陰部及び膣の疾病

陰門炎

（原因）陰門炎には急性と慢性との二種ありますが、この原因となるものは強姦、不潔の帶下、姙娠時の充血、手淫或は房事過度等が重なるものであります、それから肛門より蟯蟲の轉入する爲めに起ることもあれば淋病もまた原因と爲り、脂肪過多の婦人には夏期には屢々これを起すことがあります。

（陰門炎の症狀）陰門炎に罹ると先づ其部の粘膜が赤くなつて腫れ上り、惡臭ある膿を洩しますが、急性症にあつては非常に痛みが強く、其痛みは近傍の皮膚並に尿道に達して放尿時には劇しき痛みを發し、また分泌物の爲めに近傍に炎症を起して屢々堪え難き瘙痒を覺ゆるに至ることがあります、此症の一種に蜜尿病性陰門炎と云ふて蜜尿病の爲めに起る症狀があつて炎性が會陰または上腿内面にまでも達することがあり、そして蜜尿病が快くなれば症狀減じ、重くなれば本症も重くなることがあります、それから多く四十歳以上の婦人に來る處の陰門の

進行性皮膚痩削症と云ふて、外陰部の皮膚並に粘膜が萎縮乾燥して厚き外皮を被ひ、腟入口を狹窄して硬固くなり、所謂陰門硬變症となるものもあります。

慢性症になれば疼痛は遙に輕くなつて來ます、けれども其疼痛は瘙痒性でゆつて、非常に病人を苦しめます、そして夕刻に至るか、または床に入つて温まるか、精神が興奮するとか、或は酒を飲むとかすると劇しくなるものであつて、此際に極めて身体を安靜になし、刺戟性の飲食物を避くるやうにすれば格別、さも無いと其搔痒は益々堪え難くなり、時に神經痛樣の痛みに變じ、爲めに營養障害を來たし、神經性に陷る許りで無く、甚しきは「ヒステリー」症になり、遂には自殺を企つるに至るものさへある故、慢性症は此劇しき搔痒の一症を以て、名づけて陰門搔痒症と稱する人もあります、それからまた此搔痒症の一種に月經の前後に丈け起るのもあり、手淫の爲に起るのもあり、或は姙娠の爲めに起るもの、蟯蟲の侵入の爲めに起るものもあつて、輕き搔痒症ある婦人は其れが爲めに俗に云ふ淫亂症に陷るものであります。

（治療法）陰門炎の治療法は其原因によつて異るは勿論であり、根治法としては原因症を治

するにありますが、局處療法としては第一には局部を清潔にすることであつて、不潔の爲めに起るものや、輕いものにあつては、身体を安靜にして局部を清潔にする、卽ち屢々入浴するか、坐浴を使ふか、或はまた鹽類泉に湯治する丈けでも癒ります、それから少しく炎症を發せるものにあつては百倍の石炭酸水、千倍乃至五百倍の昇汞水、三十倍の硼酸水、或は二百倍の「リゾール」水、百倍乃至五十倍の「フォルマリン」水等を微溫にして、一日二三回外陰部に灌注すると大に爽快を覺え追々治癒に赴くものであります、次に損傷があるとか或は手を觸れても痛むと云ふ風に知覺過敏を呈するものは局部に氷嚢を貼し、「テール」の「アルコホル」或は「グリスリン」溶液（三と三十との割合）を塗るか、或は「ワセリン」を塗くるか、五十倍の硝酸銀水を塗付するも宜しく、または

▲苦扁桃油　一〇、〇　グリスリン　二〇、〇
　右混和塗附（ラッサアル氏バスタ）

が宜しい、疼痛あるものは五乃至二〇%「イヒチオル」軟膏か、十倍「イヒチオル」水を塗附するか宜しく、搔痒症には痛みのある時は坐浴を行はしめ、五十倍の石炭酸水を塗くるが宜しい、ツワイフェル氏は搔痒甚しく爲めに睡眠を妨ぐるものに對して、左の處方を長く服用せしめて効を奏したと報告して居ます。

▲臭素安母尼亞　五、〇　臭素那篤倔謨　五、〇　臭素加倔謨　五、〇　抱水クロラル　五、〇、鹽酸モルヒネ　〇、〇五　アトロピネ　〇、〇〇五　水　二〇〇、〇
　右朝夕一乃至二食匙宛服用

淋病に原因するものは無論淋病を癒さなければ本症は癒らない、それから蜜尿病、脂肪過多に原因するもの等も、それ〴〵原因療法は第一の注意であります。

膣炎

（原因）膣の病氣中最も多いものは膣加答兒卽ち膣炎であります、これには急性と慢性とありますが、先づ其原因となるものを擧げて見ますと、淋疾は最も多く、不潔なる挿入物、子宮內膜炎の爲めに起る白帶下、惡性子宮病の分解物、或は藥物の誤用、蟯蟲の肛門內より侵入する等は陰門炎と同時に膣炎を發することもあり、稀れには姙娠時

の充血の爲めに發炎することもあります。

（症候）急性の時には局部が腫脹して灼くやうな熱があり、同時に壓されるやうな感じや痛みを發して、全身には惡寒があつて熱が出る、尿が度々出たくなり、甚しき時には房事が妨げらるゝ許りで無く、大便を排泄することさへ出來なくなります、膣よりは分泌物が盛んに出て或時は乳白色或は粘液樣になり、または膿樣となりて黄色を呈するか、時としては血液を混じて暗色となることもあります、斯くして二週乃至三週を經れば慢性に移り、分泌物の多量なる外、痛みも無く腫れも引いて格別のことも無くて濟むも、時としては其分泌物が分解して惡臭を發することもあれば、または其刺戟の爲めに疼痛を發することもあります。併し其多くは分泌物過多の爲めに漸次に貧血に陥りて全身蒼白色となり、食慾は不振となりて大便は秘結し、房事を嫌惡する爲めに不姙症に陥ることが多いものであります。

（療法）膣炎の中淋病の爲めに起るものは縱令治療しても容易に癒らない、よし癒つても又た再發することが多いものであります、其治療法は淋病を治療すべきは勿論でありますが、尙

ほ急性症には全身の安靜を守る爲めに安臥せしめ、淡泊にして滋養ある食物を攝らしめ、便通を通ずると共に、局部の清潔を主とするものであります、清潔法としては陰門炎の處に掲げたる藥液は賞用するに足るが、尙ほ一日二三回坐浴を取らしめ、其後直ちに一百倍の單寧酸水を注入するも宜しい、それから過酸化水素溶液（坊間發賣の一%液溶に五倍の水を加へる）千倍「チモール」水「クロール」水及び水等分のものは臭氣あるものゝ洗滌用として最も効がある、そして洗滌の後は十倍「イヒチオール、ワセリン」膣球または沃度ホルム「タンポン」を膣内に挿入し、五六時間の後交換するか、または左の藥劑の何れを用ゐても宜しいのです。

▲ラタニアエキス　四、〇　ワセリン　五〇、〇
右綿球に塗附し膣内挿入

▲アリストール　〇、五——一、〇　柯々阿油　三、〇
右膣球となし用ふ

慢性症には全身强壯療法を行ひ、または轉地するか、殊に湯治するなどは宜しい、專門家

には近來乾燥療法と云ふて「グリセリン」、「アラビヤゴム」及び諸種の藥劑を加へて膣球でなし挿置するの方法を賞用する人もあり、また「ミチン」療法と云ふて麥酒醱酵素を其儘或は熱氣消毒を施して應用せる人もあるが、何れも奏効確實なりと稱して居ます。

膣痙

これは膣の入口の知覺が非常に過敏になつて、刺戟を感することが甚だ強く、劇しいのになりますと、獨り膣の筋ばかりで無く、骨盤底の筋、肛門の筋、大腿及び背部の筋にまで痙攣性の收縮を起すものでありますが、此痙攣は甚しい痛みを感じますもので、交接は勿論、指を觸るゝことも出來なくなり、甚しきは陰門を吹き、或は軟かな羽毛にて觸れるとか、または交接を想像した丈けでも痙攣が起るものであります、此症狀は多くは處女に多く、殊に初婚の夜に起ることが多いものですが、稀れには結婚後日を經てから起るものもあります、此症の原因となるものは處女膜が非常に硬いとか、膣口が狹いとか、或は結婚の當夜瘡痍を受けて痛みを起したとか云ふことであります、それで此症に罹ると其婦人は男子に近づくを厭ひ、後には外陰部に炎症が起り、または「ヒステリー」症に陷るものもあります。

（豫防法と療法）膣痙の豫防法としては處女膜の異常、膣口狹小等の異常があつたならば前以て之れを醫するが宜しい、また其療法としては成るべく局部を刺戟せぬこと、殊に交接を避くることは必要の注意でありますから、此際には成るべく夫婦別居を可とします、そして溫湯の坐浴を行ひ二十倍の古加因溶液を塗附し、痛みや、輕くなつたならば、毎日子宮鏡を用ゐて漸次に擴大せしめて、遂に治癒に達せしむることが出來るものであります。

第三編　子宮の疾患

子宮の畸形

子宮發育の異常即ち畸形のことを述べますには順序として子宮發生の有樣即ち胎生學上のことを述べねばなりませぬが、これは純粹なる學問的のことであるから茲には略します。

（成熟せる子宮の形狀）成長した人の子宮の形狀は普通の茄子の臀の方を壓し萎げたやうな

もので、上の方は下の方より幅が廣く、全体が手拳よりは小さい、曲尺で二寸六七分の長さにて、上の方の最も幅の廣い所が一寸六七分位あります、そして子宮は腔洞に成つて居る、即ち一つの肉の嚢と見做して良いもので、其口は下を向いて腟の中へ開いて居る、此腔洞は即ち子宮腔と唱へ、其口は子宮外口と稱せられるものであります、また其肉の厚みは凡そ三分許りで、子宮腔の長さは子宮全体の長さから三分許り子宮の底になつて居る肉の厚さを減じただけ即ち二寸三分許りあります、斯くの如き大さと形狀とが種々なる子宮の病の爲め、または子宮の周圍にある臓腑の病の爲めに種々に形狀が變り、又は大きくなつたり、小さくなつたりするものでありますが、また生れ附きで子宮の形が變つて居る人もあれば、或はまた子宮が前の如き大さに育たない人等もあつて此等は皆異常と稱するものであります。

（種々なる畸形）　生れ附き形狀の變つて居る子宮には複頸双角子宮と云ふて、子宮が全く別々に發育したものもあり、子宮腔が二つあつて腟迄も左右半分づゝになつて居る重複双角子宮と云ふものもあります、また單頸双角と云ふて上の方は二つに分れて居るが、下の方と腟丈け

が一つよりしか無いものなどもあるかと思へば、また其外形は少しも變らない、即ち前に述べた通り、臀の方だけ麥げた茄子の樣な正しい格好をして居るが、子宮腔の眞中に縱の隔てが出來て居て、其爲めに一つあるべき子宮腔が左右に二つ並んで居るのもあります、また中には子宮が左か右かの一方にのみ育つて、片方が育たぬ爲めに、一方にのみ細長い子宮もあります。

（子宮の閉塞）　其他にまた子宮の塞つて居るものや、又は子宮腔の無いものなどもあります、それから子宮腔には左右の上の隅の方に左右の輸卵管の口が夫々開いて居るのが普通であるけれども其れの塞つて居るものもありますが、これは醫學上では子宮閉塞と名づくるもので、此子宮閉塞は生れ附きさういふ風になつて居ることもあるが、それよりも、窒扶斯、實扶坪里、梅毒、新生物、猩紅熱、虎列刺または加答兒等の病氣の後に起ることが多いものであります。

前にも述ました通り子宮の形の變つて居るものは少し位のことなら格別何の症狀も起しませんが、時としては其形狀の惡い爲めに炎症を持ち易く、またそれの爲めに妊娠の出來ないこともあり、妊娠しても胎兒の發育を妨げることもあります、そして此等の多くは形狀を直すと云

ふことは六つかしいが、若し炎症があつたり、何か障害のある場合には手術によつて治療することが出來るものであります。

（子宮閉塞の療法）　子宮が塞つて居ても月經の來潮する前には格別の障害はありませんが、月經が開始しますと其血液が外に流れ出づることが出來ませんので非常なる苦痛を覺ゆるものであります、即ち下腹部が緊滿つて疼痛があり、爲めに全身に種々の障害を與ふるものですから、年頃になつても月經が無く、然も毎月下腹部に疼痛を覺ゆるやうな人があつたならば、先づ此症に疑を置いて專門家の診察を求むるがよろしい、子宮閉塞にあつては元より妊娠することはありませんが、手術によつてこれを開除すれば妊娠もすればまた前に述ぶる樣な苦痛も無くなるものであります、尤も其療法は專門家によつて手術を受くるのです。

（子宮萎縮）　それから一般に陰部の發育は宜しいが、獨り子宮のみが育たないものがあります、これは子宮萎縮と云ふものですが、これには小兒子宮と云ふて子宮全體の發育の惡いものと、それから生殖器成熟の時期に於て病氣に罹つたとか、或は他の原因の爲めに子宮の萎縮

したもの等ありますが、其形狀こそ小さいけれども、兎に角子宮の完全したる形狀を具へて居るものであります、小兒子宮を有する婦人は生殖器成熟期に至るまでは少しも身體に障りは無いものですが、一旦結婚しても月經も無ければまた久しく妊娠らしないので、始めて何處かに惡い處があるではないかと考へて、醫者に診て貰ふのが多い樣であります、尤も盛春期になつて普通の人ならば既に月經があると云ふ頃になりますと、丁度普通人の月經が來潮すると云ふ場合に、中間痛と云ふて、下腹部の兩側に疝痛を起し、生殖器の分泌も增加すれば、膀胱や直腸が壓されるやうな氣がして苦しむのもあり、甚しきは神經症狀や頭痛を來したり、または劒血や痔血などが出て丁度代償性月經のやうな風になるのもあります、そして此等の婦人は見た處は普通の婦人と異なる處はありませぬが、一般に脂肪過多で、年齢の割合には若いのが常であります。

（子宮萎縮の療法）　小兒子宮は如何なる方法によつても之を增大發育せしむることは出來ませぬが、病氣の爲めに萎縮したものは、主として惡性貧血の爲めに起るものが多いのである

から、充分滋養物を攝らしむると共に鐵劑（月經過度の部に處方あり）を服用せしめます、また餘りに脂肪肥滿せる爲めに起つたのは、海水浴または種々なる運動法を盛んに行ひ、また天然「カルルス」泉鹽の內服かまたは左の下劑を連服せしめます。

▲稀鹽酸　一、〇　硫酸麻倔涅失亞　一五、〇　水　一〇〇、〇

右一日量、一日三回分服

それから局處療法も必要であります、尤も處女にあつて他に全身症狀の無いものは局處療法を施すの必要はありませぬが、既に結婚せる婦人にあつては、全身症の有無を問はず成るべく早く醫治を受けた方が良いのです、局處療法は主として子宮の血行を盛んにして其筋肉を發育せしむる方法を取るので、これには種々の方法がありますが、家庭療法としては子宮內溫湯灌注法が簡單にして最も効力があります、これは「イルリガートル」に、攝氏四十五度位の湯を入れ（湯一合に付き食鹽を半匁入れる）一回の使用量は約五合位として、一日二三回膣內深く注ぎ込むのですが、これも矢張子宮內に於ける血行を良くして子宮の發育をよくするものであつて、其他子宮や其周圍にある炎症を去るの効能もあり、また白帶下のある人にも頗る効あるものであります。

子宮位置不正

子宮の位置には隨分不正のものがありますが、最も多いものは左の數種に過ぎません。

（種類）　子宮の位置は大體は正しい、即ち骨盤腔の略ぼ中央にありますが、併し子宮の上の方の部分が、下の方の部分即ち子宮口のある處よりも前の方に傾き過ぎて居る場合、これを子宮前轉症と云ひます、尤も此場合に子宮自身は略眞直な形狀を保つて居る、即ち捧を傾けた樣になつて居りますが、若しそれが子宮其ものが前の方へ折れ曲つて居るのであつたならば、これは子宮前屈症と名づくるものであります、尤も正しい子宮は眞直に伸びて居るものでは無くして、少し前の方へ屈んでそして傾いて居るものであります、即ち正しい子宮、子宮の生理的位置は前屈及び前轉の有樣であります、併しそれが普通よりも甚しく、前へ傾き、或は前へ屈んで殆んど折れる樣になつて居るのは、既に生理的の範圍を脫し、病的になつたのであり

ます、またこれと反對に子宮後轉症及び後屈症と云ふものがあります、若しこれが甚しく後方へ折れ屈んで居ます時には、子宮口の方が上になつて子宮の本來の上の方の部分が子宮口よりも下になつて居るのがありますが、此等は共に先天性並に後天性に起つたものと、妊娠中に起つたものと、產褥中に起つたものとあります。

（子宮前屈症）　前屈症の先天性に起るものは稀れでありますが、後天性に起るものは、子宮の後の骨盤結締織の炎症の後に起るもの最とも多し、其他卵巢の腫瘍、子宮後壁の腫瘍、子宮の慢性炎症、或は淋疾なども原因となることがあります。

其症狀は月經の前に直腸や膀胱に壓重の感並に裏急後重の感が起り、月經が濟めば其感じが無くなります、其後月經の度毎に右樣の症狀が起つて、遂には痛痛、「ヒステリー」、不妊等を來すに至るものであります、それからま[illegible]屢々子宮粘膜の加答兒を併發して、劇しい薦骨部の痛み、下腹部の知覺過敏、子宮の痛み、大小便の通利困難刺戟性分泌物の增加、胃病の症狀、神經病の症狀なども起るものであります。

（子宮前屈症の療法）　處女にして他に合併症の無いものでしたならば、唯滋養に富める消化し易い飲食物を與へ、體育法に注意すれば宜しいのですけれども、合併症のあるものはどうしても專門家の治療を要するものであります、それから姙娠中の前屈は經產婦に起るものでありますが、これは腹帶を用ゐて豫防することも出來れば、また治療することも出來るものであります、次にまた分娩後に起りますものは、通常急に起るものであつて、產後三日或は四日目位に突然小水の通じが惡くなり、劇しく痛みが起つて、患者は出血の爲めに非常に弱るものでありますから、速に專門家を招かねばなりません、專門家はこれに對して攝氏五十度の溫湯灌注或は百度の熱蒸氣を（半分乃至一分間）子宮腔に吹注せしむる等して之を治するものであります。

（子宮後屈症）　子宮の後屈症は習慣性の便秘が原因となることが最も多いものですが、婦人には便秘する人が多いものですから注意を要します、其他には尿閉、骨盤結締織の萎縮、子宮實質炎、貧血等も原因となることがあります、後屈の爲めに起る症狀は月經痛、また骨盤の深部

に異常の壓迫を受くる爲めに薦骨部に持續したる痛み、頑固の便秘、甚しき尿利の困難、稀れには乳房の腫張、胃の障碍、嘔氣、眩暈、頭痛、白帶下等があつて、患者は追々に衰弱に陷るものであります、若しまた後屈症の子宮に姙娠すれば、骨盤の中の後の方の腰骨に閊へて、姙娠の月が進むに從つて子宮の大きくなるのを妨げて惡い容態を起し、または流産を起すことになります、それからまた時としては姙娠せる子宮に後屈が起ることもあります、これは一時尿通または便通に障害が起りますけれども、姙娠の月の進むに連れて自然に癒つて了ふやうな簡單なものもありますが、中にはまた急に後屈が起つて劇しい障害を起すこともあれば、また分娩後に後屈症が起ることもあります。

（子宮後屈症の療法）　後屈症があつても患者が、別に苦痛を感じなければ特に療治する必要もありませんが、苦痛を感ずる程度のものであつたならば整復術を施さねばなりませぬ、即ち整復術によつて子宮を元の正しい位置に直すのでありますが、唯整復したばかりでは再び後屈するの虞れがありますから、これを其位置に固定する爲めに、環狀「ペッサリウム」と云ふ

器械を入れて置くのですが、此器械を用ひましても、月經時には除くことも入らず、また交接に差支なければ姙娠もしますが、唯清潔法として一日一二回百倍の石炭酸水、百倍「リーゾル」水等にて腟を洗ひ、充分整復するまで三ヶ月なり五ヶ月なり入れて置くものでありますが、若しどうしても整復せぬ樣なものでしたならば、外科手術によつて整復しなければなりませぬ。

子宮内膜炎

（原因）　子宮内膜炎は子宮病中最も多いものでありますが、此原因となるものは種々ありますけれども、大體二種類に分つことが出來ます、第一は黴菌の爲めに起るものであつて中にも淋毒の爲めに起るのは最も多いものであります、第二は黴菌に關係無くして起るもの、即ち月經前後の寒冒、それから白帶下でもあると手療治に藥などを腟内に入れる爲めに起ることもあります、或はまた下手な醫者が消息子などを用ひて、子宮を探つた爲めに起ることもあり、其他産後に乳汁を哺ませぬ時、貧血、流産、手淫、蟯蟲の侵入、産褥時の不攝生、房事過度等も原因になります、幼女に起る内膜炎は麻疹、猩紅熱、痘瘡、濕疹等が原因となるものであります、大人に起るものゝ原因中最も多いものは月經時の不攝生で

ありますから、月經中の攝生は最も大事にしなければなりません、それから稀れには虎列刺、窒扶斯、肺炎、再歸熱、赤痢、流行性感冒などの後で急性の内膜炎が起ることもあります。

（急性内膜炎の症狀）　内膜炎の症狀は、頸管加答兒と體加答兒と二つに分けて說明しなければならぬのですが、それでは餘りに專門的に涉りますし、また實際に於ては此二つは併合して來るものでありますから唯急性と慢性とかう二つに分けて講述します、一體黴菌性の内膜炎には痛みが急に始まりますもので、其症狀も急に劇しい時があります、黴菌性で無い方は多くは慢性であつて、何時始まるとなしに次第に惡くなります、内膜炎の急性期には陰部に劇しい痛みがあり、丁度胎兒が產れる時のやうな痛みが起つて來ます、そして下腹に壓されるやうな重いやうな、何か一杯つまつて居るやうな感じがあつて、小水は度々出たくなり、排便には困難を感じ、また惡寒もすれば熱も出て丁度流行性感冒にでもかゝつた樣な風になり、子宮の粘膜は赤くなつて腫れ上り、粘稠な帶下を澤山に洩します、そして其帶下には血液が混ずることもあれば、或は膿が混ずることもあつて、紅色、帶黃赤色或は黃色を呈しまするこが

あります、それから腐敗性の急性内膜炎が起りますと熱が高くなり、漿液性或は血性或は膿性の帶下を澤山に洩らして、甚しく惡臭を發するものであります。

（慢性内膜炎の症狀）　慢性症には輕重種々ありますが、子宮頸部の粘膜が增殖して子宮口から膨れ出て居ることがありまして、僅かに身體を動かすとか、または便通が困難であるとか、または交接をしますときに痛みを發して、出血するものであります、それから帶下の分量も多く、また時々出血があります、出血は多くは月經の現はれる時期に起りますが、時としては月經と月經との間に出血することもありまして、兎に角疼痛と、出血と多量の帶下との爲めに、甚しき衰弱、貧血を呈するものであります、また内膜炎が起つてから古くなつたのは左程の劇しい痛みはありませぬが、唯月經の前後に少し痛みがあり、または月經に障害を起したり、白帶下があつたりして、何と無く氣分が勝れない、またこれが爲めに不妊症を起すものであります。

（豫防法）　さて此イヤな子宮内膜炎はどうしたならば豫防されるかと申しますに、矢張其原

因となるべきものに遠ざかるより外に仕方がありません、殊に月經時に冷えられたり、濕氣を受けたりするのは宜しくありませぬから、前に月經時の攝生の處で述べました通り、充分攝生を守つて、殊に風邪を惹かぬやうに心がけ、消毒せぬものなど膣内に挿入せぬやうになすべきは申すまでも無いこと、其他には分娩時または產褥時にも充分攝生しなければなりません。

それから普通のお產よりも、流產、早產等ありました時には、分けて注意しなければならぬものであります、然るに世間の人の多くは、普通の產褥時には割合に注意をしますが、流產と云ふと左程に注意を拂はぬやうに見えます、これは流產の方は胎兒が胎内に入つて居る時日が、普通の分娩よりも短いから、母の身體はそれほど疲れては居るまい、だからして其れ程深く攝生に注意せずとも宜しいと云ふ考へからのことでありませうが、これは非常な間違であります、譬へて見ますと、普通の滿月に達した分娩は、果實が熟して自然に樹から落ちるやうなものでありますが、流產は無理無體に親木から振り落されるやうなものでありますからして、自然と親木の方に傷が附きます、從つて其瘡面は普通よりは餘程癒り難いものであるから、注意しま

せぬと、其處へ外部から色々な黴菌が入り込んで時を得顏に繁殖するものであります、ですから產褥時、殊に流產後は特に注意を拂ひ、少しでも故障がありましたならば、速かに專門家の診察を受けねばなりませぬ。

次にまた平素の注意としましては、月經の終つた後とか、其他不潔なものに接した場合には「イルリガートル」を用ひて、一百倍の溫食鹽水、五十倍の溫硼酸液等で膣を洗ひます、それから便秘の時にはカスカラ錠を服用して便通を調へるやうにしますなどは、豫防法の主なるものであります。

（養生法）急性の內膜に罹つたならば、身心の安靜は最も大切の注意でありますから、成るべく仰臥の位置に休んで居るのが宜しい、食べ物は成るべく淡泊なるものを用ひ、發熱甚しき時には牛乳、米湯、スープ、鷄卵等の流動物を用ひ、熱が下りましたならば、消化し易き滋養分の多いものを食べるやうに致し、また便通があるやうに注意しますのです。

（療法）療法としては膣灌注或は子宮頸部の亂刺または五乃至一〇プロセントのイヒチオー

ルを局部に塗布して、また同薬〇・五乃至一・〇を丸薬となして、一日三回に分服せしむるのであります。

慢性症にありましては、全身強壯療法を行ひますと共に二プロセント石炭酸水、〇・五プロセント、クレオリン水、一乃至二プロセント、フォルマリン水等を以て局處の洗滌を行ひます、それから近時白蠟と柯軻阿酪より爲れる小嚢（沃度ホルム〇・一五單寧酸〇・三或は酸化亞鉛〇・三次硝酸亞鉛〇・二を含む）を子宮腔に入れ、一二時の後歩行せしむると、藥液子宮全粘膜に蔓延して附着する方法を賞用する人もあります、また出血に對しては麥角（處方前掲）「ヒドラスチン」（〇・〇三乃至〇・〇五）を與へ、粘膜の増殖せるものには、粘膜搔爬法を行ひます。

慢性症の輕いのでしたならば、自家療養として膣内温湯灌注法を持長して行ふと效があります、それから交接は何れの場合に於ても嚴禁でありまして、折角癒りかけたのに、僅か一回の交接にて、再び白帶下又は出血を起して、病症を増惡ならしめた例は澤山にありますからよくよく注意を要するものであります、慢性病の極めて輕症なのは、事情が許したならば、湯治は大

層效能があります、そして温泉は成るべく鹽類泉を選ぶが宜しく、東京附近にては箱根の底倉、熱海の大湯、伊豆の伊東温泉、修善寺温泉、東山道方面では上州の伊香保温泉、下野の鹽原温泉などが適當であります。

（再發に就て）　慢性の子宮内膜炎は容易に癒らないばかりで無く、癒つてもまた動ともすると再發するものであります、何故再發し易いかと申しますと、内膜炎がありますと、必ず多少の實質炎があります、つまり内膜炎とか實質炎とかは醫者が解剖的に附けた名であつて、病氣の方から云ひますと、子宮に炎症を持つので、單に内膜とか實質とか云ふ風に區別して來るものではありません、それで其治療につきては、實質炎を伴ふた節には、多少の時日を要しても、實質炎の方を始めに治療し、腫れが無くなつてから、ツマリ内膜炎ばかりになつたと思ふ頃手術をしますと病氣は全治するのであります、併し若しも實質炎が尙ほ殘つて居る際に内膜の手術を行ひますと、一時は分泌物が無くなり、全快した樣に思はれましても、腫脹卽ち實質炎が殘つて居りますと、追々には慢性の炎症たる實質炎は内膜に及ぼして遂に又々内膜炎を起すこ

とになる、卽ち再發を來せるやうに見えるのであります。

それから今一つ再發の有力なる原因は、外でも無い、內膜炎の原因中最も多い處の淋毒であります、然も其淋毒たるや決して婦人一人にて湧き出るものではありませんので、十中の九分九厘まで、其相手たる男子より傳染するものであります、從つて婦人は傳染を受けて苦痛に堪へず、專門醫の治療を受けたる結果、一時否全く癒つたとしても、若し男子卽ち良人にして尙ほ全快せずに居つたとしますと、必ずや再び傳染して前同樣の徵候を起すのは明かであります、ですから、淋毒性の子宮內膜炎の場合には、婦人の治療をしますと同時に、一方其良人の方も診察を受けて、若し尙ほ病毒が殘つて居りますならば、唯一人のみ治療したばかりでは決して全治しませんから夫婦共に療治を加へ、必ず兩人を根治しなければ病毒を追ひ出すことは出來ませんものでありますから、吳々も此注意は大切であります。

子宮實質炎

（急性症の原因）子宮實質炎にも矢張急性と慢性とあります、急性症の原因となりますものは、第一には產褥時に於ける腐敗性傳染これは、間々全身症を起

して死亡に至ることのある恐しいものであります、次は月經に續發するもの、月經時に於る寒冒、または房事過度、勞働によつて外傷を起せるもの、醫師の粗暴なる診察、及び不潔なる器械の挿入等も皆原因となりますが、內膜炎同樣矢張淋病は最も多くの原因を爲すものであります。

（急性症の症候）急性の實質炎が起りますと先づ惡寒があり、時としては戰慄が起つてそれから熱が出ます、下腹や腰部にはひきつれるやうな痛み、幷びに壓すと反つて强くなる痛みが下腹にあります、また炎症が腹膜に及びますと、痛みは全腹に放線して少しの運動、咳嗽、噴嚏、談話の如き些時に於てさへも痛みが劇しくなり、腸や膀胱に甚しき障害を與へるものであります、それからまた月經時の寒冒の爲めに起つた實質炎でありますと、月經は俄然停止し、數日を經て再び急劇に顯れて來、一般に月經が少くなつて來るが、時には非常なる出血を來すものであります、そして本症の善良なる經過を取るもので、他に合併症の無き場合には、數日の後には痛みも熱も去つて了ひますが、淋病の爲めに起つたのですと、喇叭管や腹膜にまでも

炎症が及ぶことがあります。

（急性症の療法）　急性實質炎が起りましたならば、消炎法として患者を安靜に平臥せしめ、下腹部に氷嚢を貼して冷却するか、または下腹に水蛭を貼ます、それと同時に消毒性兼ねて冷却性の灌注を行ひ、止痛藥として阿片丁幾二十滴を毎二時間に服用せしめ、また子宮の亂刺、坐浴、下劑を與ふなど致します、併し月經に續發せるものにありましては、冷罨法に代ゆるに溫罨法を以てすることもあり、また攝氏五十度の溫湯を子宮に灌注しても宜しいのです。

（慢性症の原因）　慢性症は、前述の急性炎の吸收不充分にて起ることもありますが、其他正規分娩及び流產後の攝生を缺きたるとき、月經異常、子宮內膜炎に續發して起ることもあります、それからまた子宮の轉位或は變形殊に後屈及び脫垂、幷に子宮周圍炎も原因となるものであります、月經時の寒冒、甚しき興奮を伴へる反覆せる交接、受孕を妨ぐる爲めに射精前に中止せる交接、及び生殖不能の男子との交接並に反性逐情等も往々原因となり、消化障害、便秘等の如き下腹部の充血を來すことも矢張原因となるものであります。

（慢性症の症候）　本症は他の婦人病に見る如き生殖器に特異なる病的知覺あり、帶下は多量で、月經時には出血量が增し、月經は不順となつて疼痛を伴ひ、月に二三度も月經を見ることもあれば、月經間缺時にも血液の帶下があることが多いものであります、其他下腹部の異常痛、薦骨部の疼痛、偏頭痛、食思缺乏、消化不良、便秘等を來すものであります。

（豫防法）　豫防法としては便通を利するやう心がけ、月經來潮期近き少女には力めて運動を盛んにせしめ、月經時には充分攝生を守り、新婚の夫婦にあつては過房に涉らざる樣注意なし、產褥時の攝生は特に充分注意する等は其主なるものであります。

（慢性症の治療法）　患者は身體の安靜を守り、胃腸の機能を正しくなし、炎症ある時には腹部に冷罨法を行ひ、または二プロセントの溫石炭酸水の子宮灌注を行ふ、炎症稍消退せる時は、子宮頸部粘膜に亂切を行ひ瀉血せしむるなど其他爲すべき方法は澤山ありますが、多くの婦人は攝氏三十三度位の溫湯に少しく食鹽を入れたるものに、六分乃至十分間坐浴をなして非常に輕快を覺ゆるものであります、其經過長久のものには湯治または海水浴は大いに効があります、

食欲も少くまた經血も少きものには海水浴が効あり、これに反して經血は多量なるも食欲のあるものは含鐵溫泉に浴せしむるのが効があります、破瓜期に續發せる慢性症は鹽類泉を選ぶが宜しく、また甚しく衰弱せるものにあつては山地殊に森林地に轉地せしめて、新鮮なる空氣中に逍遙せしむるのが効があります、若しまた百方治療を施しても効の無いものでありましたならば、最後の手段として子宮頸切斷或は子宮頸の疾患部截除、また場合によりては子宮の全摘出を行はねばならぬことがあります、尤も此手術を行ひましても少しも障害が無く、局處の症狀が去ると共に、全身も非常に健全になることは諸家の均しく實驗せる處であります、兎に角本症は非常に緩慢なる經過を取るものでありますから、醫者も患者も其治療に大なる忍耐を要するものであるとともに、患者もまた種々の事柄に迷はされぬやう注意せねばなりませぬ。

子宮癌腫

（癌の統計）癌腫は人體中種々の場所に出來ますが、其中最も多く生ずる處は胃であつて、胃癌は實に癌腫總體の三分の一を占めて居るものであります、併し癌腫にかゝるものを男女の性によつて分けて見ますと、女子の方は男子よりも殆んど二倍に

達して居ります、これは女子には乳癌、子宮癌など云ふものが出來るからであります、そしてまた癌腫は何れの部を最も多く侵すかと申しますに、ア|氏の統計によつて見ますと、一般に癌にて死亡せしもの七千八百八十一人の中、子宮癌二千三百〇八人、乳癌一千二百三十二人、また|レ氏の統計によれば、癌腫に由つて死亡せる六千三百五十五人中子宮癌二十九、一プロセント、また我が佐藤勤也博士が一般癌患者千三百七十二人に就て統計したものを見まするに、子宮癌四百六十人卽ち二十三、五三プロセント（實用婦人科學第十二版による）となつて居りますから、先づ子宮癌は癌全體の三分の一を占めて居るものと見て差支がありません。

（原因）それから癌はどうして出來るか、卽ち癌の原因は何であるかと申しますと、それは寄生蟲によるとか、或は細菌によるとか、種々研究を試みた人があります、癌腫はなか〳〵多い病氣であり、また癌に罹つて死ぬものが多いだけに、學者間にはなか〳〵八ケましい問題になつて居りますが、悲しいかな未だ判然と解決はつきません、原因は不可解であります。

癌の眞相は不明でありますが、今日普通に行はるゝ說は、近世醫學の泰斗ウ|キルヒヨ|先生の

刺戟說であります、同先生の說によりますと、癌は刺戟によつて發生する、卽ち刺戟の多い處に發生するものであると、かういふのであります、成る程實際に就て見るに、癌の多く發生する處は刺戟の多い處である、假へば胃癌は食物によつて最も多く刺戟さるゝ胃、然も辛い物、濃い茶、酒等の刺戟物を多く用ゐる人に多い、舌癌は齲齒にて刺戟さるゝ處に出來、乳癌は乳兒が嚙むことの多い乳頭に多く出來ます、子宮癌もまた其例に洩れませんで、分娩或は交接に際して最も刺戟の多い子宮口に多く發生するものであり、尙ほまた分娩の回數と交接の關係を有するものであつて、子宮癌は同じ既婚者の中でも子供の多い、卽ちお產を度々した人に多く、これに反して未婚者の子宮癌は極めて稀であります、此等の關係もまた產の爲めの刺戟と見ることが出來るのであります。

（遺傳の關係）　次に癌は遺傳するかどうかと申しますに、これも未だ充分なる解決を待て居りませぬが、或る學者は、一家族中に三代の間に十六人の癌腫患者を見たと報告してあります、彼のセントヘレナで最後を遂げました蓋世の大英雄ナポレオンは、其父及び二人の妹も共に

癌腫で倒れて以來、血統を引くと云ふことは大に著明になりました、此一家癌で倒れるものは、癌家族と稱するものであります、現に英國皇室は此癌家族であると云ふので癌の療法に多大の懸賞をかけて居られます。

（年齡の關係）　癌の發生します年齡に就ては、二十歲以下には殆んど無いと云ふても宜しい位でありますが、二十歲から三十歲までには稀れに見られ、三十歲から四十歲までには可なり多くあります、最も多いのは四十歲より六十歲までの間にて、この年齡に發するものは總ての癌患者の十分の八以上を占めて居りますが、六十歲以上になるとまた減じて來ます。子宮癌も矢張此例に洩れませんで、殊に多いのは四十二歲より五十八歲までの間であります、此時期には月經閉止して生殖作用が停止するので、總ての生殖器が萎縮する時でありますから、從つて子宮癌も多く、月經閉止時期の攝生は大切であると云ふのは此關係であります。

（症狀）　同じ癌と云ひましても、病理學上からは種類があり、また子宮癌と云ひましても、臨床上には、胃部癌、頸部癌、體部癌と分けなければなりませぬが、其は專門家のすることで、